
Trivial Story

ヌッコロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Trivial Story

【Nコード】

N6087U

【作者名】

ヌッコロ

【あらすじ】

どこにでもあるファンタジーRPG。『ブック』の完成と魔王の討伐を目的とした話。かなりベタです…（汗）

0（前書き）

小説初挑戦でございます。

駄文や誤字だらけかと思いますが

生温い目で見守ってくれると幸いです。

この小説はフィクションです。

この小説に登場するあらゆるものは、架空のものであり、実在の物とは関係ありません。

万一、同名のものが実在し、気分を催した場合においても

当方ではその一切の責任を負いかねます。

ここは…どこにでもあるファンタジーRPGの世界。

この世界に住む者達は、『8種類の属性』に分けられており

日夜、その属性による抗争が続いている…

属性相性

炎：得意属性： 風・土・闇
弱点属性： 光・水・氷・雷

水：得意属性： 炎・光・土
弱点属性： 闇・雷・風・氷

風：得意属性： 水・氷・雷・光
弱点属性： 炎・闇・土

土：得意属性： 炎・雷・光・風
弱点属性： 水・氷・闇

雷：得意属性： 水・炎・闇
弱点属性： 光・風・土・氷

氷：得意属性： 炎・光・雷・水
弱点属性： 闇・風・光

光：得意属性： 闇・炎・雷・氷
弱点属性： 風・土・水

闇：得意属性： 氷・水・風・土
弱点属性： 光・雷・炎

- - - - -

やはり、ファンタジーRPGの世界には付き物の

世界の調和を乱す者…

『魔王』の出現により、世界のバランスが崩れ去っていた…

圧倒的な『魔王』の力の前に、人々は恐怖するばかりで、誰も挑戦する気にはならず

世界が滅ぶのは時間の問題であつた……

やりたい放題の『魔王』であつたが…

「ただ世界を滅ぼすだけではつまらん…」

その一言により、世界は大きく豹変した…

人間の中から極めて力が優れている者を厳選し

『ブック』という不思議な辞書を預けた。

「このブックには…世界中にばら撒かれた我の僕達が記帳される…

もし…このブックを完成させる事が出来れば、我と対等に戦えるかもしれない…」

魔王の僕、つまり、モンスター、魔族、悪魔……

人々に害を及ぼす知能を持った生物を倒す事により、自動的に記帳される仕組みである。

まさに、ファンタジーRPGには必要不可欠な『勇者』の育成を

『魔王』自らが行ったのである。

しかし…

力のない人々は、そんな冗談とも呼べる魔王の戯れであっても

「もしかすれば…魔王を倒せる人間が生まれるかもしれぬ…」

そんな期待を抱くしかなかったのであった…

それから…何十年と月日が流れ…

もはや秘宝と化した『ブック』であったが

遂に、その『ブック』の元に8人の若者が立ち上がったのだった…

……

0（後書き）

挿絵をちよいちよい挟んでいきますので

そついうの苦手な方は非表示にして置いてください。

1 - 1 (前書き)

> i 2 1 6 8 8
 2 9 2 7 <
 — 2 9 2 7 <

> i 2 1 6 8 9
 —

アキル^{II}アルシェース

1 - 1

ステータス - - - - -

名前： アキルⅡアルシエース

性別： 男

種族： 人間

年齢： 18

属性： 水

得意武器： 剣、大剣、短剣

タイプ： 前衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP (体力)： A

SP (潜在能力)： C

ATK（腕力）：A

SPD（素早さ）：C

DEX（器用さ）：D

INT（魔力、賢さ）：B

- - - - -
- - - - -
- - - - -

比較的、魔王の影響をあまり受けてない街『カステラ』

その為か街は栄え、人々は活気に包まれている。

しかし、1歩街の外へ出ると、

街を襲うタイミングを見計らっているモンスターの成群が群れている。

まるでアーケードの様に石段が規則的に敷かれ、草木や花が彩られている。

港には頻繁に貿易船が行き来し、商人の数も大陸一多い。

抗争とは無縁と主張しているかのようにも思えるが

門には、幾多のモンスターを倒してきたかのように見える屈強な護衛兵

酒場には、いつでも臨戦態勢が整っているかのように見える傭兵。

完璧な守りに定評があり、『鉄壁の街カステラ』と異名も付いているほどである。

そのカステラの街に、『ブック』が納めてあるという噂は、

冒険者達にとっては常識の範疇であり

街の至る所では冒険者が『ブック』に纏わる情報の聞き込みをしている。

そんなカステラの街に

また新たな冒険者が到着した……

「やっと陸地か…まじで船旅はだめだわ…」

少し船酔いをしている為か、やや青白くなった顔をした青年が港に降り立った。

丈夫そうな革製の鎧を身に包み

剣と呼ぶには少し刃渡りが短い『ダガーソード』と呼ばれる

一般的な戦闘用ナイフを装着している。

オレンジ色の髪を風に靡かせ

とりあえず落ち着くためにベンチを探しているようである。

「まじできちまったな……カステラ……」

やや不安が混じった表情で、栄えた街を観察している。

自分が生まれ育った農村とは、

天と地ほどの差があり『カステラ』の街の豊かさに圧倒されている
ようだ。

田舎者丸出しの青年は、

街の案内図の前まで移動し、どうしたものかと考えを巡らせる……

「宿屋…酒場…鍛冶屋…道具屋…教会……」

なんの情報もなし、

ただ噂だけで即行動に移してしまった自分の性を今更後悔し始める。

（困ったな……）

青年は頭をボリボリと掻きながら、まずは街の広場まで行ってみる
事にした。

1 - 1 (後書き)

カステラの街

> i 2 7 0 9 0
— 2 9 2 7
<

1 - 2 (前書き)

> i 2 6 7 5 4 — 2 9 2 7 <

クレア (猫人族)

「なんて… 人の数だ… まるで祭りでもしてるみたいだ……」

広場に着いた青年は改めて、カステラの町の豊かさに圧倒されている。

行き交う人々の多さもそうだが、

自分と似たような境遇の冒険者の数もとにかく多く

逆に自分の状況って珍しくもないのでは？と、開き直れるほどであった。

（なるほど… ここで情報交換とか… 聞き込みをするんだな…）

ベンチに避難し、人々を観察しているとなんとなく会話が聞こえてきたり

時たま『ブック』という単語も聞こえてくる事から

青年はやはり広場に着て正解だったと思い始める。

ふと…

広場の中央部に巨大な街の案内板が立ってあるのだが
その看板の近くに見慣れない種族がいる事に気づいた。

外見上は人間なのだが、人間よりも大きく突起した耳。

腰のあたりからは尻尾のような物が生えていて、

クネクネと自らの意思を持っているかのように動いている。

田舎者の青年だったがこの『亜人』は故郷でも見慣れており

ある程度の種族ならばその言語も話させるのだ。

「あれは…確か…猫人族だな…」

文字通り、猫耳と尻尾が人間にくつついたような外見で

人間よりも毛深く露出が高い衣類を身につけている。

よく手入れがされたような艶のある茶色の毛色である。

なんでこんな栄えた街にいるのかよりも

故郷でよく遊んだ猫人族を思い出し、懐かしい気分浸っていた。

（懐かしいなあ…確かああやって尻尾を左右に動かすと…）

「そうだ！困つてるときにああいう尻尾の動きするんだ！」

偶然見つけた猫人族はなにか困っているらしい…

青年はすぐに話を聞く為に猫人族の近くまで歩みを進めた。

「にゃーにゃにゃーにゃーにゃー（どうかしたのかい？）」

傍から見ればただの猫の鳴き声のような言語なのだが

青年の猫語は完璧だったらしく、すぐにその言葉に猫人族は反応した。

「うにゃーにゃんうーにゃにゃ？（にゃ？なんで猫語わかるのにや？）」

猫人族は自分の言語を話す青年に驚きながらも

ちゃんと会話出来る人がいた事に喜びながら表情を明るくさせた。

以後、猫語は省略します

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「俺の故郷には猫人族がいっぱいいたからね… ってそんな事よりも
なにか困ってるんじゃないのかい？」

「そうなのじゃ！ちょっと聞いてくれにゃ！あのにゃあ…」

『クレア』と名乗ったこの猫人族が言うには、この街の町長に用事
があつてきたらしいのだが

人語の文字が読めず、町長の居場所がどこかわからず途方に暮れて
いたらしい。

決して暇だったわけではないが、青年はなんとなく気持ちを察したらしく

町長宅と一緒に探す事に決めた。

しかし、案内板に町長宅が書いてあるはずもなく

町人に聞き込みをするハメになったのだった……

「ふん…それでアキラさんはこの街にきたのにや」

「だけど…あまりにも人が多くってな…」

「結構…無計画なのじゃ！あはははは！」

「そっ…それはお互い様だろう！」

「あうっ…そうなのじゃあ…」

一緒に町長宅を探す事で少しずつ打ち溶け合ってきたらしく

雑談も交えながら、それなりに楽しみながら行動できているようだ。

辺りはやや暗みがかかり、街の街頭にもポツポツと明かりがつき始めた。

夕刻。

アキルとクレアはやつとの事で町長宅を探し出し、2人は町長宅の目の前にいた。

1・3 (前書き)

> i 2 6 8 7 4 | 2 9 2 7 <

アルバート・イワレンコフ (町長)

クレアは町長になにかを手渡した。

チラッと見えたその物は、分厚い辞書のような本だった。

町長も中々、猫語が流暢であつたが

年老いた老人が猫語を話すという不可思議なシチュエーションに

アキルは笑いを堪えるので精一杯であつた。

「じゃあ俺はこれで…」

「ああ…アキルさんと言つたね？この子を無事に届けてくれて…
改めてありがとう…」

「ほんつつつとに！助かったのにゃあ…」

「いえいえ…たまたまでしたから…」

「君が冒険者である以上…ワシの家には必ずくるだろう…
その時を楽しみにしておるぞ…」

「え…？それはどういう意味ですか？」

「うにゃ！アキルさん！早く宿取らないと野宿なのにゃ！」

「あ…では…失礼します…」

意味深な町長の言葉にアキルは疑問を感じていたが、

クレアの現実味を帯びた言葉に我に返った。

野宿は避けたい！初日から最悪なフラグは絶対に立てない！

アキルは既に宿屋の場所を把握していた為、迷う事なく歩みを進めた。

「あのお…アキルさん？」

「ん？どうしたんだい？」

クレアが申し訳なさそうな声でアキルに話しかける。

「クレア……お金っていう物持っていないのにな…」

「ええ！？」

アキルは思わず腰がよろける。

まさかとは思っていたのだが、その通りなクレアの言動に声が裏返

ってしまう。

「クレアちゃん…そりゃ…野宿フラグだぞ？」

「うにゃ…クレア…お外で寝るのは慣れてるけど…
ここは地面が硬いのじゃあ……」

（さて…どうしたものか…）

亜人とは言え、女の子を外に寝かせるのはどうも嫌だ…

アキルは自分の財布を見ながら途方に暮れている。

（2人分宿泊する金はあるが…そうすると今後は…）

「うにゃ…今日は自分でなんとかするにゃ〜！
困らせちゃってごめんにゃ〜…」

止めとも思えるクレアの一言にアキルは…

「わかったわかった！今日は宿賃出してやるから！」

乗りかかった船？むしろ自分で足を突っ込んでしまったというやる
せなさを感じ

アキルはクレアの方まで払う事に……

「いらっしやいませ〜！お客さんお2人ですね？」

「はい…」

「お2人で200ゼニーになりますっ」

「はい…」

「ありがとうございますっ〜」お部屋は3階の6号室です〜どづ
ぞ〜ゆっくり〜」

「はい…」

（予想外に高かった…

俺の村じゃ宿屋なんて50ゼニーだぜ…倍とかまじで…）

この世界の通貨はゼニー

1ゼニー＝100円

.....

いきなり財布の中が涼しくなってしまった事で、

アキルはすっかり意気消沈してしまい、テンションが上がらない。

そんなアキルの表情を見ながらクレアも、すぐく申し訳なさそうに
言動を選んでいるように見える。

明日からどうしよう…

そう思ってしまうともう故郷に帰ろうか…

そこまで落ちてしまおうアキルだった。

「アキルさん…ありがとにゃあ…」

「いや…気にするな…」

「このお礼は絶対にするにゃあ」

「気にするなって！へーきだからさ？な？」

「かつ…体で払うにゃ！」

「えあ！？」

「ちよっ！クレアちゃん！ちよ！ちよ！ちよ！ちよ！」

「うにゃあ〜?」

「気持ちだけでいいから!全然いいから!」

「な?とりあえず!早く服をきてくれ!」

「しなくてもいいのかにゃ?」

「いい!いい!全然しなくていい!」

どこでこの子はこんな人間みたいな事覚えたんだか…

アキルはなんとかクレアを止めた。

既に疲労困憊の状態のアキルだが、目を放すとクレアは何をしでかすかわからない

(まるでこりゃ…保母さんじゃないか…)

ため息が先ほどから止まらないが、さっさと寝てしまえ!

猫人族は夜行性だと言う事もすっかり忘れて

アキルは狸寝入りを試みた。

「アキルさん…寝たのかにゃ？」

「……………」

「ほんとと言っちゃいけないんだけど…」

「……………」

「さっき町長さんに渡した物はね…？」

「……………」

「ブックなのにな…」

「えあつ！？」

アキルはその言葉に思わず飛び起きた。

自分が捜し求めていた物の名前もそうだが

まさかクレアが持っていたなど、有り得なさ過ぎて睡魔が消えてなくなった。

「クレアちゃん…なんでブックを…」

「うにゃ…今週…」

「うん…今週？」

「この街でブックをかけた武術会をするんだって…」

「武術…会？」

「うにゃ…つまりこの街で一番強い人を決めるから…」

「なるほどな…」

「一番強い人にブックの完成を任せたいって…町長さん言ってたにゃ…」

「俺もその…武術会に参加できるのかな？」

「ほんとは…武術会に出るには推薦人がいるんだけど…」

「推薦人が…」

「クレア…それしてあげるにゃ！」

「まじで？それは助かるけど…」

「うにゃ…これで今日のお礼って事で…いいかにゃ？」

「ああ…！すっごく嬉しいよ！クレアちゃん！まじナイス！」

「えへへ…よかったにゃ…」

予想外の展開にアキルは歓喜した。

まさか初日にかなり有力な情報を得られるとは思っていなかったのだ。

近日、街で開催されるという武術会…

一体どんな猛者達がくるのか…

数え切れないほどの期待と不安があるが

アキルはそのまま眠りについた……

2 - 1 (前書き)

> i 2 6 7 6 2 — 2 9 2 7 <
> i 2 6 8 1 6 — 2 9 2 7 <

ミズキ 〓 クロサワ
(黒澤 瑞希)

2 - 1

ステータス - - - - -

名前： ミズキクロサワ

性別： 女

種族： 人間

年齢： 22

属性： 闇

得意武器： 剣、大剣、短剣

タイプ： 前衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP (体力) : B

SP (潜在能力) : A

ATK（腕力）： C

SPD（素早さ）： S

DEX（器用さ）： A

INT（魔力、賢さ）： A

- - - - -
- - - - -
- - - - -

人々が行き交う雑踏の中、とある大金持ちの家から逃げ出してきたメイドがいる。

広場の案内板の前では若い男と猫のような亜人がなにか会話をしている。

ここはカステラの街。

『シガー』と呼ばれる煙草のような物を口に咥えながら

そのメイドは噴水の前で不機嫌そうな顔をしている。

つい先ほどまで仕事をしていたらしく、服装もそのままのコスチュームである。

美しい金髪が風に揺れ、凜とした顔付きで遠くを見つめている。

肩にかかるかかからないかという短めの髪なのだが

その存在感は通り過ぎる人の足を止めるほど美しい。

しかし、物騒な事に背中には

東方で作られていると言われている

『刀』と呼ばれる剣を背負っており、触らぬ神になんとやら…

決して誰も声をかけようとはしていない…

「煩い……」

一言、そのメイドはつぶやき

人気のない小道へと歩きだした…

街では近日行われるという武術会の事で持ちきりで

そのメイドの主の息子も参加すると言つ話である。

愛想笑いや、賞賛、鼓舞……

そんな毎日を送っていたのだったが

いい加減堪忍袋の緒が切れたらしいのだった。

「どーでもいい……」

メイドは今日、屋敷を出る決心をし、等々辞職してきたのだ。

しかし、職を失った今新たな就職先を探すとなると

中々至難であるらしい。

例の武術会の受付や、チラシ配りのアルバイトの求人腐るほどあるのだが

彼女は専ら接客と言う物に嫌気がさしている為、眼中にないようだ。

足元に一枚のチラシが、風に吹かれて飛んでくる。

「5万かぁ…」

（正直、ブックはどうでもいい…生きる為には金がいる…）

メイドはなにか決心をした顔で、武術会の受付先である場所へゆつくりと歩みを進めた。

手には剣ダコのような腫れ物が出来ており

外見とは裏腹に相当な剣術の腕前があるように見える。

すれ違った傭兵も、彼女のただならぬ雰囲気の前に思わず緊張を隠せない。

ふんっ！と鼻で燻し

横柄な態度で人ごみの中へ消えていった……

2 - 2 (前書き)

> i 2 6 7 6 7 — 2 9 2 7 <

暴漢 (雑魚)

「はい！了解致しました」
当日は推薦人の方とご同伴下さいませ」

「どうも……」

メイドは早々と受付を済ませた。

しかしここで問題が発生する。

（参ったな…推薦人とかどうしよう…）

彼女の実家はここ、カステラの街ではなくアキル同様に大陸外なので
気軽に推薦してくれる人は皆無なのである。

誰か適当な人を見つけなくてはならないのだが、それこそ至難である。

しかし、武術会当日まで必ず見つけなくてはならない為

彼女はなんとか本日中に安心したいと思案していたのだった。

「強引に喧嘩でも振るか…」

とんでもジャイアニズムな考えだが

手っ取り早い方法はそれしかない。

…となると彼女の行き先は酒場一択である。

（おっと…こんな格好じゃ行けないな…）

自分はまだメイドのコスチュームを着ていると気づきとりあえずは自宅へ帰る事に。

仕事はしていたものの、それほど稼ぎがなく

街外れのアパートに暮らしているのだが

郊外となるとやはり治安も悪く

引ったくりがあったり、酔っ払いが喧嘩を振ってくるのだ。

しかし、彼女場合。

護身用とは言え、背中の刀を見れば誰も喧嘩などを振るはずもないのだ。

ちょっとした裏ボス状態なのだが、彼女もそれに対しては

特に気に留める事もなく、平和？的でなによりだと納得しているらしい。

……路地裏で男女の話し声が聞こえる。

どこかのカップルがイチャついているんだろうと

気にも留めず通り過ぎようとしたが、なにやら空気がおかしい。

「……………て……………下さい……………」

「いいじゃねえか！じょーちゃん！」

彼女の耳に届いたのはそんな会話。

明らかにカップルの会話ではなく、むしろ暴漢に襲われてる図である。

少し気になった彼女は気持ち、歩く速度を緩める。

「人を呼びますよ！」

「呼んでみるよ！その前に俺が黙らせてやるからよ？」

（うん…これは…男の勝ちだな…）

そろそろ助けてやるか…

いつもなら気にも留めないのだが、彼女の気まぐれがここで発動した。

「昼間っから盛ってんじゃねえよタコ！」

「んだとコラア！誰だてめえ！」

彼女の一言に男の空気は豹変した。

「お前今何って言ったおい！」

「二度も言わすなタコ！って言ったんだよ！」

「てめえ！人を小馬鹿にしやがって！！！」

「お？…ほお…中々良い女じゃねえか…俺に相手して欲しかったのかおい！」

「なんの相手か知らんけど……アンタ…豚にそっくりだね！」

「んだとコラァ……！」

さすが、元メイドという事もあって相手の心理を付くのに長けている。

褒め上手という事は貶し上手でもあるという事である。

逆上した暴漢は、鉄バットと片手に構え今にも襲ってきそうな雰囲気醸し出す！

「おい！その眼鏡！離れてな！」

「はっ……はい……」

彼女も刀を構え、暴漢をけん制しつつ襲われていた女性と距離を取る。

「へへへ……謝るなら今だぜ？俺あ……ム力ついたら女でも容赦しねえぜ？」

「そう……奇遇ね？私もム力ついたら普通に殺せるわよ？」

「いちいち癪に障る女だな！この野郎……！」

暴漢は鉄バットを振り回しながら、いよいよ彼女に襲い掛かる！

（だめだこりゃ…素人すぎ…つまんね…）

鉄バットとは言え、直撃を受ければ脳震盪どころではない。

しかし、彼女はお構いなしに暴漢と距離を詰める！

暴漢が鉄バットを振り下ろす！

……が！

それよりも先に暴漢の両肘から先が後方へ飛んだ！

彼女が鞘から刀を抜き、閃光とも呼べるスピードで切り捨てたのだ！

「うあああああああ！！！！腕があああああああ！！」

悲鳴と呻き声が合わさったような声を張り上げ

暴漢は狂ったようにのた打ち回る。

「さあて……？死にたい？」

「ひっ……ひい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
いい いい
！！！！」

両腕が無くなった暴漢はその場から走りだし、視界から消えた。

(やっぱつまね…)

ため息をつきながら彼女は、その場から去ろうと刀を鞘にしまい歩き出そうと……

「あの……」

襲われていた女性が彼女を呼び止めた。

3 - 1 (前書き)

> i 2 1 7 9 3
— 2 9 2 7
<

> i 2 6 8 7 2
— 2 9 2 7
<

ミスズバートン

3 - 1

ステータス - - - - -

名前： ミスズバートン

性別： 女

種族： 人間

年齢： 20

属性： 炎

得意武器： 杖、鈍器

タイプ： 後衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP (体力) : C

SP (潜在能力) : S

ATK（腕力）：E

SPD（素早さ）：D

DEX（器用さ）：C

INT（魔力、賢さ）：S

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「じゃ…行つてきまあす」

「人ごみに気をつけるんだよ…」

「わかつてるよお婆ちゃん」

いわゆる薬屋。

怪我を癒したり、潜在能力を高めたりする薬品を取り扱っている店の裏口から

颯爽と出てきた金髪の娘。

「今日も良い天気♪」

今時誰も掛けないであろう丸眼鏡を掛けた娘が空を見ながら大きく伸びをする。

どうやら材料となる薬草やらモンスターの毒やら肉やらの買出しに出かける様である。

金髪の長い髪を真っ直ぐに下ろし、清楚な白い衣服を身に纏っている。

例の電気街でこの娘を見かけたら思わず「萌え〜」と……中略。

仕入先の店までは徒歩で20分ほどの距離があり

その間、人気がない路地を通らなくてはならない。

治安が悪い事は本人も理解しているため、適度に緊張を残しつつ早足で歩く。

特にぼろっとしてるわけではないのだが

表情の緩さからいつも暴漢に襲われたり、厄介事に巻き込まれるのだ。

「とにかく急がなくっちゃ……調合が間に合わないよぉ〜」

街は武術会が近いという事もあり、薬が飛ぶように売れる。

薬屋にとっては笑いが止まらない状況であるのだがとにかく忙しい。

彼女も一通りの調合技術には長けているのだが

ベテランの薬師から見るとやはりまだまだ未熟であるらしい。

しかし、若いという事もあり

買出しのほとんどを彼女に任せている現状なのだ。

薬屋の娘という事もあり

その血筋から、魔法の中でも珍しい『治療術』の才能が開花し始めている。

本人はまったく気づいてないのだが、魔法使いの視点から見るとやはり異端であるらしい。

「ここ通るの嫌なんだよなあ……」

広場から打って変わり、人気がない路地へ着く。

彼女の前方から少し太ったイカツイ男が近づいてくる。

(なるべく目を合わせないように……っと)

「んん!?!……良ゝい匂いがするなあゝ……」

すれ違い様に男は言葉を発する。

(ん?パンの匂いかな?)

彼女はその一言が気になり思わず足を止めた。

「初心なねえゝちゃんの香りだ……」

(あっ……)

「っと……」

あっという間に男に羽交い絞めにされ、彼女は身動きが取れなくな
った。

「あっ……あのお……」

「おおゝ……やっぱ……良い匂いだなおい!」

「すっ……すみません……先を急いでますので……」

「あゝ…たまらんなあ…!!」

いきなりピンチ。

むしろ…こんな簡単にこの男のペースになるなんて…

我ながらおっとりしすぎやねん!

…と、彼女は自分の性格を呪う。

「やっ…やめて下さい!」

「へへへ…いいじゃねえかよ!」

かなり乱暴に腕を捕まれ、自分の力では振りほどけない!

「人を…呼びますよ!」

「呼んでみるよ?その前に俺が呼べないようにしてやる!」

(うう…もうだめだ…)

力では適う相手ではない、かと言ってやめてくれるように説得が効きそうな相手でもない。

彼女の人生の中でもこんな危険な状況は数えるほどもない。

ほぼ諦め掛け、思わず目を瞑る。

意識的になにも聞こえないように男の声を拒絶する。

すると…

「なんだとコルア！！！！」

場にそぐわない男の咆哮が聞こえる。

彼女はそれに驚き目を開ける。

目の前では男に対峙するようにメイド服の女性が挑発している。

（え…？）

「その眼鏡！離れてな！」

「はっ…はい！！！」

振り絞るように返事をするのが精一杯な彼女は

なんとか男と女性から距離を取った。

その場の緊張と襲われていた興奮で意識がまどろむ中

事の成り行きを見守る。

「うわああああああ！腕がががああああああ！」

メイド服の女性が男の腕を遮断！

彼女は目を背けたが、あふれ出す血液が生生しく地面に広がる。

鉄分のあの独特な嫌な匂いが立ち込める。

思わず腰が抜け、更に嘔吐しかける。

男は走り出し、視界から消えたが

メイド服の女性は何事もなかったかのように刀を鞘に戻し

その場から去ろうとしていた。

彼女は自らを叱咤し、なんとか口を動かす！

「あっ…あの…」

それが精一杯の言葉だった…

「助けて頂き…ありがとうございます！」

彼女は深々と頭を下げた。

「あゝ…全然いいよ！次からは気をつけな？」

「あ…はい…すみません…」

自分とはおそらく正反對な性格のこの女性。

でもなんでメイドなんてしてたんだろ…

どっちかというこの人は傭兵向きだと思っけど…

「あの…怪我とか…してませんか？」

「してないしてない。へーきよ！」

「あの…お礼がしたいので…」

「いいからいいから！」

（あっ…）

彼女はすっかり買出しの事を忘れていた為、ふと…用事があった事を思い出す。

「すみません！あの…私…買出しの途中でしたので…」

「はいはい…」

再び頭を下げ、仕入れ先まで走り出そうとしたがまた足を止める。

「あの…もしよかったらお名前を…」

「…ミズキ」

「ミズキ…さんですね…今日はほんとにありがとうございました！
一生覚えておきますね！」

「あのさ…アタシはヒーローじゃないからさ？」

「私の中ではヒーローですから！では…これで…」

女性は困ったような顔をしながらも、少し頬のあたりが赤くなっていた。

「アンタも名前教えなよ…」

女性の言葉が届く前に彼女は仕入先へ走り出していた。

「いつもありがとねえ〜！ミスズちゃん！」

「いえいえ…こちらこそ助かってますよ〜」

挨拶もそこそこに、手早く品物を買い込み帰路へ向かう。

血溜まりがまだ乾いていない路地をなるべく視界に入らないように走る。

（ミスズさん…かつこよかったなあ…）

自分は剣技はおろか、調合すらも未熟で暴漢の1人も追い払えない…
かと言って、魔法も使えない…

（でも…争い事なんて…）

しかし、武術会で店の収益が鰻登りであり、争い事をネタに良い生活が出来ている事実。

（ちょっと考えちゃうな…）

走りながらミスズは自分なりになんとかしなくちゃと、考えを巡らせていた。

「ただいまあー！ごめんなさい！ちょっと遅くなっちゃって！」

「あらおかえり！早速調査にかかるから！ミスズは店番お願いね？」

「はあーい！」

自宅へ戻り、いつもの連携でミスズは会計場に向かう。

店内はそれほど狭くもないのだが、

買い物にきている傭兵や冒険者で溢れかえっている為

いつもよりも狭く感じてしまう。

特に売れるのは

傷を瞬時に治療してしまう薬品。次いで潜在能力を高める薬品である。

どちらも飲み薬である為、使用する側も手軽さと即効性を評価しており

モンスターなどと戦う場合には必須品と賞賛されるほどなのである。

何気なくミスズは店内を見渡すと……

「あ！」

つい先ほど、暴漢から救ってくれたミスズを発見する。

「ミスズさん！またお会いしましたね！」

既にメイド服ではなく、女性用のレオタードのような鎧に身を包んでいた。

「ああ…さつきの…」

「なにをお求めですか？」

営業スマイルなどではなく、再び出会えた事により

ミスズは自然な笑みを投げかける。

「ハイエリクサー…と言いたいところだけど…」

ちよつと持ち合わせがなくてね……」

「あ……ちよつと待つてくださいね!」

- - - - -
- - - - -

薬品 エリクサー

傷を治療する事が出来、更に疲れを完全に取り除く作用がある。

エクスエリクサー>ハイエリクサー>エリクサー

と、その癒せる度合いにより名称が異なる。

当然その度合いにより原材料も異なる為、値段も比例して高くなる。

- - - - -
- - - - -

ミスズは奥の在庫棚からエリクサーを紙袋にありったけ詰め込み

ミズキの元へ走り出す。

「これ……先ほどのお礼です!どうぞ使ってください!」

「え？いいの？これもらっちゃって…」

「私が調合したやつなんですけど…効き目が少し…」

「粗悪品って事？」

「そっ…そうですね…骨折や切り傷くらいなら…」

「でも…ただでもらえるのはすごく助かるよ！」

「いえいえ！こちらこそ助かりましたし！」

「あ…そうだ…まだ名前聞いてなかったよね？」

「あ…はい！私ミスズって言います。セカンドネームはバートンです」

「ミスズね…エリクサーありがと！次はちゃんと買うからね？」

「いえいえ！必要な時はまたお越し下さい！粗悪品ならいっぱいありますので…汗」

「あはは…覚えておくわ！」

やっとちゃんとしたお礼が出来た事でミスズは一安心できた。

ミスズもまさか自分が助けたミスズが、薬屋だったとは知らず

思わぬ収穫に驚いたが素直に良い事をしたと実感できた。

「これから…戦闘ですか？」

「まあね…オダルム平野で軽くな」

「最近オダルム平野で見慣れないモンスターが出ると聞くので…あの…」

「あはは…今度は私が心配されてんだ」

「気をつけて下さいね！」

「一応了解って言っとく！」

最初の印象はピリピリしてる人だと思ってたミスズだったが話をするにつれて、性格は違えど嫌いな人ではないと感じた。

「じゃ！お薬ありがとね！また！」

「あ！はい…また…お越し下さいね！」

早々とミスズは店を後にし、おそらくは戦闘に向かったと思われる。

（ここで一緒に連れてって言ったら…

迷惑だっ たらうな……)

ミスもなにかしら戦闘面での技術を取得したいと思いはじめていた
のだった……

1 - 4 (前書き)

オダルム平野のモンスター

> i 2 6 7 7 2 — 2 9 2 7 <
7 <

> i 2 6 7 7 4 — 2 9 2

ぶるぶるスライム

ミニゴースト

属性：水

属性：闇

武術会話を聞いた日から当日までは驚くほど早く時間が過ぎた。

当日までクレアとともに行動していたが、

2人分の宿賃はアキルにとって痛恨だったらしく

カステラの街からそう遠くない距離の

『オダルム平野』にて、モンスターを倒しその報酬やらで生計を立てていたのだった

オダルム平野に出現するモンスターはそれほど種類は多くなく

大半は未熟な冒険者に倒されるだけの存在であり

新米冒険者はこの雑魚モンスターを倒す事により成長していくのだ。

しかし、このモンスターから採取できる物体は良い薬の原料になったり

様々な用途で使われている為、冒険者から薬屋まで幅広く戦闘をしているのだ

当然アキルもその中に混じって戦闘を繰り返し、武術会までの繋ぎとして

戦闘の勘を養う分には申し分ない状況だったのだ。

しかし、そのモンスターから得られる経験は高が知れているので

実際成長しているかどうかは微妙なところなのである。

おそらくは大半が武術会の参加者と思われる為

アキルはその事も考慮し、なるべく自分の実力の大半を隠すように心掛けてたのだ。

その中、苦戦しそうな者のチェックも怠ってはいなかった。

（あの女剣士…おそらく俺よりも実力が上だ…）

アキルは数いる冒険者の中で1人。

自分が勝てないだろうと思われる相手も見つけていた為

今日、武術会当日はその事で頭がいっぱいになっているのだ。

（もっと強いモンスターと戦っておくべきだった…）

今更そんな後悔をしても遅く

遂に、武術会参加の募集が打ち切られ

武術会本戦への予選抽選が始まったのだった………

総勢100名によるブックをかけた武術会がいよいよ開幕した
舞台となるのは街の広場である。

本日はイベントが開催されている為、いつもは賑わってる広場も
人の整理がされ、かなり統制がとれている。

広場を囲むように観戦者や、医療班、不正が出来ないように

結界魔法が使える魔法使いなどがいる。

約100平方メートルほどの広場なので戦う分には充分すぎる広さ
を持っている

人数が多い為、何日かに分けてトーナメントを行うようである。

アキルの順番は5試合目で比較的早い為

観戦している余裕もなく

入念にストレッチをしている。

推薦者のクレアは観戦席で待機しているのだが

推薦者は最前列で観戦できる特権があるようで各々の選手を激励し

ている

しかし、かなり盛り上がってしまったので声が届くはずもないのだ。

- - - - -

試合のルール

1：基本的に魔法の使用は禁止

2：刃物の使用も禁止

3：相手を殺害した場合即失格

4：回復アイテム等の使用も禁止

- - - - -

以上の4つのルールを厳守した上でのフェアな試合となっている。

剣技を主体とするアキルは

支給された木刀での試合となる。

木刀といっても当たり所が悪ければ

充分に殺害できるほどの凶器である事には変わらないので

全力でぶつかりながらも細心の注意が必要となる。

アキルは何度も木刀で素振りをしながら

感触を確かめている。

他にも控えの選手が各々の準備を行っている。

おそらく今日は全ての1回戦が終わって終了する予定であると

受付から聞いていたので

アキルはなんとしても初戦は突破すると気合が入っているようだ。

ふと広場が騒がしい事に気づく…

なんと3試合目で事故が起きたようである

対戦相手を殺害してしまった者が出たようで

大会ルールによりその者が失格となった。

しかし、失格を不服とした選手が本部に猛抗議

更には逆上し、暴れ出したようなのだ。

すぐさま警備隊が駆けつけ取り押さえられ一件落着いたのだったが
早い段階で死者が出たという事で

アキルの緊張は更に加速してしまった。

必然的に4試合目の勝者は2回戦目は不戦勝という事で

4試合目はかなりの激戦となり

会場を盛り上がらせた。

木刀を操る選手と木製の棒で槍術を操る選手の試合なのだが

間合いの違いからやはり槍術の選手が試合を有利に進めていた。

しかし、剣術の選手が隙を突き、相手の懐に潜り込み

喉元に木刀を接触させたところで

槍術の選手が降参を宣言。

4試合目の終了となったのだった。

いよいよアキルの出番となり

アキルは広場に即席で設置された武舞台へと足を進めた。

1
-
6

5 試合目

$$\begin{array}{r} 27 < \\ > 21689 \\ & \underline{} \\ & 2927 < \end{array}$$
$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ & 2 \\ & 6 \\ & 8 \\ & 0 \\ & 8 \\ \hline & 2 \\ & 9 \end{array}$$

アキル

VS

タロー II アキツバ

属性：水

属性：風

[illegible]

武舞台の中央にはアキル、その対戦相手が各々向き合っている。

2人の間には審判が立ち、改めて大会ルールを両者に確認している。

田舎育ちのアキルの目には、自分の対戦相手の異端さが伝わってくる。

「以上！ルールを遵守した上でフェアな試合を心掛けて下さい！」

「では！予選5試合目！始めい！！！」

審判のその言葉と同時にアキルは木刀を中段に構える。

対戦相手は手に何も持つておらず、丸腰同然に見えるが…

おそらくは体術の使い手であるとアキルは判断し、

迂闊に相手の間合いに入らないようにジリジリと距離を詰めていく。

「あ！すっ…すみませえ〜ん…よろしく願います」

場にそぐわない相手の言葉にアキルは一瞬イラっとしたが

すぐに気持ちを切り替え

「っこい！…！」

自分に喝を入れるように気合を入れた声を上げる！

明らかに戦闘向きではない相手の体系であるが、

ふくよかな体からの体術を読む事はなかなか難しく

アキルは自分から仕掛ける事が出来ない！

ゆっくりとした動きで対戦相手は距離を詰めてきた！

まるで舞の様な動きでアキルは少々戸惑ったが

ぐつと堪え、待ちの姿勢を崩さない！

遂にアキルの間合いに対戦相手が侵入する！

「はぁ！！！！！！」

アキルは考えるよりも先に仕掛けた！

狙いは相手の肩部！

うまい具合に決まれば一撃で相手の戦意を喪失される事ができ

なによりも意外と痛い場所でもあるとアキルはわかっていたからだ。

相手の隙が出来た同時に跳躍し、真上から真っ直ぐ肩へ振り下ろす！

木刀が相手の肩に食い込む！

なにやら鈍い音がしたが、アキルはすぐに1歩後ろへ引き

相手の様子を見る！

「いだああああ！……！……痛い……！……！」

（えあ！？）

相手は蹲り悶絶している。

なんだか予想外の反応にアキルは急に体の力が抜けていく…

（よっ…よええ…）

その一撃が決定打となり

早々と対戦相手は降参を宣言した…

生真面目に戦闘を考察していたアキルは思わず苦笑いをしながら

武舞台を後にした…

思ったとおり武術会の盛り上がりは異常とも呼べるほどに盛況だ。

すでに何試合か済んでおり、

自分の出番を待っているミズキは退屈していた。

自分の目に留まるような猛者と呼べそうな相手がほとんどいない事もあり

ただでさえ待つ事が苦手なミズキのイライラが

そろそろピーク達しそうな勢いであったのだ。

当日、ミズキはミスズに推薦人になってももらえないかと誘ってみたところ

ミスズは快く引き受けてくれ、なんとか出場許可がもらえたのだった。

武術会当日までミスズはひたすら『オダルム平野』のモンスターと戦っていた為

ミスズとはそれほど会話もしていなかったのだ。

ミズキはウォームアップはおろか、支給された木刀すら触っておらずただ退屈そうに次々と対戦していく選手を眺めている。

（この分なら優勝も余裕そうだな…）

どこからその自信が沸くのかは闇の中であるが

彼女の絶対的な自信は揺らぐ事はないようである。

一流の使い手は、初めてみた相手の動きであつても

相手の実力がわかってしまうという…

まさにミズキもそんな状態であり

選手の初動ですぐに実力を読めるほどの洞察力が備わっている。

まだ予選が始まって間もないが

今のところ見た選手は全員勝てる！

…と、イメージトレーニングの様な妄想はしていたようである。

ミズズは観戦席にいるようなので、特に話す相手もないミズキは

ひたすら妄想に浸っていたのだった…

「では！5試合目！はじめい！！」

自分の出番は46試合目なので、まだ5試合かよ…

イライラしながらも傍観を決め込んでいるミズキだった。

（ん？）

現在の試合は5試合目。

また妄想に浸ろうとするミズキだったのだが

なかなか両者が動き出さない

しかし、片方選手からはまるで隙が伺えない。

（アタシの苦手なタイプだな…）

どちらかと言えば

ミズキは自分から攻め込むタイプなので

完璧な待ちの姿勢をとられると不利な状況に追い込まれる。

（もう片方はダメダメだ…ただの雑魚だな…）

あんなやつ、アタシなら一瞬で気絶させてやるのに…

などとブツブツ言いながらミズキはもう片方の選手との
シュミレーションを開始する。

小太りな選手が動きだし、やっと試合的なものが見られると
柄にもなくミズキは静観している。

素人の目にはおそらく一瞬何かが起こり

小太りな選手が蹲ったように見えただろうが

ミズキはその動きの一部始終を把握していた。

（強い…本物の剣なら…あのデブ死んでるぞ…）

(いや…アタシも結構今のは危なかった…避ける位置が逆だったら…)

「へっ…なかなかやるじゃないか！」

ミズキは緊張と同時にやっと猛者がいた事に喜びを露にした。

「アタシと当たるまで負けるんじゃないよ」

そついつてミズキは木刀を強く握り締めていた。

外はすっかり暗くなり、夜空から照らされる月明かりと街頭の光でなんとか見える状態である。

現在45試合目。

予選終了まで残り6試合となった。

しかし、武舞台はライトアップされ、試合がどこからでも見える状態に保たれている為

観戦者の数は相変わらず多い。

武術会の合間にミズキはミスズとともに

食事は済ませており

この試合が終わればやっと自分の出番だと

大きく伸びをしている。

対戦相手は自分の番までわからない仕様になっている為

初戦は意外と大番狂わせがおきたり

いきなり名勝負が行われたりと

ミズキも観戦している中それなりに楽しめていたようである。

以前のミズキの仕事先の息子は

初戦を鮮やかに突破し、まさか勝ちあがるとは思わなかったと

ミズキも少々驚いていたようだ。

「勝負あり！！！！」

どうやらなにか決定打を浴び、相手が気絶したようである。

対戦相手が気絶した場合は躊躇なくドクターストップがかかり

すぐに試合終了となるのだ。

観戦者から見ればこれまた中々の激戦だったらしく

大きな歓声が沸く。

しかしミズキにとってみれば低レベルな試合だったらしく

すでにどちらが勝つか解りきっていたようである。

「46試合目の選手は武舞台へお越し下さい！」

武術会役員が選手が控えてる場へ現れる。

（おもしろい相手だったらしいな…）

大きなあくびをしながらミズキは武舞台へと歩き出した。

女性の参加者もそれなりに多かったのだが

ミズキほど整った顔の女性はおらず、会場の男どもが歓喜の声をあげた。

「おおおおお！……！」

「おい！なんだあの美人は……！」

「相手のやつ……その子の顔に傷つけるなよおおお……！」

「あ……！もう煩えんだよお……！」

ミズキの一喝で場がしーんとなる。

束の間の静寂。

全身黒ずくめの相手は武器のような物は持っておらず、明らかに体術の使い手だと見て取れる。

明らかにその辺の雑魚ではない空気を醸し出していた。

$$\begin{array}{r} 2927 < \\ > \dot{1}26816 \\ \hline 2927 < \end{array}$$

クロカゲIIゲツコ

属性：氷

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

ミズキは相手の力量を分析。

88

どうやら相手はミズキの眼鏡に適ったようである。

「では！46試合目！！始めい！！！」

いよいよ戦う時がきた！

ミズキはすぐに頭を戦闘モードに切り替えた。

次の瞬間

ミズキは手に持っていた木刀を

相手に向かって投げつけた！

2
-
5

46 試合目

$$\begin{array}{r} 2927 < \\ & \begin{array}{r} > i \\ 226816 \\ \hline 2927 < \end{array} \end{array}$$
$$\begin{array}{r} > i \\ 2 \\ 6 \\ 8 \\ 1 \\ 7 \\ \hline \end{array}$$

ミズキ

V
S

クロカゲIIゲツコ

属性：闇

属性：氷

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

まるでレーザービームの如くまっすぐに木刀が飛んでいく！

間一髪で避けた対戦相手は視界からミズキが消えた事に気づいた！

刹那

米神に衝撃！

まるでなにかを叩きつけられたかのような痛み

なんとミズキは木刀を投げたと同時に走り出し

対戦相手の背後から肘打ちをヒットさせたのだった。

たまらずよろける相手……だが

まだミズキの猛攻は止まらなかった！

すぐに体勢を整えようと相手はミズキを視界の端で捕らえ

防御の姿勢を……

しかし

更にミズキは側面から足払いを放つ

裏を書かれた相手はたまらず尻餅をついた！

ミズキは丁度良い高さになった相手の延髄を狙って飛び膝蹴りを放った！

強烈な一撃

対戦相手は屈み込み胃の内容物を吐き出している。

決まりかと思われたが

ミズキは手ごたえがない事に気づき即座に木刀を拾い構えた。

「まさか体術で攻めてくるとはな…」

「効いちゃいないんだろう？そんなのわかってるよ！」

先ほどの猛攻のダメージがそれほど感じられないような

余裕を持った声で対戦相手は話しかけてきた。

「では今度はこちらの番だな…」

木刀を下段に構え今度はミズキが防御の姿勢をとった。

むしろ相手が打ってこれるようにわざと下段に構えたようにも見えるが…

ミズキの鮮やかな体術に会場は更に歓声に包まれていたが

2人の耳にはなにも聞こえておらず

脅威的な集中力を発揮しているようだ。

「痛いのは苦手か…？」

「ああ…大嫌いなさ！」

おそらく相手は体術のプロ

一撃一撃がかなりの威力なのはわかっている

身に包んだ装束は

東方の地に存在すると言われている暗殺部隊の証

『忍』

と呼ばれている戦闘のプロという事までミズキはしっかりと理解していた。

ミズキの顎から一滴の汗が滴り落ちる。

ポシャン

…と地面に汗の雫が到着したと同時に

忍は宙に舞った！

両手を何度も何度も組みなおし

まるで魔法の詠唱のような凡語をつぶやいている。

「おっ！おい！魔法の類は禁止なんだろう！」

「これは魔法ではない…立派な武術…『忍術』だ！」

屁理屈とも呼べる相手の返答にミズキはイラッとしたが

得体の知れない攻撃がくるとすぐに把握したミズキは

距離を取ろうとバックステップで後退する。

「受けてみよ！『水遁・氷弾の術！』」

忍の指先からまるで弾丸のように

氷の塊が無数にミズキに襲いかかった！

「おい！あれは魔法じゃないか！」

「禁じ手だぞ！相手を失格にしろお！！！」

たまらず会場から野次が飛ぶ。

武術会本部も今の忍の攻撃に頭を悩ませる。

最初の数十個の氷は木刀で叩き落としていたミズキだったが

あまりにも数が多すぎる為、すぐに回避行動に移っていた。

雹よりも大きく、まるでナイフのような氷の弾丸。

一発でも身体に触れれば

刃物で切られたかのように簡単に肉を裂けるほどの威力である。

「なかなかの動きだな…女にしておくには勿体ない…」

「こんな反則ギリギリみたいな戦い方をするアンタは男っぽくないね！」

氷の塊を避けながらもミズキはしっかりと相手の揚げ足を取る。

「やはりS P（潜在能力）を消費しているわけではないですね…」

「確かに…属性魔法の力が感じられません…」

「ふむ…ではあれは…」

「信じられませんが…体術の一種かと…」

議論の末、忍の術は反則ではないと判断され

試合は続行の意向が伝えられた。

「議論の末！この者の技は魔法ではないと判断されました！
観戦席の皆様！静粛に！」

審判が大きな声で叫んでいる。

しかし、それでも野次の声は止まらず

武舞台の中でも外でも波乱に包まれているのだった。

上空から雨の如く襲い掛かる氷塊を延々と避け続けていたミズキだったが

いい加減単調な作業に飽き飽きしてきていた。

忍は跳躍を繰り返し

一定の距離を保ちながら遠距離からの攻撃である為

なかなか反撃の機会が訪れない。

既に何箇所か

氷の刃が掠り

多少出血も目立ち始めていた。

（まじでイライラする相手だわ…）

まだ友人とは呼べないが

それなりに親しくしているミズズも見ていると言う事もあり

これ以上の失態は見せられないと

ミズキはなんとかこの状況を打開しようと思案していた。

「恐ろしい女だな…この状況の中、拙者に勝つ方法を考えると
…」

まるでミズキの心の中を見透かすように

忍は核心を突いた一言を浴びせる。

しかし、ミズキの動きが変わらない事を確認すると

（このまま『氷弾の術』を浴びせ続けられればいずれ力尽きる）

忍は自らの勝利を確信していた。

剣技や体術といった接近戦を主体とする使い手の

弱点とも呼べる遠距離からの攻撃は

一流の使い手でもしのぐ事で精一杯であろう状況であり

相手からの一方的な攻撃は

己の非力さをも助長させる。

「あゝもうござってえな!!!」

ミズキはなにを思ったか

氷塊を避けようとはせず、そのまま忍へ向かって走り出した！

更に腕や腹などに切り傷が増えていくが

それでも尚ミズキは前進をやめようとはしなかった。

「凄まじい闘気だな…」

ミズキの気迫に圧倒されかけた忍だったが

接近戦に持ち込まれれば

体術のスピード、更にはまだ未知数な剣技

その点ならば明らかに自分より上だと判断している為

更に距離を置こうとする。

しかし…

「よかろうっ…受けて立つ……が！」

再び忍は両手を何度も組み合わせ

詠唱のような動きを見せる！

「『水遁・氷結束縛の術』！！！！！」

ミズキの足元に散らばっていた氷塊が瞬時に溶け出し

まるで川のように武舞台に水の流れを作りだす！

「はぁ！！！！！」

更に忍は気合の入った声を張り上げる！

「なっ！」

ミズキの動きが完全に静止する…

なんと足元の『川』は一瞬で氷付き始め

その氷は膝下まで伸び完全に身動きが取れない状況になった。

まるで根のようにミズキの足は武舞台に張り付いてしまっている。

「勝つ為には手段を選ばぬのが忍！悪く思っなよ娘！」

忍は走り出しミズキの下腹部に強烈な拳打を繰り出す！

足が張り付いた状況のミズキは受身を取ることが出来ず

忍のサンドバック状態になってしまう。

何度も何度も強烈な一撃を食らうたびに

ミズキのHP（体力）は無くなっていく！

遂には内臓に傷がついたらしく

ミズキの口から少量の吐血が確認できる。

「降参するが良い…拙者、あまり女子を甚振るのは性に合わぬ…」

その忍の一言にミズキの消えかけていた闘志が再び沸き始める。

「……………ちょ……………じや……………ねえよ……………」

「なんと申した？」

「調子こいてんじゃねえよ!!!!!!!!!!!!!!」

瞬時にミズキの足元の氷が崩壊する。

瞬きする間もなく

忍のわき腹に木刀による横一文字が炸裂！

「ガハッ！……………なんと！」

ミズキは忍の攻撃を受けながらも

身を取り戻す為

少しづつ時間をかけ

尚且つ相手に気づかれぬように足元の氷を少しづつ破壊していたのだった。

前のめりになった忍の顎に

更にミズキの膝蹴りが閃光の如きスピードで突き刺さる！

膝蹴りによって仰け反る体勢になった忍の顔面に

想像したくもない踵落としが決まる！

踵落としの威力にプラス、重力、更には武舞台への落下

不可抗力をも味方につけた強烈な一撃で

忍はそのまま武舞台へ叩きつけられた。

更にもう一撃ミズキはなにかを放とうとしたが

既に白目を向き、口から泡を吹き

とても意識があるようには思えない忍の表情を確認すると攻撃を中断した。

「おい！審判！こいつ…気絶したぞ？」

その一言によりミズキの勝利が決定。

一回戦から思わぬ苦戦を強いられたミズキは

唾と一緒に微量の血を吐き出し武舞台を後にした……………

目の前に信じられない展開にミスズは困惑していた。

黒尽くめの衣装に身を包んだミスズの対戦相手は

なんと上空から氷の塊を浴びせ続けている。

それを当然のように避け続けるミスキもすごい！と思ったが

そんな事よりも少しづつミスキの身体から溢れ出す出血の方が気になって仕方ないのだった。

戦闘に関しては素人のミスズの目からしても

目の前の試合展開はとて1回戦で行われるものではなく

決勝とか準決勝とか

もつと後の方の試合展開だろうと思えるほど

今までの試合よりも断然ハイレベルな試合なのだ。

「ミスキさん！！頑張つてえー！」

なんて応援したらいいのかわからず、ミスズは精一杯声を投げつける。

試合開始時のミズキの優勢が信じられないほど

ミズキの苦痛に満ちた表情を見守るのは辛い。

ミズキの美貌に歓喜の声をあげていた男どもも

目の前の試合展開の前に

思わず応援の声が止まってしまっている。

「おい…あれ…やべえんじゃねのか？」

「あんな攻撃され続けたら…あの子…死んじまうぜ…」

もはや絶望にも似た落胆の声がボソボソと聞こえるほどであった。

しかし、ミスズは（ミズキさんならきつと勝つ）と

崇拜にも似た信頼がある為、ミズキが負けるなどと微塵も考えてないのだった。

「あつ…」

突如、目の前のミズキが走り出す！

なにか秘策でも見つけたのだろうか…

氷塊を恐れずに前進するミズキの勇氣に

ミスズはなにか熱いものを感じ始めていた。

……だが

そんなミスズの気持ちとは裏腹に

武舞台に散らばった氷が溶け出し

更には瞬時に氷結。

ミズキの膝のあたりまでカッチカチになった氷が張り付いている。

当然ミズキは身動きがとれそうもない状況に一変した。

「ありやあ…やばいぜ…」

「おい！ねーちゃんの相手！！なにをする気だ！！」

男どもは怒りにも似た叫び声を上げる。

ミスズは声を出す事も忘れ、先ほどから嫌な予感が脳内を過る事に困惑している。

「うわぁ…ひでえ…」

「おい！誰かやめさせろよ！！」

ミスズの対戦相手は身動きが取れなくなったミスズをひたすら殴り続けている……

もはや反撃など出来る状況ではないらしく

もっと傍にいれば

聞きたくもないミスズの苦痛な声が聞こえるだろうと思えるほど

一方的に殴りつけられている。

（こんな状況から…いくらミスズさんでも…）

ミスズは思わず目を背ける。

絶望にも似た感情が脳内を支配し始めているようである。

何分続いたのだろうか

もはや応援席からは

相手を罵倒する声も

ミズキを応援する声も聞こえない

（そんなまさか……）

ミスズは恐る恐る目を開き、武舞台を両手の隙間から覗く。

「調子こいてんじゃない？……！！！！！！」

ミズキの怒鳴り声が聞こえた。

それからの試合展開はまた一変した。

ミズキの猛攻が再び始まったのであった。

当然のように再び歓声が上がる。

「おおおおおおおお！」

「ねーちゃんそのままやっちまえ！！！」

「姉御と呼ばせてくれええええええええええ！！！」

（つたく…この男の人は…）

ミスズは男達にやや呆れた表情を作るが、満更でもない笑みを浮かべている。

かなりのダメージを受けていたはずなのだが

更にキレがある動きでミスズは攻撃を仕掛けていく！

「ミズキさん！勝ってええええ！！」

ミズズも回りに負けないように応援を開始する。

対戦相手が反撃してこないように見える事から

やはりまたミズキの優勢になっていると見てわかる。

バキッ イイイイイイイイイ！！！！！！

今まで聞いた事もないような衝撃音が響き渡った。

ミズキの対戦相手は仰向けなままピクリとも動かない…

いや、よく目を凝らしてみれば僅かに手足が痙攣してるように見える。

ミズキが対戦相手を指差しながら、審判になにかを呟いている。

「そこまで！！！！46試合！勝者はミズキ選手うう！！！！」

まるで騒音のような歓声が飛び交い、応援席はStanding ovationである。

- - - - -
S t a n d i n g o v a t i o n

観客が立ち上がって拍手を送ること。

- - - - -

「よくやった！ねーちゃん！！！」

「もう優勝でいいんじゃないのか！！！」

「あにゃー！！うにゃにゃーにゃあー！！！」

なにか猫の鳴き声のようなものも聞こえたが、

気にせずにミスズは思わず応援席を飛び出し

ミスズの元へ走り出していた。

場は変わって選手控え席。

「ミズキさん！いい試合でしたよー！！」

「はあ…はあ…そっ…そうかな？」

「エリクサー持ってきました！あ…粗悪品じゃないやつですよ！」

「あっ…ありがとっ…」

「感激しましたよー！私やばいかもって思っていましたし…」

「あはは…確かに…アタシもちよつとやばかったもん…」

「相手の方…気絶…ですよね？」

「たぶんね…殺してはいない…と思う」

「というかまさかミズキさん…体術も使えるだなんて思いませんでしたよー！」

「よくわかったわね…少しだけ習ってたから…」

「とにかく今日は…ゆっくり休んで下さい!」

「あのねえ…ミスズ…エリクサー飲んだら疲れなんて…」

「そっ…それでもよく休んで下さい!」

「世話焼き……」

「それでも結構です!」

「あはは…ちょっと…散歩付き合ってよ…」

「あ…はい!」

会話もそこそこに、ミズキとミスズは試合会場である広場から静かに離れていった…

武術会初日から既に2日が経った今

激戦を勝ち抜いた4名が武舞台の中央に並んでいる。

ベスト4。

その輝かしい名誉と脚光を浴びている4人の男女。

応援席や主賓、更には高いビルから望遠鏡で覗く人も現れ

誰が優勝するのか固唾を吞んで見守っているようである。

初戦の白熱具合が嘘のように

2回戦からはあっけないような…ややインパクトに欠けた試合が多かったのだが

素人の目から見てもこの4名の試合は目を見張るものがあり

壮絶な試合が見込まれているのだ。

「では…改めて！ベスト4の勇者達をご紹介します！」

審判もなかなかノリノリなようで

観客を煽る事必死である。

「まずはご存知！卓越した剣技は私達の心を奪い！尚且つ一撃必殺…

なんて痺れるんだこの野郎！アキル選手！」

> i 2 1 6 8 9 — 2 9 2 7 <

アキル

「よっ！待ってました！」

「にーちゃん！勝てよぉー！！」

「うにゃにゃー！ふしゃあー！！」

試合を勝ち抜き続け、それなりに応援者も増えてきたアキル。

未だかつてこれほどの注目を浴びた事がなく

妙にそわそわしている様子である。

「では一言！意気込みをどうぞ！」

「えあ！？」

突然審判に話を振られ、アタフタしてしまうアキル。

会場はドッと笑いに包まれ場は和んだように見える。

「とっ……とりあえず頑張ります！」

なんとか言葉を発することができたようである。

「えゝ……では続きまして！俺達はこんな娘を待っていた！美しい！そして強い！それはまさにストロングビューティーってまんまじゃねえかよ！ミズキ選手！」

> i 2 6 8 1 6 — 2 9 2 7 <

ミズキ

「おおおおおおお！」

「ミズキちゃん！！好きだあああ！」

「姉御おゝ！！！」

やはり男性のファンが多く付き、妙な空気を醸し出す。

本人は呆れたような表情で深いため息を吐いている。

「では！意気込みを！」

待っていたかのようにミズキは審判からマイクを引つ手繰る。

「勘違いするじゃねえよ！アタシは金が目当てなんだ！」

その一言にやはり男どもは予想通りの反応をする。

「かゝゝゝ！痺れるゝ痺れちゃうゝ」

「よっ！ツンデレ！！！！最高だぜ！」

はあゝ…

ミズキはマイクを審判に返し、やや疲れたような表情を見せた。

「他2名!」

「ちょー!」

「ちょっと!」

リアルタイムで聞いてた人間全員が椅子から転げ落ちた。

大会ルール説明もそこそこ

早々と4人の対戦カードが決まり、いよいよ武術会の準決勝が始まった。

「では！準決勝第一試合を始めますう！！！！！！」

大袈裟とも呼べる審判の掛け声と同時に

第一試合であるアキルはゆっくりと武舞台の中央へ歩き出した。

準決勝第一試合

> i 2 1 6 8 9	— 2 9 2 7 <	
7 9	— 2 9 2 7 <	
		> i 2 6 8

アキルⅡアルシェース VS リヨウⅡルーツ

属性：水 属性：雷

- - -
- - -
- - -

「はじめい！！！！！！」

戦闘を促す声と同時に

やはりアキルは木刀を中段に構え、防御の姿勢をとった。

対戦相手のリヨウ選手は上段に似た構えをとり、先手をかけようとしている。

これまでの試合から、アキルはこのリヨウ選手の戦い方を見てきたのだが

剣技と呼べるものではなく、ただ力任せに木刀を振り回しているだけ
そんなイメージが出来上がっていたのだ。

「よお……ニーチャン……オレッチの出方でも見てるのかい？」

「……………」

独特なリヨウの喋り方であるが、アキルは集中力を欠く事なく真つ直ぐに相手を見つめる。

「待たせて悪かったな？今いくからよお！！！！」

リヨウの表情が一変。

なんとも言えぬ殺気が込められた形相に変わった。

（くる……………）

アキルの緊張と興奮がピークに達する！

意外や意外。

リヨウの動きはアキルが把握している動きではない！

基本中の基本となるすり足、更には完璧な上段に木刀を構え、距離を詰めてくる！

（こいつ……今まで実力を隠してたのか……！）

じりじりと間合いが詰まり、互いの圏内に突入する。

「っ……っっおいいい……！！」

アキルは気合の入れた声を張り上げ、挑発と威圧を同時に放つ。

「いくぜおい……！！」

まずは上段から唐竹割り！

敵の狙いは右肩！

アキルは肉眼で木刀の軌道を読み、サイドステップでかわす！

「あめえ……んだぜ……！！」

間髪いれずアキルの避けた方向に横一文字斬りがくる！

「チッ！」

思わずアキルは跳躍し、上空に逃げる！

「まだまだだぜ！おい！！！！！」

上空に飛んだアキルの喉元目掛け、突きが飛んでくる！！！！

間一髪！！

アキルは右手で突きを払い除け、

着地と同時にリョウの伸びきった腕へ木刀を振り下ろす！

バキッ！

重力がプラスされた振り下ろしが決まった！！

「いてえなおい!!!」

リヨウ選手が体勢を整える前に

更にアキルは追撃を始める！

「勝機！」

肩部、脚部、上腕部と隙が出来た箇所へ怒涛の連撃！

滅多打ちと言っても過言ではないアキルの攻撃を

まともに防御する暇などあるはずもなく

全てがクリーンヒット!!!

たまらずリヨウ選手はうつ伏せに倒れる。

「効いたぜ…おい…」

ボソッとリヨウ選手の声が漏れる。

もう一撃…

どこかに決めればおそらくそれが決定打になるだろう

気合が入った声と同時にリヨウ選手は立ち上がり、木刀を構える！

「この野郎…！」

アキルはリヨウ選手の決して屈しない根性になにか熱いものを感じた。

すでに勝負ありと言っても過言ではないほどの傷を受けてはいるが決して木刀を離そうとせず、必ず立ち上がるリヨウ選手！

「男として…尊敬するよ…」

「なっ…なんて言ったデメエ…」

「次の一撃で…気絶させる！」

「やっ…やってみろコルア…！！！」

アキルは木刀を中段に構える。

「オルア…！！打って来いやあ…！！！」

俺はどこでも受け止めてやる！お前の攻撃など痛くも痒くもない！

まるでそう思わせるかのようにリヨウ選手は両手を広げ、挑発している。

「まっすぐ…俺は君の喉元に突きを入れるぞ！」

「おうおうおうおう…！やってみろやあ…！！」

アキルはなぜか次の1歩が中々踏み出せず、情けのような感情が沸き始めていた。

「オラア！どうした…！こないんならこっちからいくぜおい…！」

（まだその方が楽なのに…）

しかし、リヨウの木刀を持つ手は震え

立っているのもやっとであると思わせる傷の量である。

もはや反撃する体力がないのはわかりきっている。

「はああああ…！！！」

アキルは決心を決め、リヨウの喉元へ突きを繰り出す…！！

避けようとはしないリョウはまともに突きを受けた…！

しかし、アキルの木刀は

喉に当たるか当たらないかのギリギリの辺りで止まった。

「もう勝負はついてるだろ…降参してくれ…」

アキルの弱々しい声が空しく響く。

「甘え…んだよ…！」

リョウは力なく、そのまま大の字に倒れた。

「しよっ！勝負ありいいいい！！！」

すかさず審判が駆け寄り、アキルの勝利となった…

しかし、あと一撃が打てず

アキルは我ながら自分の未熟さ痛感し始めていた…

（おっ…俺にはできない…）

勝利の喜びを感じる事が出来ず

アキルは歓声にも応える事が出来ないまま

控え席へと戻っていった………

準決勝第一試合。

最後の決め手はアキルの喉元への突き！

歓声が沸き起こる中、ミズキも今の試合の一部始終を観察していた。

（ありゃあ…踏み込みが甘い…）

予想外とも思えるアキルの情の部分垣間見たミズキ。

（甘ちゃんかよ…）

おそらくは自分の決勝での相手であると

確信にも似た自信があるミズキは今の試合にはガツカリせざるを得ない感想であった。

（予想外…でもそこを突けばアイツは簡単に折れる…）

既に分析が終わっていたミズキは、戦う前から相手の弱点を導き出した。

「では！準決勝第二試合！選手は武舞台へお越し下さい！」

審判のアナウンスと同時にミズキは迷う事なく足を進める。

「ミズキさ〜ん！」

途中、ミスズが駆け寄り激励の声を浴びせる。

「絶対！決勝までいきましょうね！」

「そんなん…あつたりまえじゃん！」

「私！応援してますから！」

「あはは…心強いよ」

「勝ってくださいね！」

「わかってるよ！じゃ…私行かないと…」

「頑張れ〜ミズキさん！」

すっかり2人は仲も深まり、互いに打ち解け合えるまでの関係にな

つていた。

「では……大会ルールを厳守した上で……」

「準決勝第二試合！はじめええいいいい！！！！！」

準決勝第二試合

$$\begin{array}{r} 2927 < \\ > i \\ 226816 \\ & \underline{} \\ 2927 < \end{array}$$
$$\begin{array}{r} > i \\ 2 \\ 6 \\ 9 \\ 1 \\ 5 \\ \hline \end{array}$$

ミズキ

V
S

シュウ・チャラオ

属性：闇

属性：光

[illegible]

「まさか準決勝で元メイドに当たるなんてな……」

「まさか準決勝までモヤシ小僧が残るなんてな……」

どうやら二人は顔見知りらしい。

むしろ、対戦相手シユウ「チャラオの言動から

ミズキの元職場の息子らしい事がわかる。

「遠慮しないで打ってきたまえ！」

「あ…らしくもない一言ね？怖いなら怖いって言えばいいのに…」

「ははは…参ったな…」

なにやら朗らかな会話とともに試合が始まるうつとしていた……

4 - 1 (前書き)

> i 2 6 8 7 3
 — 2 9 2 7
 <

> i 2 6 9 1 5
 — 2 9 2 7
 <

シュウ●チャラオ

4 - 1

ステータス - - - - -

名前： シュウハチャラオ

性別： 男

種族： 人間

年齢： 24

属性： 光

得意武器： 槍、棒

タイプ： 中衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP (体力)： C

SP (潜在能力)： B

ATK（腕力）： B

SPD（素早さ）： A

DEX（器用さ）： S

INT（魔力、賢さ）： B

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おかえりなさいませ…」

「ただいま…」

いつもどおりの会話。

ここ、チャラオ家の屋敷でのいつもの風景。

カステラ街の中でも有数の大金持ちであり、

屋敷には当然のようにメイドが働いている。

チャラオ家の当主、ムハメッドⅡチャラオはカステラ街の港を建設

するにあたり

入り用な木材や石材などの材料を大量に保持していた為
そのままトントン拍子に富豪まで上り詰めた。

息子であるシュウ＝チャラオはそんな父親の下

甘い汁とも呼べるニート生活を満喫していたおぼっちゃまであり

学術や魔術、更には護身用の槍術などの教育を満遍なく

受けていたエリートでもあった。

容姿はどこにでもいそうな優男。

しかし、性格は……

父親の影響を直に受けているため横柄であり、わがまま。

ミズキに負けずとも劣らぬプライド。

人に厳しく、自分に優しいという……

そんなチャラオ家にごく最近、新しく1人のメイドの雇用が決まっ
てから

シュウ「チャラオの生活は激変したのだった……」

「ではミズキさん…？以上の事をしつかり頭に入れて…」

「はいはい…わかってますって！」

なにやら言葉遣いがよろしくないメイドが雇用された。

シュウはメイド長からそんな話を聞いていた。

一体なんの目的で親父はメイド増やしたんだか…

シュウにとってはどうでもよかった事らしく

さほどに気にしないように本日も庭で槍術の稽古に励んでいた。

槍術の才はもはや指導員の實力をも凌駕し、

「もはや稽古にもならぬ！」と息子に解雇を言い渡され

1人での地味な鍛錬に変更されていたのだ。

薬術は街の薬屋

バートン家の指導も受けたのだったが

「どうも調合は割りに合わない！」その一言で薬術は断念していた。

退屈な生活であったが、1人での鍛錬は集中できるという事もあり
シュウは僅かなその時間を大事にしていたのだった。

スコーーーン！

突如、後頭部に石が当たる。

「痛っ…！」

後頭部を撫でながら、シュウは石が飛んできたあたりを凝視する。

なんと1人のメイドがおそらくは仕事中有るのに関わらず

庭の一角でシガーを吹かしていた。

「おっ…おい！君！」

慌ててシュウはメイドに駆け寄る。

遠目ではよくわからなかったが近くで見ると

『美しい薔薇には棘がある』

まさにその言葉に相応しい端麗な容姿のメイドであるとすぐにわかった。

「なに？」

ぶっきら棒に應えるメイド。

（言葉遣いはどうした！）シュウはコッソリ心の中で突っ込みを入れるが

「いつ…いや…仕事中なのであろう？」

自分が言いたい事はすでに忘却の彼方。全く別な言葉が出た。

「きゅーけー中…見りゃわかるだろ？」

「そっ…そうか…失礼した…」

踵を返し、立ち去ろうとする……が！

（いやちょっと待て！）

すぐにまた振り返り、手に持っている石を見せ付ける。

「この石がこの辺りから飛んできたのだが…君…他に誰か見なかったかね？」

「あゝ…それ！アタシがぶつけた！」

思わず眩暈がしたシュウだったが、やはりこの娘の仕業だったのかと脳内で理解すると間髪いれず

（仕える身を弁えろ！）

心の中で叫んでみた。

「なに？なんか言いたい事ありそうな顔じゃん？」

自分は別に悪くない…まるでそう言ってるかのように

メイドは横柄な態度である。

「人に石をぶつけたらいかんだろう…」

「石にぶつかるほど集中できてないアンタも悪いと思うけど？」

いちいち揚げ足を取る娘。

「たっ…確かにそうではあるが…」

「アンタ…一人稽古が好きらしいけどさ…？」

自分が言葉を言い終わる前に娘は話を切り捨てる。

「足元が隙だらけ、目線が直線すぎ、それじゃ『ぶるぶるスライム』にも勝てないよ？」

指導員からも同じような指摘を受け、自分なりにそこを克服しようと思案しようとしていたところであった。

「そんな事…自分でもわかっている！余計なお世話だ！」

「アタシ…暇だから稽古付き合ってやるよ」

自分の予想の斜め上の言葉を投げつける娘。

メイドである事に変わりはないのだが

シュウの人生で初めて

父親以外に自分よりも上から目線で話す人間と出会ったような気がしたのだった…

ひよんな事から、メイドと一緒に稽古を開始したシュウだったがそれから数日後、父親から

近日、カステラ街主催の武術会が開催されるという情報がシュウの耳に届いた。

指導員とは違い、容赦ない指摘、更には手加減をしない一撃身体のところどころに痣を作っていたシュウ。

しかし、この稽古は実戦に近く

得られる経験も一人稽古よりかなり多い。

それなりに強くなっている実感が沸き始めたシュウは

武術会の参加の旨を父親に伝えたのだった。

父親にとっては予想通りの反応だったらしく

引き続きメイドとの稽古を快諾したのだった。

すっかりシユウの脳内では（メイドってなんだっけ？）と

奇妙な疑問も浮かんでいたのだったが

それよりもまず

稽古自体が楽しいと呼ぶには程遠いが

再び充実した稽古ができる喜びに浸っていたのだった。

「へえ〜…アンタが武術会にねえ〜…」

「うむ！だからどうしても俺はもっともっと精進しなくては…」

庭の一角でメイドがシガーを吸い終わるのを待ちながら

こつこつ時間も悪くないと思い始めていた。

「今日も指導をよろしく頼むぞ！」

「ふう〜…」

メイドはゆつくりと紫煙を吐きながら予想外の一言を放つ。

「嫌だ！」

「なっ…なんと！」

「だから嫌だと言っ たんだよ！」

「なぜだ！」

「アタシは人を傷つける為に稽古をつけた訳じゃない」

「では…なんの為に…！」

「暇つぶし！それだけ！」

「しっ…しかし！君の仕事はもはや俺の指導係である事に変わりない！」

「そう…」

「父上もそれは黙認している！俺に武術を教える事は……」

「気が変わったのさ！」

「つまり……仕事を放棄するって事か！」

「そうね……じゃっ！アタシ……メイドやめるわ」

「そういう問題じゃないだろう！」

「人の痛みってやつが知らんアンタに……いや……なんでもない……じやあね」

「まっ……待ちたまえ！」

気が変わった猫のようにメイドはその場を後にしたのだった。

もちろんそれ以来、シュウはそのメイドを見かける事なく

止むを得ず自主トレや、オダルム平野のモンスターを相手に稽古は続けていた。

[illegible]

最後に見た彼女の表情は

ツンとしているながらも

やや悲しさが混じったような……

なんとも言えぬ哀愁が混じったように感じた……

稽古なんてどうでもいい

俺は一言

もう少しだけ一緒にいてくれないかと

言いたくて仕方なかった……

再び一人稽古をしながらも

俺は彼女の事が忘れられなかった……

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

そして場は

再び武術会準決勝第二試合へと戻る………

2
-
8

準決勝第二試合

$$\begin{array}{r} 2927 < \\ & \begin{array}{r} > i \\ & 2 \\ & 6 \\ & 8 \\ & 1 \\ & 6 \\ \hline & 2927 < \end{array} \end{array}$$
$$\begin{array}{r} > i \\ 2 \\ 6 \\ 9 \\ 1 \\ 5 \\ \hline \end{array}$$

ミズキ

VS

シュウ||チャラオ

属性：闇

属性・光

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

（相変わらず直線的な攻撃だね…）

シュウの木の棒による突きを交わしながら、ミズキはいつか

稽古をつけていたときの事を思い出していた。

あれから1人でなんとか稽古らしいものはやっていたと感じられるのは

最初に指摘した『踏み込み』が完璧なものになっており

おそらくまともにこの突きを食らえば肋骨などは簡単に折れるであ
ろうと

思えるほど上達していたからだ。

でもやはり、ミズキにとってはまだまだ未熟以外のなにものでもなく
自分が指導を放棄した事とは別に

まだまだ実戦経験が足りない事で生まれる僅かな隙が
先ほどから見え隠れしているようである。

（そろそろ動くか）

避ける事すらめんどくさくなって来たミズキは
瞬時に身を屈め、足払いを放つ。

ドシン！

と予想通りシュウは尻餅をついた。

「ほら！足元！また忘れてるじゃないか！」

「痛っ…くっ…」

いつか言った事のある言葉を再び投げつける。

退屈な試合である事に変わりはないが

自然とミズキは笑みを浮かべている事から

それなり楽しんでいるように見える。

「ほらほら！さっさと起き上がりな！」

「わっ…わかってるさ！！」

数週間前の事がフラッシュバックし始める。

しかし、今回は指導などという生易しいものではなく試合。

起き上がるのを待つわけがないミズキは

シュウの顎を目掛けて蹴りを放つ。

バキッ！

鈍い音と同時にシュウは仰向けになる。

しかし、だいぶ体力はついたらしく、そのまま首跳ね起きで立ち上がる。

「参ったな…ちょっとは成長したと思ったんだが…」

悔しそうにつぶやきながらもシュウの表情は明るい。

「まだまだね…やっぱもうちょっと扱いておくべきだったかも…」

柄にもない事だが、ミズキ得意の挑発により

シュウは顔を赤くし再び槍を構える。

「まだまだあ……!!!!」

更にシュウの突きによるラッシュが浴びせられる。

(これじゃ……さっきと同じじゃないか！)

当然のように避けまくるミズキ。

多少イラッとしたがおそらくこれ以上

シュウが成長したところは見られないだろうと確信をついた。

足払いをすると見せかけたフェイントに

シュウは機敏に反応してしまったため

思わず決定的な隙を生んでしまう。

そんな巨大な隙をミズキが見逃すはずもなく

あえて木刀ではなく自らの拳打でシュウの鳩尾に強烈な一撃を放った！

「ガハッ……!!」

たった一撃…

しかし、シュウにとっては致命的な一撃だったらしくそのまま悶絶。

「武術会終わったら稽古やり直しだね…」

「なっ……」

稽古が終わってから時折見せたあの懐かしい笑顔を再び見れたシュウは

「よっ…よろしく…頼む…」

悔しさと嬉しさが混じった表情でうつすらと目に涙を浮かべながら

そのまま気絶した。

「勝者！！！！ミズキ選手！」

相変わらずの歓声にミズキはうんざりしながら

事もあるつにシュウを抱きかかえ、医務班の元へ歩き出した。

予想外とも思えるミズキの行動に男どもは歓喜！

「おい！その色男！！！！」

「ある意味お前の勝ちだったな！！！！」

「羨ましすぎるぞおおおおお！！」

もはやミズキの耳に歓声は届いていないようである。

1 - 10

決勝

>	i	2	1	6	8	9	—	2	9	2	7	<	>	i	2	6	8	1	6
—	2	9	2	7	<														

アキル

V S

ミズキ

属性：水

属性：闇

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

両者、束の間の休息を挟み。

すぐに武舞台の上で向かい合っていた。

長かった武術会の決勝。

両者の実力は観客も、これまでの対戦相手も納得するものがあり

どんな激戦になるのか期待に包まれている。

まさにトリと呼ぶに相応しい決勝戦。

審判もいつもより気合が入ったアナウンスで会場を沸かせる。

対する二人も

互いの実力は各々把握しているため

ピリピリと緊張感が伝わって着ている。

「では… 武術会決勝戦！！はあゝゝじめえいいいい！！」

どこからそんな声を出した！？と突っ込みを入れなくなるような

審判の掛け声とともに両者は木刀を構えた！

相変わらずアキルは中段に構え、防御の姿勢を取る。

対するミズキは『無形の位』と呼ばれる姿勢。

傍から見ればただ右手にだらんと木刀をつかんでいるだけの形に見えるが

これは変幻自在に攻撃にも防御にも転じれる立派な構えなのである。

おそらくはミズキから仕掛けてくると

アキルは読みを働かせ、隙が出来次第攻撃に転じる

言わばカウンターのような戦いを主軸に展開するだろう…

観客も審判も…アキルの戦い方はすでにわかりきっている…

ミズキすらもそういうイメージがハッキリできている為

そのまま迷わず走り出したアキルに一同は驚愕した。

「はあ……!!」

ただ真っ直ぐに

肩口を狙った袈裟切り！

なんのひねりもない単純な攻撃。

紙一重でかわすミズキ。

初めてのアキルの動きに多少戸惑ったが

間髪いれず得意の体術で応戦！

アキルの動きが止まりきる前に

遠心力を利用した回し蹴りを放った！！！！

避けようがない一撃である！

しかし、アキルも目の端でミズキを捕らえ

反射的に後ろへ飛ぶ！

やや貯めが必要となったため僅かに蹴りを掠ったようであるが

特に大したダメージにもならず、アキルは再び中段に構えを取った！

接戦。

互いの攻撃はなかなか当たらず、実力はほぼ互角。

両者とも冷静さを失う事なく

隙あれば一撃で決めにいこうと次の行動に移る。

決勝に相応しい試合運びとなっている。

どちらが勝つのかよりも

どちらが勝ってもおかしくない納得の内容であり

観客達のテンションもピークを迎える。

しかし、思わぬ展開で決勝戦はあっけなく中断された。

「たっ…大変です！！！魔族に門が突破されましたあ！！！！！」

カステラの門を警備している守備隊長が血相を変えて走ってくる。

戦慄とも呼べるまさかの展開。

クモの子を散らしたかのように観客達は逃げ回る。

「皆さん落ち着いて下さい！慌てないで教会へ避難して下さい！」

審判も必死にマイクを使い、避難経路を説明する。

こんなときの為に待機している傭兵部隊は

すでに門へ向かったらしい。

思わぬ展開で試合を止められたアキルとミズキ。

「ミズキさん…試合途中で申し訳ないけど…俺…門に行ってみます」

おそらくオダルム平野の雑魚よりも遥かに強い魔族が
強襲していると思われる。

アキルはやや不安を感じ始めていた。

前方を走っているミズキの表情はわからないが

きっと彼女もそれなりになにかを感じているのではないかと思える。

「絶対に無理はしちゃだめですよ！」

「余計な事考えるな！さっさと気持ち切り替えな！」

ミズキの一言によりアキルは

改めて彼女の強さを理解する。

そうこうしているうちに2人は門へ到着する。

二人の目の前に映った光景は

今まで味わった事のない恐怖を感じるには

充分すぎるほどに戦慄と化していた………

1-12 (前書き)

強襲してきたモンスター

> i 2 6 9 4 2 — 2 9 2 7 <

> i 2 6 9 4 3 — 2 9 2 7 <

(BOSSモンスター)

トーフゴレム

ダイーズファイター

属性：土

属性：風

巨大な姿のモンスターを筆頭に

それに比べれば小さいが人間よりも2回りほど小さな

まるで豆のようなモンスターが無数に展開。

おそらく豆腐のような巨大なモンスターが指揮官であり

豆のようなモンスターはその部下にあたるポジションかと思われる。

統率力などと言う言葉はまるで意味を成さず

ただの立ち向かってくる傭兵達を

非道とも呼べる不意打ちや

モンスターならではの人間離れした動きで確実に命を奪う。

見た目からはそれほど重さを感じられない巨大なモンスターだが

その一撃の破壊力は凄まじく

まるで門が豆腐のように簡単に破壊されている。

その巨体から繰り出される一撃は

まともに受けてしまえばおそらくは即死。

既に何名かの護衛達は

巨大なモンスターの一撃により

まるでつぶれたトマトのように

地面に張り付いている。

辺りは血の匂いが立ち込め

徐々に悲鳴や咆哮が聞こえなくなってきた事から

明らかにカステラ側の劣勢だと言う事がわかる。

「おい！アタシはあのかいのを相手する！アンタは小さいの頼んだ！」

「1人じゃ無理だ！なにか作戦を立てないと！」

「作戦なんて通用する相手じゃない！アタシがやられたら迷わず

逃げな！」

「ちよっ…ちよっと！ミズキさん！！！」

ミズキは迷わず巨大なモンスターへ走り出す。

自分もそんな勇気があれば…

アキルは迷わず死に近い相手を選ぶミズキの強さを改めて痛感する…が

モンスター達は新たな敵が現れた事を察知し

アキルとミズキに襲い掛かってきた！！！！

「うおおおおおお！！！！！」

アキルは『ダガーソード』を抜き、構える。

アキルの視界に映り込んできた豆のようなモンスターの数は3体。

気を抜けば殺される。

試合とは違い相手は完全に殺す気で向かってきているのは言わずとも知れている。

（情けを捨てる……油断をするな……確実に殺さなければこちらが殺される！！）

「手を貸すぜ！にーちゃん！」

アキルは視線だけを声の方へ向ける。

そこにはアキルが準決勝で戦った相手

リヨウ＝ルーツがいた！

「助かるよ……共に闘おう！」

「バカ野郎！モンスターに集中しやがれ！」

「すっ……すみません……」

自分より実力は低いが

自分よりも男としては格上であり

自分にはない根性があるリョウの叱咤を受け

アキルは完全に戦闘モードへ切り替わった！

激しくぶつかる武器と武器！

予想以上にモンスターの力は強い。

まるで鉛筆を思わせるモンスターの武器であるが

ごく一般的な剣となんら変わりのない重量感。

少しでもかすれば簡単に腕ごと持っていかれそうなので切れ味も良
さそうだ。

木刀よりも使い慣れたダガーソードではあるが

先ほどまで使っていた木刀の間合いが腕にこびり付いている為

アキルは防戦一方である。

なかなか自分から仕掛ける事ができず、ひたすらモンスターの攻撃を防御している。

「この後に及んで玩具みてえなブツを使ってやがる！」

リヨウは闘いながら、アキルの戦闘を視界に捕らえる。

準決勝で見たアキルの意外とも呼べた弱点。

情。

戦闘では明らかに枷となる致命的な弱点。

「おい！小僧！こいつを使え！」

リヨウはアキルにダガーソードよりも尺が長く

木刀とさほど変わらない長さであり

切れ味も申し分なしの剣「ミスリルソード」を投げた。

[illegible]

ミスリルソード

カステラの街では剣の中で最高峰と呼べる一品。

ミスリルという非常に希少価値がある鉱物を精錬により鍛え上げ触れただけで肉を裂き骨を絶つと言われるほど切れ味は凄まじい。

冒険者の憧れとも言えるほど値段もそれなりに高い。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アキルはすぐにミスリルソードを拾い、やっと本調子を取り戻す。

（チツ…危なっかしいなあい…）

リヨウはこれでもう大丈夫だと判断したらしく戦闘に集中する。

アキルはそれから、今までの動きが嘘のように確実に一体つつ倒していく…！

しかし、何体倒してしてもまるで数が減っているように思えず

次から次へとダイーズファイターは群れてくる！

(くそお…こんなに数がいるとは…)

やや疲れも見え出したアキルは

己の体力との戦いでもあると自分に言い聞かせ

ひたすらモンスターを殲滅していく!!

ミズキは視界に巨大なモンスターを捕らえる。

まるで豆腐のように白い質感を持っているモンスターには

目を呼べるものがついてはいないが

向かってくるミズキに気づいたようである。

走りながらもミズキは愛刀『紅時雨』を振り回し

ダイーズファイターの何体かは屠り去っている。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

紅時雨

ミズキの愛刀。ミズキの故郷である『ジャパング』の街で作られている剣。

熟練の名鍛冶師しか作られる事を許されていない。

初心者から熟練した冒険者まで幅広く愛用する事が多い。

どんな人間が使っても血の雨を降らせる事が出来るという例えから
紅時雨の名がついており、使い勝手は素晴らしい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ミズキを捕らえたと同時に巨大なモンスター『トーフゴーレム』は
真っ直ぐ押しつぶすかのように一撃を振り下ろす！

巨体からは想像もできない早さの一撃ではあったが
戦闘慣れしたミズキにとって避けるのは容易い。

当然のようにサイドステップでかわし、すぐに切り込みにいく！

まず狙いは足元！

（これ以上の進軍は許さん！）

ガチーーーーーン!!!!!!

まるで鉄に思いっきり斬りつけたかのような金属音が響く。

予想外の手ごたえにミズキは驚愕している。

同時に腕に電気が走ったかのような痺れを残す。

「なんて硬さだ……」

まるでこちらの攻撃など効いているようには見えず

すぐさまトーフドールームは次の一撃を放ってきた……！！

「チッ……！！」

当然それも読んでいたミズキであつたが

これまた予想外の光景に困惑する。

おそらく目測で10メートル前後のトーフドールームであるが

その天辺と思われる場所から

更に無数のダイーズファイターが振ってきた！

（なるほど…こいつがこの豆野郎の媒体か…）

ミズキのその勘は的中。

トーフゴーレムは自ら体内でダイーズファイターを生成する事が出来頭に当たる場所から放出する事が可能なモンスターなのである。

「こいつを倒さなければ…」

しかし、ミズキの斬撃は通用するはずもなく

現状、ミズキ単体でトーフゴーレムを倒すのは不可能。

斬撃が効かないというのは同時に

ミズキ得意の体術も効く訳がない。

「一体…どうすれば…」

一太刀の元、同時に2、3体のダイーズファイターを切り伏せながら

ミズキは頭をフル回転し始める。

「水遁・氷弾の術！！！！！」

ミズキの真後ろから聞き覚えのある声が聞こえる。

無数の氷塊がトーフゴーレムを襲うが

まるでダメージが通らず

無常にもトーフゴーレムの足元に氷が散らばる。

「加勢するぞ娘よ！」

その男はミズキが初戦で闘った相手。

特徴的な黒い装束に身を包んだ『忍』であった。

「どう読む？」

「外殻が硬い鎧で覆われているものほど、中身は脆いものである」

「そうか！あの豆野郎の射出口の内部からならば！」

「そういう事だ…娘よ！いけるか？」

「わからない…だが！やるしかない」

「ふっ…娘よ臆するな！お主ならやってくれと拙者は信じている」

「変な期待するんじゃないよ！」

「こいつの動きは拙者が必ず食い止める！娘よ！任せたぞ！」

忍の知恵を借り、ミズキはやっとトーフゴーレムの打開策を見出す。
おそらく忍は自分の動きを封じたあの技で

このデカブツの動きを封じるだろう……

ミズキはまずトーフゴーレムの頭を目指すため

すでに倒壊している門へ走った！

「ふう……では参るぞ！」

すかさず忍は印と呼ばれる詠唱に似ている動きを見せる。

「水遁・氷結束縛の術!!!!!!」

すでにトーフゴーレムには充分すぎる量の氷が

散開しているため、例の『川』を作り出すのは容易だった。

「かつ！！！！！！！！！！」

気合の入った声と同時に一瞬にしてトーフゴーレムの足元に川が集まり

巨大な氷柱が出現する。

（娘よ…この氷柱はそれほど持たぬぞ…）

忍はとりあえず降ってくるダイーズファイターの殲滅を開始した！

遠目でもわかるように

例の忍の技でトーフゴーレムは足止めを食らっている。

まさかあれほど巨大な氷柱すら形成できるとは思っていなかったミズキだったが

（もしあれを初戦でやられていたら勝負ありだっただろう…）

思った事は予想の斜め上である。

兎にも角にもトーフゴーレムの動きは止まった。

このチャンスを逃せば勝機は薄い。

さっさと倒さなければ更なる被害が生まれる事は目に見えている。

やっとの事で視界にトーフゴーレムの頂上を確認した。

同時にミズキの対岸に当たる倒壊した門の上に

見慣れた姿の人間を確認した。

「あいつ……」

そこにいたのはアキルだった……

自分は豆野郎を任せたつもりだったが……

しかし、正直単身でトーフゴーレムの体内に潜入するのは

さすがのミズキも少々の不安を感じていたらしく

思わずホッと安堵のため息をついた。

「おい！お前！」

「ミズキさん！わかってますよ！こいつの内部から……………」

「チツ…足手まといになるんじゃないよ！！！」

ミズキは跳躍し、トーフゴーレムの頂上へ着地する。

アキルも同じように着地した。

真っ白に見えたトーフゴーレムだが

頂上は打って変わって黒い模様が施されている。

まるで、冷奴にかかった醤油のような模様である。

「あそこだ！！！」

次から次へとダイーズファイターが射出されている場所をすぐに見

つける。

「アタシの予想だと射出されるタイミングは約5分毎…」

「じゃあこの射出が終わったら突入するんですね？」

「そうなる…」

ミズキの不安は大体アキルもわかっていた。

内部の構造がわからないため

もし、突入しても必ず倒せるという保障はなく

最悪な場合

そのまま5分が経過し、ダイースファイターと一緒に外に吐き出されるかもしれない。

「だが、このままだと確実にアタシらは殺される」

「俺が…先に突入します！」

「あん？」

「ミズキさんは俺の後に状況を見て判断してください」

「何言ってんだお前…」

「俺よりもミズキさんが生きてたほうが、もし失敗してもなんとかしてくれる…俺はそう思っていますから！」

「ばっ…バカな事言ってるんじゃない…」

「射出が終わりましたよ！………じゃ後ほど！」

甘チャンだとばかり思っていたアキルは

迷う事なく射出口から内部へ突入した。

確かに、アキルが入ったあと5分間

射出がなければにかしらの勝機を見つけたという事になる。

しかし、自分よりも過小評価しているアキルにそれを出来るほどの力があるのか…

ミズキは葛藤しながら

今まで味わった事のない5分間を待つことに決めた。

（一体どんなモンスターに強襲されているのかな…）

ミスズは逃げながらふと、門へ走り去ったミスズの後ろ姿を思い出す。

瞬時に自分がなにをするべきか判断し

迷わず行動に移したミスズは

やっぱり尊敬できるし、頼れるし…

それに比べ自分は避難のお手伝い。

これもかなり重要な仕事だとは思うが

改めて自分の非力さを呪うミスズ。

こういう時の為に

自分の店を訪れてくる冒険者達や傭兵達は毎日の鍛錬に励んでいる。

力がない自分に出来る事はただ逃げるだけ

自分が行ったところでそれこそ足手まといにしかねない。

でも自分はこれでも薬屋の娘！

それなりに医療の知識はある。

怪我を見ればすぐに的確な薬を選ぶことは出来るし

材料さえあればその場で調合する事も出来る。

（せめて…今戦ってくれてる人達にお薬を届けてあげよう…）

力強く拳を握り締め、ミスズは自宅へ走り出した。

こういう時の為に薬の在庫は多くしているものだ。

「瀕死の人がいたら迷わず持って行きなさい」

お婆ちゃんもきつとそう言うだろう。

門が突破されたという知らせからかなりの時間が経つ。

しかし未だに安全が確保されたという知らせはないため

現在も混戦中なのはわかる。

そんな修羅場と化した戦場に赴くのはミスズにとっては初めての体験であり

すでに何名かの死者を出しているカステラの門に到着したミスズは

思わず涙が止まらず、自分の目的を見失ってしまった。

「ひどい……」

トーフゴーレムの一撃によりもはや原型を留めていない死体。

ダイースファイターの大群からの滅多切りにされた肉塊同然の血だらけの死体。

先日、暴漢から襲われた事なんかよりも

目の前の光景は吐き気がするほどに酷い。

「だっ…誰かいませんか！お薬を届けにきました……」

自らを奮い立たせ、なんとか言葉をかけてみるが

全く返答はなく、突如襲われる孤独感がミスズを支配していった。

「ばっ…バカ野郎…大きな声を…」

どこからか細い声が聞こえたような気がした。

おそらくは瀕死のダメージを受けているであろうその声を

ミスズはしっかりと耳で捕らえた。

「今助けますから!!」

その声が聞こえたあたりにミスズは動き出そうと視線を動かした……

「キャッ!」

思わず小さな悲鳴を上げる。

ミスズが見つけたのは負傷者などではなく

まるで豆から手足が生えたような奇妙な物体。

しかも、一体という生易しい数ではなく大群。

思わず悲鳴を上げてしまったミスズを見つけたダイーズファイターは

怒涛の如く走りだし、攻撃を仕掛けてきたのだった！！

「いいかい？ミスズ？いつ街にモンスターが襲ってくるかわからない…その時の為に力がないものでも戦える術があるんだよ…」

「それって私でも出来るのな？お婆ちゃん…」

「魔法つてもものはきっかけさえあれば誰でも使える…」

「きっかけ？」

「そう…大切な相手を守りたい時…自分の身に真の危機が迫ったとき…そりゃあいくらでもきっかけはあるさね…」

「真の危機……？」

「ないに越した事はないが…もしもの時に覚えておくと良い……」

「え？なにこの分厚い本……」

「毎日寝る前でいいから…この本をよく読んでおきなさい……」

「あう……うん…わかったよお……」

- - - - -

待つという事を知らないモンスターはミスズに近づいてくる！

きつと会話を楽しもうなどという雰囲気ではなく

明らかにその辺に転がっている死者と同じように

残虐非道な攻撃を仕掛けてくるだろうと思われる……

ミスズはふと…

いつか祖母に教わった事を思い出す……

「魔法ってものはきつかけさえあれば誰でも使える……」

今こそそのきつかけ。

真の危機であるはず！

ミスズの属性は炎。

祖母に渡された『魔法全書』と呼ばれる本にも

しっかり炎の魔法の記述はあった…

全8属性の魔法には基礎というものがあり

始まりの魔法として各属性の一番最初のページに記載されている。

言われたとおり毎日読んでいたミスズは炎属性の始まりのページを思い出していた。

うる覚えではあるが

口に出し、しっかりと『詠唱』を始めた！！！！

「世界を構築する八大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ……」

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

……

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり……

その名は炎、その役は剣……

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ………」

『詠唱』とともにミスズの全身から炎を表す赤い光が放たれる！！

（さあ…唱えよ…偉大なる炎に選ばれし使者よ…
そなたに炎の契約を致す…我の名は……………）

ミスズの心に何者かが語りかける。

これもしつかりと『魔法全書』に記載されていた通りだった…

ミスズの長い髪が逆立ち、更に赤い光が眩く放たれる！！！！

目を見開き、心に話しかけてきた者の名前を声に乗せる！

「炎の始まり…」

それは光にして邪を滅する初めての光…

その者の名は……

裁きの鉄槌を下す炎の化身……

F i a m m a ! ! !
L

[illegible]

F i a m m a
読み（フィアンマ）

炎属性初等魔法

魔力の度合いにより範囲は異なるが、拳ほどの炎の塊を放出する攻撃魔法。

[illegible]

ミスズの手の平から、拳ほどの大きさの炎が出現！

間髪いれず、その炎の塊は目の前のダイズファイターへ飛んでいく!!!

「ぎゃあああうぎゃああああああ！！！！」

たまらずダイースファイターは悲鳴をあげ転がり回る！

属性の相性により、炎属性は風属性に強く

炎の威力は約2倍ほど威力を増す！

しかし、一体ではなく複数、ダイースファイターがいるため

ミスズは躊躇なく次々と炎の塊を放った！！！！

ミスズの身体から赤い光が消えてなくなり

ヘナヘナと、ミスズはその場に座り込む。

「でっ…出来た……」

視界に捕らえたダイースファイターを全て

真っ黒な消し炭のような姿へ変えたミスズは

初めての魔法の反動により

しばらく立つ事すら出来ず

自分も戦える……

やっとミズキさんの役に立てるかもしれない……

そんな喜びに耽っていたのだ……

シュウの目線の先では

1人の女性が赤い光を放ち

両手の平から炎の塊を出現させ、次々とモンスターを焼き払っていた。

確かこの娘は

準決勝で戦ったミズキの推薦者だったかと思われる。

初めて実戦で魔法を使う者を見たシュウは

驚きと感動に包まれていたが

そんな余韻に浸っている暇などなく

突如その場で座り込んでしまった娘へ迷わず走り出していた。

「おっ…おい！平気か？」

「はい…私…初めて魔法を使ってしまったのでちょっと…疲れ…」

「初めてだったのか…」

「そんな事よりも近くに負傷者がいます…私ちょっと動けそうにないのでこれを…」

「あ…ああ！」

シュウも魔法をいくつか使えるのだが

明らかにこの娘が異端だと思える点に驚きを隠せなかったのだ。

『魔法』は己の潜在能力を高め、魔力を帯びた物質を媒体とし

各属性の初期魔法と契約する事で初めて発動が許される。

シュウはもちろん、魔法を使う者ならば常識とも言っている魔法の基本。

しかし、この娘は武器のようなものは持つておらず丸腰に近い。

（自分の潜在能力だけで魔法を発動させた…だと…）

それが意味する事などシュウにはわかるはずもなく

その時点では魔法は奥が深い

そう思う事で無理やり納得せざるを得なかった。

「あの辺りにいると思いますので……」

娘からハイエリクサーを受け取ったシュウは

娘が指を指した方向へ向かって声を投げかける

「無事なら返事してくれ！今薬を持っていく！」

「……………」

返答はない。

すでに力尽き、息絶えてしまったのだろうか……

最悪な事態を想定しながらシュウは周辺を探索する。

「誰か！生きている者はいないのか……！」

声を荒げ、必死に探索する。

「……………野郎…見つかるぞ……………」

もはや声とも呼べない、か細い囁きのような声をしっかりと耳で捕らえた。

すぐに声を主を発見することが出来た。

「大丈夫か！ほら…ハイエリクサーだ！」

「……………すまねえな……………」

そこに全身血だらけで、生きている事が不思議だと思われるほどの重症を負っていたのは

シュウもつい先ほど、準決勝で見た相手

リョウ・ルーツであった。

「ふう…助かったぜニーチャン……………」

「それはよかった……………」

「オレツチはもう平気だ…それよりもさっきネーチャンが…」

「ああ…つい先ほど無事を確認した」

「オレツチは再び豆野郎をぶつ殺しに行く！ニーチャンはネーチャンを守ってやれ」

「わっ…わかった！無理はするなよ！」

「ケッ…野郎に心配されても嬉しくねえんだよ！」

まだ戦えるコンディションではないようだが…

リヨウはすぐに武器を構え、戦場へと走り出した。

シウは先ほど薬を受け取った娘の下へ踵を返し走り出した。

「彼なら無事だった…また戦いに向かったよ」

「そうですか…それはよかった…」

「ここにいたら危険だ…手を貸してやろう」

「あ…大丈夫です…私重いですから…」

「今そんな事言ってる場合じゃないだろう…」

「はい…」

シユウは娘を背負い、とりあえずは物陰まで移動させた。

「シユウさんでしたっけ…？」

「ああ…」

「確かミズキさんの元職場の…」

「ああ…そうだ…そういえば彼女の姿が見えないが…？」

「私もミズキさんを探しにきたのですが…」

「まだ混戦中という事か…なあに彼女の事だ！そう簡単には死なないだろう」

「私もそう思っていますが…」

「それは戦った俺がよくわかってる！安心しろ…彼女は絶対に死なん」

「はい…そうですね…」

なんとか励ましに似た声をかけることで娘を安心させる事が出来た。
しかし、まだそのへんから新たなモンスターが襲撃してくるかもしれないので

それなりに周囲の警戒はしているようだ。

「ちなみに…君の名は？」

「あつ…申し遅れました…私はミスズと言います！セカンドネームはバートンです」

「ミスズか…なっ！バートンだと！？」

「なにか？」

「いいや…なんでもない…」

シュウの頭の中で

先ほどの異端な魔法の説明を裏付ける決定的な答えが導き出された。

バートン家は先祖代々、薬学と魔術の知識に長けている。

ミスズの祖母にあたる『イリアルド・バートン』は

カステラの街の魔法使いの『母』とも呼ばれているほどの大魔道師である。

その血筋ならば魔力が生まれつき高い事も当然であり

更に子孫と言う事で更に進化した魔法を打てる事も可能なのかもしれない…

シュウはミスズの潜在能力に無限の可能性を見たが…

同時にこの娘を失うと言う事は

今後のカステラの街の魔法使いの存亡に関わるのではないか

大袈裟かと思われるが

絶対にこの娘を死なせてはいけない

そう確固たる決意が固まる理由には充分すぎるほどであった。

（少々自分には荷が重いかもしれない…）

シュウは自分の実力を過大評価はしていない

むしろ、趣味のような鍛錬の毎日であったため

おそらくは先ほど重症を負っていたリョウよりも実力は低いであろうと

自分の中で判断しているようだ。

雑談を交えながら、敵の襲撃に備える2人だったが

とうとう視線の先に、先ほどミスズが倒したモンスターが現れた。

まるで豆から手足が生えたような異形の姿。

ダイースファイター再びである！！

「よっ…よし！あいつらは俺が相手をする！ミスズは動いたら迷わず逃げろ！」

「私だってまだ戦えます！守られてばかりじゃ…強くなれません

から！」

「わかった…じゃあ…援護は任せたぞ！」

「はい！やってみます！」

シュウは持参した槍『ミスリルスピア』を構え、モンスターの意識を自分に全て向けさせる。

- - - - -

ミスリルスピア

ミスリルソードと同様に、カステラの街では最高峰の槍。

長さは約2メートル。一般的な槍と比べれば短い方ではあるが

その分小回りが利くように応用されたと言っても過言ではないほどに

使い勝手は驚くほど良好らしい。

余談ではあるが原材料のミスリル鉱石には本来光属性の力が宿っており

同属性の者が使用することで更なる追加効果が発揮される。

- - - - -

「っこい！！！！」

ぎこちなく、シュウは戦闘モードに切り替える。

後方ではミスズがやっとの事で立ち上がり

同じように視線をモンスターに向けている。

シュウの咆哮に気付いたダイズファイターは

嵐の如く散開し、波状攻撃をかけようと陣形を形成する。

同時複数に攻撃すれば目標を仕留められる可能性は高い。

戦闘の知識はいくらモンスターと言えど、基本的な事は生まれつき備わっているようである。

本来槍術は

1：1に特化された戦闘方法であり

1：複数となると対処する術は皆無。

一瞬で倒されてしまうかもしれないというリスクはある。

しかし、どちらかと言えばシュウの戦闘方法は

こんな事態を想定していたかのように

戦闘時に槍術と魔法を組み合わせた方法である。

まだまだ未熟ではあるが、徐々に天賦の才を見せ始めてきているのだ

ミスズの詠唱が始まる。

同時にシュウは走り出し、少しでも敵の注意を自分に向けさせようと槍を振り回す。

（まずは敵の陣形を崩す！）

シュウの目線の先に捕らえているダイーズファイターの数は5！

すでに囲むようにシュウの周りに展開している。

まだ後方のミスズには気付いていないようである。

シュウの動きが止まったと同時に

波状攻撃が開始されるであろう。

シユウは槍を振り回しながら自分も詠唱を開始する。

シユウの身体のまわりから光を表す白い光が放たれた！

「万物の象徴たる始まりの光……」

それは…悪しき者をも照らす鏡……

不浄なる輩に聖なる光の輝きを見せん…

リュミエール
L u m i e r e ! ! !

- - - - -

L u m i e r e 読み（リュミエール）

光属性初期魔法

光の粒子を集め、眩き光を放つ。ダメージを与える事は出来ないが

同時複数の視力を奪う事が出来る牽制魔法。

- - - - -

シュウとそのまわりにいるモンスターを

眩しすぎるほどの光が包む！

一瞬にして現れた光は

ダイーズファイターの視力を奪う！！！！

「はぁぁぁぁぁ！！！！」

すかさずシュウは槍を構え、一撃の下まづは1匹の身体にミスリルスピアを貫通させた！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

悲鳴と同時に息絶えたのを確認し、次々とダイーズファイターを葬り去っていく。

まだ視力が戻らないダイーズファイター達はまさに

シュウに殺されるのを待つだけのようには棒立ちである。

「炎の始まり…」

それは光にして邪を滅する初めての光…

その者の名は……………

裁きの鉄槌を下す炎の化身……

F i a m m a ! ! ! !

轟音と共に炎の塊がミスズがいた方向から飛んでくる!!

まだ手を付けてないダイーズファイターにヒット!!

更に炎の塊は次々にダイーズファイターを消し炭へと変えていく!!

一瞬にして5体のダイーズファイターを撃破したシュウとミスズ。

「ふう…なんとかなるもんだな…」

「はあ…はあ…ちよつと私限界かも…」

目が虚ろになっているミスズは

どうやら相当のSPを消費したらしく足元がふらついている。

「次襲われるまで…ちよつと休憩しておくか」

「そつ…そうですね…」

こんな状態で自ら戦いに行くのは危険だと判断したシュウは

ミスズが回復するまでの時間

まわりの警戒を怠る事はなかった……

? - 1

「はい…予定通り順調に4名の人間が成長しております」

「属性は……？」

「はい…水、闇、光、炎の4名です」

「ふむ…承知した」

「トーフゴーレムが殲滅されるのも時間の問題かと…」

「ふははは…結構結構…それでこそ育てがいがあると言つもの…」

「闇の者は…僅かに邪心が見られましたが…」

「強いか…？」

「はい…ここカステラではおそらく最強の人間でございます…」

「ふむ…興味深い…」

「では…すぐに洗脳を？」

「まあまあ…もう少し育てておきたい…」

「はい…」

「近隣の樹海にトレントキングを配置せよ」

「え…もうトレントキングをですか…」

「うむ…それを倒すほど成長した後、闇の者を配下に加える」

「御意！そろそろ戻らねば怪しまれますので私はこれで…」

「ふふふ…そうか…では引き続き監視を怠るな…」

「御意」

（中継するのも疲れるにやあ…）

いつもの表情に戻ったクレアは教会へと歩いていった。

ダイーズファイターの射出口から

トーフゴーレムの内部に潜入したアキル。

しかし内部は道というものがあるはずもなく

ただ真っ直ぐ下に落ちるのみだったが

ようやく下方にダイーズファイターの母体ともいえそうな

内臓のような器官を発見した。

中で次から次へと豆のような物体が生成され

徐々に形作られていく。

これを破壊すればとりあえず無尽蔵に体外に射出されるダイーズファイターの数は

激減し、これ以上の被害は減るはず

アキルは剣を構え、いともたやすく真っ二つに切り裂いた！

「これでよし…」

しかし、内部も固い表皮で覆われ

どこを斬ってもまるで鉄のような感触である。

ミスリルソードの切れ味でもなお

傷一つ入らない硬さなのだ。

物理攻撃ではなく、魔法による攻撃ならばダメージは通るのだろうか…

しかし、アキルは魔法は使えない。

どうやらアキルは元々、剣士の子孫であり潜在能力は高くないらしい。

「どうしたものか…」

体内という事もあり生々しい匂いと

完全に漆黒というわけでもないが

目を凝らさなければ目の前ですらよく見えない視界の悪さである。

きつとどこかにこのトーフゴーレムの弱点…

つまり人間で言うところの心臓に当たる器官があるはず！

アキルは手探りをしながら

更に体内へと足を進める。

不思議と人一人ならばなんとか歩けるような道のような構造になっており

着実に奥へ進めている。

ふと…奥の方が妙に明るい。

そこから光が漏れている。

きつとあそこは目に当たる位置なのではないかと断定し

アキルはすぐに光の方へ足を進める。

「ケケケ…よくきたな人間…」

アキルの目の前にいるのは豆のような形をした魔族。

しかし、ダイーズファイターとは違い、一回り以上身体が大きい。

「貴様は…！」

「察しの通りここはトーフゴーレムの司令室…まあ…操縦席とでも言おうか…」

「貴様がここでこのでかいやつを操縦していたのか！」

「まあ…そういう事だ…これも魔王様の命令なのでな？」

「ここにきてしまった以上…俺がはいそうですかと見逃すとも思つか？」

「ケケケ…やはりそうくるか人間！面白い…受けて立とうではないか」

おそらくは魔王直属の魔族。

ダイーズファイターや、オダルム平野のモンスターより数段は格上だと思われる相手

ただならぬこの魔族の雰囲気にはアキルはやや冷や汗が流れる。

「多少派手にやってもトーフゴーレムの内部壁はビクともせんよ…」

そういつて魔族は魔法の詠唱を始めた……

（こいつ…魔法も使うのか！）

「詠唱なんてさせるか！！」

アキルはなんとか阻止すべく走りだし、まずは横一文字に斬りつける！！

しかし、アキルの斬撃は空を切り、まるで手ごたえがない！

「意外と…気が短え〜んだな…」

人を馬鹿にしたような笑い声と同時に

魔族はやや後方から出現する。

「せっかく良いものを見せてあげようと思ったんだがな…」

不適な笑みを浮かべながら、魔族の身体のまわりには風を表す緑色の光が放たれる！

（まっ！まずい！！）

瞬時に距離を置こうとするが…

それよりも早く魔族の魔法が炸裂する！！

「詠唱破棄…こりゃ魔族の中じゃ…常識だぜ…

食らえ！

ヴァン
Vent！！！！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

詠唱破棄

魔法と唱える際、必ず魔法の言葉を言霊に乗せなければならないの
だが

ある程度の魔力があればその詠唱は省略し、即座に魔法を打てる事
が出来る

V e n t 読み（ヴァン）

風属性初期魔法

まるで鞭のように風を操り、対象に『風の刃』を浴びせる事が出来る攻撃魔法。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

まるでカマイタチのようにアキルの全身が風に切り裂かれる！

辛うじて急所は避け、致命傷には至らなかったものの

なにしろ攻撃してきているのは風！

肉眼では捕らえる事が出来ず

避けようにも避けられない！！

更に属性相性により風属性は水属性より強い為

剣による切り傷よりも深いダメージが積み重なる！！

まるで遊ぶかのようにわざと急所を避けて

甚振っているかのように魔族は次々に風魔法Ventを繰り出す！！

「くっ…くそお…！！！！」

一方的に切り刻まれ、大量の出血！

失血によりアキルの意識は朦朧とし始める……

「よえゝな…人間！ま…これが人間と魔族の違いってやつだ…」

不適に笑う魔族。

しかし、アキルの目は輝きを失わず

相手の隙を窺っている…

「まだ勝てると思ってやがるのか…ケケケ……そうだいいものを見せてやるっ…」

魔族は椅子のようなものに座り

グニョグニョしている物体を操り、なにかを操作している

準決勝でリヨウから学んだ『根性』を見せ

なんとかアキルは意識を保つ。

敵は一見隙だらけ…

しかし、反撃の余力がないアキルはただ相手の成すがまま

見てみる…と言われた方を凝視するしかないのだった………

「このトーフゴーレムはよく出来てる生物だな？」

なにやら長い説明が始まった…

「こいつは元々知能がなく、体内に俺のような外部の生物を住まわせ

共存をする事でやっと活動ができる珍しい生き物だな…」

(正直どうでもいいモンスターの説明をされたところで…)

「んで…こいつには目っていう概念がないんだわ…

強いて言うとならば全身が目…

つまりどこからでも目標の姿が確認できる」

更に説明は続く。

「中に住むものが操作しやすいような仕組みなわけだな…

んでここを…こつすると…」

突如、アキルの目の前には大きなモニターのような画面が表示される。

「外の景色が様々な角度、場所から見れちゃうってわけだ…」

モニターには様々な景色が映し出されている。

ダイースファイターと戦う2人の男女。

既に絶命している人間。

倒壊した門。

突入のタイミングを図っているミズキ。

「今から俺の操縦のプロさを見せてやるからよ…」

不適な笑みを浮かべた魔族は画面の一部を指差す。

そこに映っているのはおそらく足元でダイースファイターと戦っている人間。

黒い装束に身を包んだ男。

武術会初戦で、ミズキが戦っていた相手『忍』であった…

「なっ……なにを…する気だ！」

「わかりきった事言つなよ…ペシャンコにしてやるだけだぜ…」

「やつ…やめろお！…！！！」

「黙って見ておけよ…人間！」

風の刃ではなく、ただの風の衝撃により

アキルは内部壁に激突する。

「こいつがトーフゴーレムの脚部を凍らせてくれたから

人間がここまでこれたんだ…たっぷりとお礼してやらねえとな？」

モニターには忍が戦っている姿がデカデカと表示されている。

更に積み重なったダメージでアキルはすでに意識が朦朧としているが

尚も闘志は消えていないようである。

「腕が2本しかない…足が2本しかない…って思い込んでるらしいからな？」

「まっ…まさか！」

「そうよ！こいつは…自由に四肢を増やせる事ができるんだ…」

脚部はまだ凍っているため、忍はトーフゴーレムの動きにはまるで警戒していない！

ただの目の前のダイーズファイターをひたすら倒している。

「やっ…やめろおおおおおおお！…！」

アキルの絶叫とともに、忍がいたと思われる場所には

トーフゴーレムの新たに生成された足と思われる巨大なものが映し出されていた。

同時にその下には

まるで赤い水溜り

そう表現するしかない嫌な血痕が滲み出していた……

「ケケケ……おそらくは即死だ…楽になれてよかったじゃねえか……」

魔族は更にモニターの画面を変え、次なる目標を映し出す。

そこにはつい先ほどミスリルソードをくれた

リヨウが映し出されていた……

「トーフゴーレムの凄いところはな？」

宿主がいるのも関わらず、魔法も使えるんだぜ

あいつはちょっと遠くにいるらしいから…

土魔法ってやつを見せてやるぜ…」

アキルはガタガタと奥歯が震えだす。

きつと先ほどの忍のように簡単に殺すだろう…

絶望を感じ始めたアキルの表情は暗い…

「風よりも土のほうがえぐいんだぜ…よくみてな…？」

（だめだ…敵いつこない…）

「リヨウさん…逃げてくれえ〜！！！！！！！！」

「い〜い反応だな…それじゃ俺も期待に応えなきゃな…」

画面が一瞬土を表す茶色の光で覆われた。

「やめてくれよ……」

「土魔法：Alba……こいつはえぐいぜ……？」

アルバ

土魔法：Alba 読み（アルバ）

土属性初期魔法

大地を操り、地中から岩の刃を出現させ対象を貫く攻撃魔法。

- - - - -

次の瞬間！

リヨウの足元から岩の刃が出現！！

あっけにとられる間のなく

深々とリヨウの胸を抉るように貫いた！！！！！！

尋常ではない吐血。

貫かれた箇所からは帯びた足しい量の血！

徐々に光を失っていくリョウの目。

「うわあああああああ！！！！！！！！」

発狂同然のアキルの咆哮が空しく木霊する。

「だろ？えぐいだろ？串刺しとか狂気の沙汰じゃねえだろお？ケケケ……………」

すでにアキルの耳に魔族の声は届いていない。

放心状態のアキルはまるで廃人のように

瞳孔は開き、焦点があってないように虚ろな目をしている。

「さあて…そろそろ俺らも戦おうか？ん？それともまた『良い物』

「!!」

アキルの全身から水を表す水色の光が発光する！

予想外の魔力を感じた魔族は

視線をアキルに向ける。

「なんだ…と？」

明らかにその魔力は魔族のそれを遥かに凌駕するものであり

いくら属性の相性が勝っているとはいえ

実力が上の魔法を食らえば一溜まりもない事は理解しているのだ。

しかし、アキルはミスズ同様に魔法を使った事がなく

更にミスズのように魔法の知識があるわけでもない

その事を知らない魔族はただ恐怖に怯えたような表情を見せている。

「ゆるさねえ…お前はゆるさねえぞおおおおお…!!」

怒り、憎悪、悲しみ

あらゆる負の表情が重なり合ったアキルの表情は

水色の光を更に際立たせる。

「冷静になれ！アキル!!」

息を切らしてミズキがその場に乱入した！

アキルの全身から水色の光が発光し

ただならぬ戦闘力が伝わってくる。

おそらくはそのアキルが殺意を抱いている相手こそ

真っ先に倒さなくてはならない相手だと言う事は

ミズキもすぐに理解した。

アキルとの打ち合わせ通りに

ダイズファイターの射出が止まったのを確認したミズキは

すぐに合流するべくトーフゴーレムの内部へ突入したのだった。

「冷静になれ！アキル！！！」

アキルはほぼ暴走に近い攻撃を魔族に浴びせ続けている。

そんならしくもない単調な攻撃は

一発も当たるはずもなく、それでも尚怒涛の攻撃が繰り返されている。

しかし、魔族の表情から察するに

一撃でも攻撃が当たればただ事では済まない

それほど、アキルの全身から放たれている魔力は

ミズキの目から見ても強大であると判断できた。

「ケケケ…またお客さんがきたか…」

魔族はミズキに気付いた。

一体なんでこんな状況になっているのか…

ミズキはまだ理解する事が出来ない……が

そんな事はとりあえずどうでもいい…まずはこいつを倒さなくては…

ミズキは頭を切り替え、魔族の動きを観察する。

今の状態のアキルにはなにを言っても無駄。

しかし、致命傷とはいえぬが

さっきまではなかった切り傷が大量に付けられている事から

この魔族は弱くない。

（油断すれば死ぬ……）

ミズキは敵の戦力をすぐに分析、そして対抗するべく潜在能力を開放させる。

一瞬にして場の空気が変わった。

魔族はアキルの強大な魔力にも驚いていたのだったが

後から現れた人間の娘

ただの人間であるはずなのだが…

それとは無関係に「やばい！！」と叫びたくなりそうな

人間を遥かに凌駕した力の息吹を感じ始めていた。

ミズキの全身から闇を表す紫色の光が放たれる。

これまでミズキが見せる事のなかった

彼女の『本気』。

艶かしい輝きを放つ紫色の光は

魔族なら誰もが知っている例の人

『魔王』が発する雰囲気には驚くほど酷似していた……………

「きつ貴様……………まさか闇の者か……………」

魔族が驚くのも無理はない……………

全八属性の中の闇。

それは

魔族の特権とも呼べる、彼らの象徴たる闇。

全ての生き物に属性は存在するのだが

闇属性は魔族にのみ与えられた偉大なる属性。

人間で闇の属性を持つ者など存在している訳がない。

しかし…

魔族の目の前にいるミズキから放たれている光は紫。

闇を表す魔族の象徴たる紫。

「貴様…一体…」

驚きと混乱が混じった情けない言葉しか出てこない魔族。

言葉を全て言い終える前に

一瞬にして魔族の身体は

ミズキの一太刀にて

綺麗に上下に2等分されていたのだった………

ミズキはアキルを担ぎ、必死になって脱出口を探している。

残された時間は限りなく少ない。

それでも諦めるわけにはいかない

（こんなところで死んでたまるか！）

額からは汗が噴出し、気を失っているアキルは

更に身体に重量を加え負担をかける。

「どうすれば……」

落胆したようなミズキらしくない言葉すら漏れ

最悪な状況となった……

[illegible]

「冥土の土産に……良い事を教えてやる……」

「そんなもんいらん！」

「まあ……よく聞けよ……このトーフゴーレムはな？よく出来たモンスターでな……」

体内の宿主が絶命した瞬間に活動停止となるのだが………」

「それは良い事を聞いた……」

「ケケケ……行動ができない……トーフゴーレムは自らの防衛本能を発動されるわけだ………」

「……？」

「自分の命とも呼べる『核』を体外に射出し、生き延びようとするわけだ……」

そのときに身体にかかる負担は………凄まじく……頑丈な表皮をもつてしても

耐え切れぬほどの圧力がかかる……」

「どういう事だ……？」

「ケケケ……わかりやすく言うと……」

「大爆発を引き起こすってわけだ……」

「なっ！！」

「精々……逃げ回るがいい……そして……死ね……!!!!」

[illegible]

魔族の最後の言葉を聞いたミズキは

まだ暴走しているアキルを一瞬にして気絶させ、

そのまま担ぎ上げて

すぐさま脱出を試みようとは行動を開始したのだったが……

薄暗い内部の視界は最悪。

しかも脱出口なんてどこにあるのかもわからないこの状況

「ははは…困った…」

苦笑いすることで精一杯であつた……

「ミズキ……さん？」

やっとアキルの意識が復活

さすがに少し重かつたため、ミズキは思いっきり地面に叩きつけた

「やっと起きたか！」

「いたた……あの魔族は……？」

「私が仕留めたが…状況は最悪だ」

もうすぐ大爆発をするかもしれない…と

ミズキはアキルに簡単に説明する

「なるほど…それは大変だ!!」

「それで今こんな状況なのだが…」

「ミズキさん…外に出る方法ならありますよ?」

「なに!？」

「俺たち…どこからこの中に入ったか覚えてますか？」

「そっ…そうか!!」

2人は同時に走り出し、ダイースファイターの射出口へ向かう!

「かなりの高さですけど…ここしか…」

「ああ…アキル!先に登れ!」

「いつ…いいんですか?」

「いいから先に登れ!」

「いや…ミズキさんが先に行ってください!助かるチャンスが高いほうが…」

「アキル…アンタはそんなに…アタシのパンツが見たいのかい?」

指をボキボキと鳴らし、凍りつきそうな冷笑を見せるミズキ

「俺！先に登るっす！早く脱出しよう！」

「いい子ね…ほら！ボサっとするな！！」

2人はダイース射出口から外へ向かってひたすら進路を進めた。

ふらふらになりながらもミスズはなんとか

炎属性初期魔法『F i a m m a』を駆使し

シュウの援護が出来ている。

次から次へと襲い掛かるダイーズファイターを2人で黙々と

撃破していた。

まるで底が見えないように沸くダイーズファイターであつたが

ある時からぱったりとその姿が見えなくなったのだ。

なにやら嫌な予感もするが

とりあえずは一段落。

やっと負傷者への救済に迎えるとミスズは少し気持ちに余裕が出来た。

「シュウさん！今のうちに負傷者達を助けにいきましょう！」

「ああ！敵の勢いが止まった今がチャンスだな！」

しかし、単独で行動するのはお互いにまだ不安があるため

2人は一緒に救済に向かう事にした。

「ミスズ！見るな！！！！」

シュウの視界にとてつもなく残酷な光景が見えた。

すかさずシュウはミスズの視界を塞ぐ。

シュウの言葉が意味する意図をなんとなくミスズは理解した。

「大丈夫です…戦い抜き、力尽きた死者を見ることは…

彼らにとっては生きた証ですから…」

シュウの身体からするりと前へ出たミスズ。

やはり目の前に映ったのは死者であつた。

地面から岩の刃のような鋭利な隆起物が

まるで狙ったかのように死者の心臓にあたる部分を貫き

おぞましいほどの血の量がそれを物語っている。

驚きと悔しさが混じったなんとも言えぬ表情でその者は絶命していた。

「この人は…俺がさっき助けたばかりだった…」

「シュウさん…」

シュウの表情は暗く、今にも泣き出しそうな雰囲気醸し出している。

言われてみればどこかで見たような

気合の入ったあの独特の髪型。

「確かルーツ選手…ですよ…準決勝で見た覚えが…」

「ああ…俺とともに他2名って省略されたんだっただな…」

「思い出しました…」

なんとか場を和まそうとシュウは言葉を選ぶが

まるで意味をなさず、沈黙が場を支配する。

「そういえば…静か過ぎるな…」

「ですね…さっきまでは建物が崩れる音とか響いてたのに…」

一体今の状況はどうなっているのか

そして、生存者はいるのだろうか…

最悪な状況を想像しつつ

2人はリヨウの遺体に手を合わせ再び探索を開始しようと……

「おおおおおお……いいい!!!!」

前方から何者かが走ってきた。

前方からものすごい速さで走ってきたのは

決勝戦でのミズキの相手、アキルだった。

そのやや後方からミズキと思われる女性も走ってきている。

「ミズズ！ミズキは無事らしい！あそこを見る！」

シュウはある一箇所を指差す。

「ああ…よかった…あんなに元気そうに走って……」

「ここは危険だ！！！その人！出来るだけここから離れろお！」

「な…なんだって？」

遠くから叫び声が聞こえるのだがなにを言ってるのかわからない人。

なにかただ事ではない事が起きているのはなんとなくわかったのだ

が…

「ミスズ！シュウ！さっさところから離れる！」

アキルを追い越し、ミスキが2人の目前で怒鳴り声を上げる。

「ミスキさん…それは一体どういふ…？」

「説明は後だ！ミスズ！走れるか？」

ミスキの雰囲気から察するにやっぱやばい事が起きようとしているのはわかった。

「俺らは負傷者達を救いにきたんだ…ここまできて逃げれるかよ…」

「まもなくここら一体は爆発に巻き込まれるかもしれないんだよ！」

「なっ…なんだと！」

それで血相を変えてミスキ達が走ってきたのか…

シュウはすぐにミスキに従い、逃げ出そうとするが…

「つまり…負傷者達を見捨てて逃げろって事ですか！」

ミスズの反論にシュウとミズキは驚いた。

「仕方がないだろう！ミイラ取りがミイラになっちまったらどーしようもない！」

「そっ…それでも私は…」

「ミスズ！アンタの気持ちはわかるけど…」

「ミスズ…今はミズキの言う事を聞くのが懸命だ…救済はそれからでも…」

「死んだって構わない！一人でも多く助ける事が出来れば私は…」

「ばっ…バカな事いうな！！！」

ミズキはミスズの頬を引っ叩く。

（うわ…今の絶対痛いつて…）

ミズキの張り手なんて想像したくもないシュウは思わず目を背ける。

張り手の勢いでミスズの眼鏡が飛んでいく。

「アンタ達はよくやった！でも出来るのはここまで…わかるだろ？」

「……………」

「アタシだって負傷者を助けたいさ！それでも…」

ミスズを見殺しになんて出来ない…」

「ミスキさん…ごめんなさい…」

「強くなったね…ミスズ…よく頑張ったよ」

ミスキはミスズを優しく抱きしめ、諭すように優しい言葉をかける。

「なんかドキドキしちゃうのは俺だけか…？」

「同感ですね…俺もちょっと…新しい世界が見えそつで…」

リヨウの供養が終わったアキルはシュウと傍観している。

ドゴンドゴン！……！！

すかさず、男2人の頭にミズキの鉄拳が降ってきた！

「痛っ………」

「いたた…ミズキさんにするんですか！」

「聞こえてるんだよ！バカ2人！ほら！ボヤっとしてないで逃げるよ！」

「おっ…おっ…」

「はい…」

4人はそのままその場から走り出した。

それから5分後、トーフゴーレムを中心とした

半径およそ100メートル帯は大爆発により跡形もなく消えてなくなったのであった…

それから数日経った。

カステラの街では門と門の周辺の復興で大忙し。

もはや武術会どころではなくなっていましたため

ブックと賞金である5万ゼニーは

街を守った英雄として掲げられた4人

アキル、ミズキ、シュウ、ミズズの4名の中から代表として

ミズキが授与された。

しかし、ミズキ曰く

「ブックは正直いらないから…アキルが持つておけ」

その一言によりアキルがブックを所持する事となった。

街の復興が終わり次第

改めてその英雄4名をカステラの『勇者』として働いてもらうらしいのだった。

勇者の仕事は

またこのような事態になる事を防止するために

街の近隣で脅威と思われるモンスターの討伐。

更にはブックの完成を目的とした遠征。

常に戦闘する事が前提な仕事である。

もちろんその報酬も支払われる。

鍛冶屋や宿屋、薬屋などの公共機関での優遇もされる。

一般の人よりも遥かに安価な価格で購入、または宿泊できるというものである。

勇者が決まった事で

カステラの町長は世界中に伝書鳩を送り、

カステラ以外の街でも優遇されるように手配していた。

しかし、あくまでカステラの街の『勇者』であるため

他の街で優遇されるかどうかは微妙なところである。

ぶるぶるスライム

属性：水

[illegible]

モンスター NO2

$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ & 2 \\ & 6 \\ & 7 \\ & 7 \\ & 4 \\ \hline & 2 \\ & 9 \\ & 2 \\ & 7 \\ < \end{array}$$

ミニゴースト

属性：闇

[illegible]

モンスターNO3

$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ & 2 \\ & 7 \\ & 0 \\ & 6 \\ & 6 \\ \hline & 2 \\ & 9 \\ & 2 \\ & 7 \\ < \end{array}$$

双葉さん

属性：風

[illegible]

モンスター NO 4

ミズキ、シュウ、ミスズの協力があるので

なんとかかなりそうだと思っている。

非常にめんどくさそうな作業ではあるが

意外な事にミズキは

「暇だし…別にいいぞ？付き合ってやる」

あっけらかんと協力してくれる事を約束してくれた。

シュウとミスズも

「更なる精進の為の同行ならば…俺は逆にアキルに懇願するところだった…」

「私で…お役に立つのでしたら…」

…と、快く快諾してくれた。

しかし、条件は3人とも同じように

「とりあえずは街の復興が終わったらの話だからな？」

「街の復興が終わるまでは…まだ行動しないほうがいいと俺は思う」

「現状…行動するのはまだ早いと思います…せめて街の復興が終わってから…」

声をそろえて街の復興が終わり次第、行動に移したいとの意向であった。

アキルも同様にまずは体制が整ってから…と思っていたため

アキルは自ら門の修復や建物の建造の手伝いに励んでいたのだった…

それからまた数週間経った。

すっかり街の復興が済み、以前よりも強固な門が完成し

その回りも矢倉などが設置された。

今日は一日、勇者達を激励するパーティーが行われた。

ミズキは酒豪らしく、浴びるように酒を飲む。

シュウもそこそこ飲める口らしく、ミズキに無理やりに近い状態で飲ませられているが

なんとか付き合いきれているようだ。

ミスズは元々酒が弱かったらしく早々と寝てしまっている。

アキルもミズキの毒牙にかかり早々と寝てしまった。

- - - - -

この世界の飲酒と喫煙は

18歳からである。

- - - - -

翌日。

二日酔いがひどいらしく

アキルとミスズは青白い顔をしながら出立あたり

町長の話聞いている。

ミスキとシュウは地図を開きながら

進路を決めている。

「オダルム平野の先には湿原が広がり、更に奥には樹海か…」

「噂によればその樹海には恐ろしい魔物が住んでいるらしいな…」

「アタシもその噂は聞いた事がある…なんでも人間を食らう大木のバケモノらしい」

「街からは離れてはいるが…当面の目標はそいつの討伐かな」

「だな…幸いな事にミスズは炎の魔法が使えるから…こちら側が

有利だ」

「ああ…最初は無難にいくのが妥当だろうからな…」

「何日かかるかわからないが…金はある…要りような物はすぐに揃えられる」

「俺もいくらか持っているからその点は大丈夫だ」

「ミスズに魔法杖を買ってやろうと思うんだが…アタシはそのへんさっぱりでな…」

「ああ…俺も魔術用品はサッパリだ…」

町長の話が終わり、いよいよ出立の準備を開始した。

4人はそれぞれ必要なアイテムの調達に出かけた。

アキルとシュウは食料品。

ミスズとミスキは回復アイテムや、戦闘用アイテム等。

ぎこちないが徐々に仲間として一緒に行動する事に

違和感を感じなくなったようである。

少2時間後、既に荷車には各々の物品が納められ

あとは出立するのみとなった。

「適当にモンスターを殲滅しながらまずは湿原を目指す

アタシが先頭に立つから

荷車を中央、両サイドにミスズとシュウ

最後尾はアキルで固めろ」

「ううゝ…緊張するな…私、街の外出るの始めてだし…」

「すぐ慣れるよ！俺も最初は緊張したけど…今は平気になったし」

「それよりも昨日の酒が…」

「シャキつとしろよアキル！また拳骨くらいたいのかい？」

「いや…いいです…」

ミスズの一睨みでアキルはやっと頭が回り出し、適度な緊張感を持つことで

なんとか足取りが軽くなったようだ。

一行はオダルム平野を黙々と突き進み始めた。

— — — — —

カステラの勇者PT

$$\begin{array}{r} 27 < \\ > 21689 \\ & \underline{} \\ & 2927 < \end{array}$$
$$\frac{2}{7} <$$
$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ 2 \\ 6 \\ 8 \\ 1 \\ 6 \\ \hline 29 \end{array}$$

アキルⅡ アルシエース

ミズキIIクロサワ

属性：水

属性：闇

$$\begin{array}{r} 27 < \\ > i \\ 26872 \\ \hline 2927 < \end{array}$$

27<

$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ & 2 \\ & 6 \\ & 9 \\ & 1 \\ & 5 \\ \hline & 2 \\ & 9 \end{array}$$

ミスズ^{II}バートン

シュウ・チャラオ

属性：炎

属性：光

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.

T
o
B
e

1 - 17 (後書き)

なんとかやつと冒険スタートです…

いろいろごちゃごちゃと前置きが長くなりすぎてしまいました…

1 - 1 (前書き)

オダルム平野

> i 2 7 1 1 9
— 2 9 2 7
<

オダルム平野を突き進む

アキル、ミズキ、ミスズ、シュウの4人は

ぷるぷるスライム等の雑魚モンスターを倒しながら

互いにうまい具合に戦闘でのアドバイスもしつつ

まだぎこちなさが残ってはいるものの

なんとか仲間らしくなってきた。

カステラの街を出てから既に2日が経過し、

目的地である樹海にはまだまだ到着しそうもない。

しかし、戦闘経験が少ないミスズは

雑魚モンスターとの戦闘も続いた事で

なんとか炎の初期魔法を使いこなせるまでに成長した。

今は詠唱破棄の練習に勤しんでいる。

ミズズの指導により

アキルもなんとか水属性初期魔法を習得し

4人とも遠距離攻撃である魔法を効率よく使えるまでに成長したようだ。

しかしミズキは

「遠距離攻撃してもんは…前衛がいてこそ意味を成すもんだ」

自ら進んで前衛で敵の陽動係を引き受けている。

シュウの光属性魔法も

直接的に敵にダメージを与えるものではないので

ミズキの援護役になる。

アキルの水属性魔法はまだまだ経験不足という事もあり

まだ水鉄砲のような非常に弱い威力の水弾なので

必然的にアキルも前衛になる。

しかし、無から水を作りだすその魔法は

一行の飲み水の確保に大きく貢献しており

用途は違うが結果オーライと言えよう。

地面が徐々に緩くなってきており

やっとの事でオダルム平野を抜け、

湿原が近い雰囲気を感じ出してきた。

「ここから先はアタシもくるのは初めてだ…」

「強敵がいるかもしれない…油断は禁物だ…」

「私このジメジメした感じ…嫌だなあ…」

「でもこの4人ならなんとかなるさ…気楽にいこう」

適度な緊張を保ちつつ

一行はオダルム湿原へと足を踏み入れた……

1 - 2 (前書き)

オダルム湿原

> i 2 7 1 2 2
— 2 9 2 7
<

足元が緩いため、踏み込みが難しく

接近戦では不利な状況が続く。

しかし、モンスターの数は多く

湿地に適した姿のモンスターが容赦なく襲い掛かる。

臨機応変に対応するアキルとミスキ。

悪戦苦闘するシュウ。

いつもどおりに炎の魔法で一体つつ確実に倒すミスズ。

槍を使うシュウにとって足場が悪い湿地帯は

かなり相性が悪いらしく

自分から仕掛ける事ができず防戦一方の状況に追い込まれる。

そこは身軽なミズキとアキルがフォローし

なんとかモンスターの撃破数を増やし続けているようだ。

- - - - -

更新されたモンスター

> i 2 7 1 2 3
— 2 9 2 7 <

コケコッコー

属性：光

> i 2 7 1 2 4
— 2 9 2 7 <

でかスライム

属性：水

> i 2 7 1 2 5
— 2 9 2 7 <

お花さん

属性：風

- - - - -

荷車もなかなか思うように進まず

時たま泥濘に嵌り、面倒くさい事になる

相変わらず戦闘ではイライラするほどに足場が悪い。

ミズキのイライラはもうじきピークに達しそうな勢いである。

なにやらミズキの雰囲気危なそうに感じ始めたミスズは

やや気を使いつつ、湿原から調達できるエリクサーの材料を採集している。

アキルもミスズの手伝いをしながら

なるべくミズキから距離を取る。

暇を持て余していそうなシュウにミズキがとうとう絡みだした…

「そついえばお前…戦闘ではちよつと苦戦してたよな…」

「ああ…ちよつと足場が悪くてな…」

「そんな動きじゃこれから先…強敵が出てきたら死ぬ事になるな…」

「それまでに何とか慣れておかないとだな…」

「暇してるんだろう？アタシが稽古つけてやるよ！」

「それは助かるな…」

稽古という言葉にアキルはなにやら嫌な予感を抱き始める。

「仕方がないですよ…アキルさん…誰かが犠牲にならないと…」

「シュウが可愛そうで仕方ないよ…」

「しっ…！静かにしてないと今度はアキルさんが標的に…」

「そっ…そうだな…」

ドカツ！！バキッ！！！！！！

なにやら鈍い音が響く。

同時にシュウの悲鳴のような声…

更にミズキの高笑いのような声…

「あれはひどい…」

「アキルさん…次はこの…草の根っこをお願いします…」

「ああ…わかった…」

シュウを生贄に捧げ、のほほんと採集を続けるアキルとミスズ…

こんな調子で毎日続くのかと思うと

やや不安が残るのであった……

夜間。

4人はいつもどおりテントを張り、ミスズは炎の魔法を使い火を起こす。

夜行性のモンスターの襲撃に備え、見張り役はアキルとシュウ。

まだ寝るには早いらしく

火を囲みながら4人は談笑している。

今日の話題は好きなタイプについてらしい。

「やっぱ男ってのは頼りがいがあるな！強いのが一番だ！」

「ミスズさんより強い男ってあんまりいなさそうですけど……」

「ははは……違いがないな……まるで男みたいな女だしなミスズは……」

「でもでも！ミズキさんの気持ち私はよくわかるなあ」

冗談を交えつつ会話が弾む。

「ほら！ジョーカーだ！これでアタシの勝ちが決まったな！」

「うぐ……またミズキさんが大富豪か……」

「まずいな……」

「あつ……すみません……3スぺ返しです……」

「なっ！……！」

持参したトランプで楽しむ4人。

それなりに打ち溶け合ってきたようで

徐々にミズキもトゲトゲしさがなくなり

最初の頃に比べたらだいぶ丸くなってきたように思える。

「属性の上位魔法を覚えるには初期魔法の詠唱破棄が大前提で…」

「それなりにSPがないとまず無理ってことか…」

「難しいもんだな…俺詠唱破棄なんていつになるやら…」

「魔法は一種の才能のようなもんだからな？焦る必要はないさ」

時間経過とともに話題が一転二転。

寝る直前になるとミスズが魔法全書を読み始めるため

他の3人はそれを音読してもらい魔法の知識をより深めている。

「そういえば…俺、ミスズさんが魔法使つてるところ見たことないな…」

「言われてみれば…ミスズはいつも前衛だからな…」

「ミスズさんの属性は確か…闇でしたっけ？」

「ああ…使おうと思えば使えるんだが…アタシの魔法はちょっと変わってて…」

言葉を濁すミズキ。

（そういえば…人間で闇属性って存在しないって書いてあったよ
うな…）

ミスズは魔法全書に書いてあった記述を思い出す。

そんな事を知るわけがないアキルとシュウは

きつと周囲を巻き込みそうなどんでもない魔法なんだろう…と

脳内変換していた。

「さて…夜も更けてきたし…アタシはもう寝る!」

「あ…じゃあ私も寝ようかな…」

「あ…ああ!じゃあいつもどおり2時間交代で」

「ミズキさん…今日は起こしに行ってもキレイないで下さいね!」

寝起きが悪いミズキは

起こされる事を極端に嫌うらしく、起こす側は結局

毎回のよう寝惚けたミズキの攻撃を受けてしまうのだ。

「じゃあ最初はどっちがいく？」

「ここは公平にじゃんけんでいきましょう」

「だよな…これってある意味めっちゃスリルがある罰ゲームみたいだな…」

「ははは…間違いない…」

「聞こえてるぞ…」

「ごめんなさい…!…」

睡眠と見張りを交代で行い

瞬く間に朝を迎え

一行は再び樹海に向かって歩き出した………

1 - 4 (前書き)

ポポック大森林

> i 2 7 1 6 6
— 2 9 2 7
<

ようやく一行は湿原を抜け、樹海の入り口へ到達した。

しかしここで大きな問題が発生した。

予想外に長い道のりだった為

食料や入り用なアイテムがもうじき枯渇してしまいそうなほど

激減していた。

しかも、樹海という事もありとても荷車を引きながら歩ける道ではない。

渋々、一行はリュックに残った食料などの物品を詰め込み

ここで荷車は放棄する事にした。

進路を進めると同時に食料の確保という新たな目的が発生したのだ
った。

「帰りはもつと悲惨だろうな……」

「幸いな事に飲み水はアキルが出せるからなんとかかなりそうだが
……」

「あ！皆さんこれ見て下さい！このキノコは毒なので食べちゃだめですよ」

「おお！ミスズちゃん良く知ってたな！こいつはワライダケって
いう毒キノコだよ」

さすが、薬屋の娘であるミスズ。

それなりに知識が深い。

負けずにアキルもほぼ山の奥の田舎村出身という事もあり

食べられるもの、食べられないものの知識に富んでいる。

感心しているシュウ。

ちょっとこの毒キノコを食べさせたらどうなるんだろう…と

やや危険な考えが働くミスズ。

樹海では驚くほどエリクサーの材料が採取でき

回復アイテムの確保は皮肉とも呼べるほど順調のようだ。

本来はオレンジや、レモンなどの柑橘系の果物で

飲みやすいように味付けをするエリクサーだが…

ミスズの味覚は人間のそれを凌駕し

得体の知れない苔や危なそうな花などで味付けする…

回復は絶対にしなくてはならないのだが

ミスズが調合したエリクサーは飲むという行為は一種の

苦行に近いようである。

「はい！皆さん！気合いれていきましょう」

3人に調合したばかりのエリクサーが渡される。

思わず生唾を飲み込むアキル。

青ざめた表情を作るシュウ。

何事もなかったかのように飲み干すミスズキ。

「ミスズちゃん…今日は何味かなあ？」

「はい！今日はですねえ〜これです！」

虫！！

しかも手足がいっぱい生えてるムカデのような虫！！！！

思わず咽るミスズキ。

「結構酸味があつておいしいですよ〜」

「さあ皆さん〜ぐ〜とやっちゃってください〜」

悪意がない屈託のない笑み。

絶対にミスズに料理は任せてはいけない暗黙のルール。

しかし、調合はミスズにしか出来ない為

3人は強烈極まりないまるでヘドロのような味がするエリクサーを泣きながら飲む。

「おお…効くなこれは…」

「ああ…まるでトーフゴーレムから強烈な一撃をもらったかのような味だ…」

「身体の芯から…破壊されていく味…」

「おかわりもありますからあゝ」

「全回復だなこれは！」

「ああ！もういつでも戦闘が出来る！」

「相変わらずミスズちゃんの調合の腕は天下一品だね！」

きつぱりとまずいと言えない3人。

しかし、ミスズがそれで落ち込みエリクサーを作らなくなるほうが死活問題であるため

当たり障りのないように苦行に耐え続けるのだった…

進路を進める準備が出来たようで一行は黙々と

樹海の奥へ向かって歩を進める。

順調にモンスターを倒しつつ、更に奥へ奥へと突き進む。

やはり樹海という事もあって風属性のモンスターが多く。

ミスズの炎魔法は大活躍。

対して、シュウの光魔法は

もはや目という概念がないモンスターが多いため

まるで意味をなさない。

アキルの水魔法はもはや論外。

巨体ながらも素早い動きで確実に殺しにかかる

マンティスというモンスターには苦戦しつつも

なんとか撃破数を伸ばしていった………

- - - - -
- - - - -
- - - - -

更新されたモンスター

> i 2 7 1 6 8
—
2 9 2 7 <

ブーン

属性：雷

> i 2 7 1 6 9
—
2 9 2 7 <

フォレストバット

属性：風

> i 2 7 1 7 1
—
2 9 2 7 <

アルキダケ

属性：土

> i 2 7 1 7 0
—
2 9 2 7 <

リトルトレント

属性：風

樹海ならではの異形な形のモンスターを次々に撃破していく一行。

しかし、肝心の目的である大木のモンスターは見つからない。

おそらくは

すでに何体が倒した『リトルトレント』と似ている姿だと思われるため

ただの木だと思って見過ごしたのかもしれない。

あくまでカステラの街での噂であるため

まさかそんなモンスターなどは元々存在していないのではないか

そんな不安も少々感じ始めている。

しかし、

オダルム平野や湿原と比べ

モンスターは数段強いので

戦闘で得られる経験はかなり高く

目で見えるほど一行の戦闘面での動きや

技のキレは数段良くなっている。

苦戦していた『マンティス』という巨大なカマキリも

今ではミズキは一人で倒せるほどになり

アキルもなんとか一人で倒せるようになった。

まだシュウとミスズは2人で協力しないと危なっかしいが

ミズキとアキルにもうすぐ追いつきそうな勢いである。

ミスズの魔力も順調に伸び始め、

うつすらと詠唱破棄という上級技の頭角が見え始めている。

初期魔法であるフィアンマも最初は拳大ほどの大きさだったが

今ではボーリングの玉ほどの大きさまで生成可能になった。

一発つつ生成し、発射していたのだったが

今では両手で同時に生成することが可能になり

かなり効率はよくなっている。

相変わらず、アキルの水魔法の威力は論外。

ミスズと比べるとやはり魔法の才能はよろしくないと素人の目から見てもわかる。

「よし…今日はこのへんで休憩しよう」

「あそこに大木があるからあの下で休もうか」

「じゃあ俺はミスズちゃんと食材でも探しにいつてくるよ」

「あ…はい！じゃ～ミスズさんとシュウさんは適当に休んでてください」

すっかりパターン化した4人の役割。

ミスズに食材収集を任せると

明らかに毒らしいものでも「いいから食ってみなよ！」と

不適な笑みを浮かべながらも目はマジ…そんな力オスな展開になるため

知識が長けているアキルとミスズに一任するようになったのだ。

シュウの役割はそんなミズキのイライラ解消の相手。

シュウじゃないと勤まらない重要な役割である（笑）

アキルとミスズは早々に手分けして食材を集め始めた。

こんなときに強襲されてもなんとか単独で対処できるほど

実力は高くなっているのだ。

「やっぱりあのカマキリはどうも苦手だな…」

「武器の相性ってやつもあるかもしれない？」

「ああ…小回りが効く武器で一瞬の隙を付かないと切り込めんな…」

「噂のモンスターなんて本当にいるのかねえ…これじゃただの修行と変わらん」

「それでも意味はある！俺もミズキに比べればまだまだだが…それなりに実力が…」

束の間の談笑を楽しんでいたミズキとシュウだったが…突如！
異変に気付いた。

「シュウ！アタシが合図したら…あそここの木のどこまで走れよ…」
「わかっている…」

なにやらただ事でない気配である。

「走れ！」

2人はなにを思ったか駆け出し、到達したと同時に振り返った！

「なっ！！！！」

「なんで気付かなかったんだろ…迂闊すぎた…」

2人の視界に映っているのは大木である事には変わらないが……

そんな生易しい物ではなかった……

[illegible]
$$\begin{array}{r} > \dot{1} \\ & 2 \\ & 7 \\ & 1 \\ & 7 \\ & 3 \\ \hline & 2 \\ & 9 \\ & 2 \\ & 7 \\ < \end{array}$$

(BOSSモンスター)

トレントキング

属性：風

[illegible]

ミズキとシュウの視線の先に映っているもの……

それは、大木に見間違えるほど巨大なモンスターであった。

トーフゴーレムよりも一回り以上大きく

約15メートルほどの大きさだと目測でわかる。

大木と違っ点。

それは徐々に形を成していく口のような器官。

無数の牙がびっしりと生え、蠢くその姿は圧巻である。

根にあたる部分が地面から起き上がり

徐々に足のような部分が見えてくる。

場の空気が変わったことから

明らかにこのモンスターはこちら側に殺意を持っている事はすぐにわかった。

312

アキルとミスズはまだその異変に気付いてなく

食材探しに没頭している様子。

「シュウ！光魔法を使え！すぐにアキルとミスズに知らせろ！」

「ああ！」

眩い光を放つ光魔法：リユミエールは、こっという緊急事態時には

合図としての役割も担う為中々重宝されているのだ。

ついに動き始めたモンスター！

シュウが放ったリユミエールにもまるで動じない。

目という概念がないのか、それともあまりにも巨大すぎて目にあたる部分まで光が届いていないのかはわからないが…

ミズキは刀を抜き、構える。

シュウも槍を構え、敵の動きに対処しようとする。

シュウが放った光に気付いたアキルとミスズもすぐに合流しすぐに戦闘モードに頭を切り替えた！

「こいつは…リトルトレントじゃない！おそらくは…」

毎日のようにブックを見ていたアキルは目の前のモンスターは
今まで戦った事の相手ではないと瞬時に理解した。

「こんなに大きいだなんて…こっちの攻撃なんて効くのかなあ…」

弱気な言葉が漏れつつも、ミスズは炎魔法の準備をしている。

「いいか！この戦闘に釣られて、周りの雑魚を呼ぶ可能性もある！

周囲の警戒を怠るなよ！！」

ミスキは声を荒げ、全員に危険を知らせる。

「どんな攻撃をしてくるのかわからない…勝てないとわかったら

迷わず逃げよう！」

討伐よりも全員の命の安全のほうが大事とも言わんばかりに
負けじとシュウも声を張り上げる。

これが4人にとっては初めてとなる

B O S S モンスターとの初戦闘であった……

一瞬！

瞬く間に大木のモンスター『トレントキング』の全身から

緑色の光が発光した。

それは風を表す緑の光。

同時に風魔法を発動させている証である。

「しまった！！！！！」

対処が遅れた4人に

目には見えない風の刃が無数に襲い掛かる！！！！！！

避けれるわけがない4人はまともに敵の先手を食らう！

これはアキルも既に食らった事がある風魔法：ヴァンであるのだが

明らかに風の規模が違い、威力も格段に強い！

斬られるだけではなく、風圧により4人は吹き飛ばされる！！

ミズキはすぐに立ち上がり、気合を入れた声と入れたと同時に

全身から紫色の光を放つ！

ミズキが本気で戦うときにのみ発動させる闇魔法である。

- - - - -

闇属性魔法：Obscurite 読み（オプリキュステ）

闇属性初期魔法

潜在能力であるSPをHPに変換させる。その事により

身体能力が爆発的に高まり、100%の力で戦えるようになる。

- - - - -

ミズキは怒涛の勢いでトレントキングに向かって走りだす！

遅れて、アキルも同様にトレントキングに切り込みに行く！

まるでダメージを感じさせない動きであるが

出血の量を見れば明らかにかなりのダメージだった事は明白である。

「ミスズ…立てるか？」

「はい…なんとか…」

一撃でほぼ致命傷に近いほど

かなりのダメージを受けてしまったシュウとミスズ。

すぐにエリクサーを飲み、アキルとミスズの援護に向かう！！

トーフゴーレムのように硬くはないのだが

どこを斬ってもまるで手ごたえがない！

植物であるためまず、痛覚というものが存在してないのだ。

再び緑色の光がトレントキングを包む！

「まずい！！」

瞬時にミズキは後退。

……が！

これまた奇妙な光景がミズキの視界に映った。

すぐ隣で戦っていたはずのアキルが地面に倒れ、ピクリとも動かない！

なにか致命的な攻撃を受けてしまったのだろうか…

すぐに駆けつけ、アキルの生存を確認する…

「おい！アキル！こんなときに寝るな！！！！」

なんと倒れているアキルは眠っているようだ。

しかし、明らかに普通の睡眠と違う点、それは

どこを蹴っても殴ってもまるで起きる気配がない事。

「まさか……」

ミズキの予想は的中。

先ほど放った緑色の光。

風魔法：ヴァンではなく違う魔法を使ったのだった。

おそらくは強制睡眠を引き起こす状態異常魔法であるとすぐに理解できた。

- - - - -

風属性魔法：Sommeil 読み（ソメイユ）

風属性初等魔法

対象に生暖かい風を放ち、強制睡眠に陥れる。

睡眠時間は約3時間。魔力の高さによりもつと長く睡眠させる事も可能。

- - - - -

「チツ！厄介な魔法を使いやがる……」

避けようにも風は見えない、いつ自分もこんな嫌らしい攻撃を食らうか

わかったもんじゃない……

とりあえず無防備のアキルを担ぎ、なるべくトレントキングから距離を置こうとする……

が！！

植物ならではの

不意打ちとも呼べる攻撃をまともに受けてしまい、ミズキは吹き飛ばされた！

なんと、地面から根がまるで鞭のように伸び

的確にミズキの身体を狙ったのだった。

「フイマンマ！……！」

瞬時にその根は焼却される！！

もう片方の炎はトレントキングの身体にヒット！

しかし、燃え移る事はなく多少、幹が黒くなっただけである。

「無事ですか！ミズキさん！アキルさん！」

体制を整えたミズズとシュウが再び戦場へ現れた。

「ミズキさん!!!」

立っている事がやっとなほどに

ダメージを受けたミズキの姿を確認したミスズはすぐに走り出した。

まさかミズキほどの実力者がこれほどのダメージを受け苦戦する相手とは…

自分の炎魔法も全然効かず、このままでは殺される。

そんな危険信号が脳内で警鐘を出している。

「アキル！しっかりしろ!!!」

シュウはアキルを起こそうとするが、深い睡眠状態に陥ったアキルはまったく起きる気配がない。

明らかに状況は劣勢。

すぐにでも逃げなければやばい！

シュウもまずは撤退するのがベストだと判断した。

トレントキングはまた緑色の光を放つ。

途端にミズキ、シュウはその場に倒れる。

一瞬なにが起きたのかわからないミスズはただ驚く事しか出来ない。

先ほどまで完璧に戦っていた2人が一瞬にして眠りに落ちるなんて

信じられないほど奇妙な光景であつた…

アキル同様に2人は睡眠状態に陥っている。

やはりいくら起こそうとしてもまったくの無駄。

「どうしよう…」

（こんな時に万能薬でもあれば…）

- - - - -

万能薬

あらゆる状態異常を完全に取り除ける薬。

調査するにはかなりの知識と経験が必要とされる。

薬屋はこれを調査する事が出来れば一人前とされる。

- - - - -

しかし、ミスズはまだまだ半人前である為、万能薬の調査はした事がなく

この旅の最中もその事は気には留めていたものの

エリクサーさえあれば大丈夫だと言う甘えがあり

完璧に状態異常に関してはスルーしていたのだった。

戦えるのはただ1人。ミスズのみ

しかし、無防備な3人を守りながらの戦闘となると

圧倒的に不利であり

万が一負けてしまえば全滅は免れない。

更に周囲のモンスターが集まってくればもう最悪な状況。

とりあえずは炎魔法の詠唱を開始。

強制睡眠と言っても時間が経過すれば回復する。

（自分が時間を稼げれば…）

もはやその考えしか浮かばなかった。

「神様……………」

か細い声で呟いた…

自分なんかこんな強敵の相手なんか出来ない…

仲間の傷の具合を見ればすぐにわかる。

（あのミズキさんでさえ…こんな重症を…）

モンスター待ってくれるはずもなく、

緑色の光を放つ。

ミスズの身体を風の刃が切り裂く！

「痛っ！」

激痛に襲われながらもなんとか堪え、両手にフィアンマを作り出した。

「そんなに効かないのはわかってるけど…」

一つは敵の足元に放ち、

もう一つは敵の頭上に向かって放った。

やはり思ったよりダメージはなく

敵の動きは止まらない。

自分の魔法よりも敵の魔法のほうが早く強力であり

もう一発放てるタイミングは皆無である。

ふと…ミスズの脳内に祖母の言葉が思い浮かぶ。

「魔法ってもんはきっかけさえあれば誰でも使える……」

それはミスズも身を持って経験した。

これ以上、自分に出来る事なんてあるんだろうか……

数日前、魔法を使えたきっかけになったのは

自分に真の危機が迫ったとき……

今回は……

（そう……仲間を守りたい時……つまり……大切な人を守りたい時……）

待ってましたかのようにミスズの身体を

緑に近い白い光が包み始めた……

明らかに炎を表す赤い光ではない。

しかも風を表す緑ともまた違った柔らかい光。

魔法全書にはこんな記述は載ってなかった…

属性魔法以外にも個性によって様々な分岐をするとは記載されていたが…

魔法の契約…

それは暗号とも呼べる言葉を言霊に載せて唱える詠唱から始まる為
わからない魔法を覚える事は不可能。

今のミスズの状況はまさにそれである。

ここからなにを唱えればいいのかわからない…

でも…

なにかしらのきっかけがあり、発動に至ったこの光。

絶対に無駄には出来ない。

トレントキングは全く空気を読もうとはせず、

更に風魔法：ヴァンをミスズに浴びせ続ける！！

まるで底なしのSPである。

全身を切り刻まれ、木々や岩に叩き付けられながらも

ミスズはひたすら耐え続けた。

既になにかを考える余裕はなく

次の一撃を食らえばおそらく意識が飛ぶと断言できそうなほどに

衰弱している。

しかし、ミスズを包む緑に近い白光は

更にその輝きを増し、今すぐ唱えろ！と言わんばかりの存在感を主張している。

3人は一向に起きる気配はない。

自分が1:1でトレントキングと対峙してから

どれくらいの時間が経ったのかもわからない。

（やっぱり…私は役に立てない…）

絶望を感じ始めるミスズの目には大粒の涙が流れ始めていた。

地面から止めとも言わんばかりにトレントキングの根が突起する。

すかさず棒立ち状態になっているミスズに向かって根が撓る！！

避ける気力も体力も残っているはずがなく

おそらくは決定打となる一撃がミスズを弾き飛ばした！！！！

ところどころ骨折や打撲、更には大量の出血。

それでもミスはまた立ち上がる。

仲間を守るように、もはや火の粉同然のフィアンマを放ち

ひたすらトレントキングの注意を自分に向けさせている。

自分の領地に侵入した外部の者を排除するという

簡単な思考回路しか持たないトレントキングは

そんな簡単な挑発でもまともに受け

眠らせた3人には全く攻撃をしようとはしない。

ただ目前のミスズを破壊しようと次々と攻撃を繰り返すのみなのである。

呼吸をする事も困難に見えるほどにミスズは肩を大きく揺らしている。

「みんなを……守れる……力が欲しい……助きたい……」

もはや耳を澄ませなければ聞き取るのが困難なミスズの呟き……

自分に喝を入れるように

ミスズは精一杯の声をあげる！

「お願い……私の魔力よ……皆を守って……」

言葉と同時にミスズの光がMAXの輝きを放つ。

仲間を包むように緑白の光が注がれる。

睡眠に落ちていた3人の身体から

脈動の息吹が感じられた。

カツ！と目を見開き3人は同時に立ち上がった。

睡眠が同時に解けたようだ。

「よかった……」

睡眠と同時に傷も多少回復したように見えた。

ミスズはそのまま崩れるように倒れた。

- - - - -

無属性魔法：C u r a t i f 読み（キュラティフ）

回復魔法

味方全員の傷を癒し、同時に全ての状態異常を吹き飛ばす。

さらに、一定時間状態異常を無効にする壁を形成する。

- - - - -

「ミスズ!!!!」

少し遠くで倒れているミスズの姿を確認したミスキはすぐに走り出した。

なにやら嫌な予感を感じながらアキルとシュウも

倒れているミスズを確認。

アキルは無意識に全身から青い光を放ち、雄たけびをあげながらトレントキングに向かって走り出す。

シュウも白い光を放ちながらアキルに続く。

それはミスキの闇魔法に近い効果の

強化魔法だという事にはやはり気付いてないらしい。

「ミスズ！！しっかりしろ！」

揺すっても頬を叩いてみても

ミスズは反応がない。

ミズキはミスズの胸に耳を当て、心臓の音を確認する。

ドクン……………ドクン……………

正常時に比べれば非常に弱い脈動だが

まだ生きてる。

しかし、かなり危険な状態である事は

ミスズのダメージ量を見れば明らかだ。

そんな状態ではエリクサーなんて飲めるわけがなく

ミズキは口移しで無理やりミスズの口の中にエリクサーを流し込んだ。

「うおおおおおおお！！！！」

アキルの斬撃でトレントキングの樹皮が削れる。

そこをシュウの槍が貫き、穴が開く！

思わず見事！と言いたくなりそうな2人の波状攻撃は

難攻不落かと思われたトレントキングに確実にダメージを与えていく！

しかし、ただダメージを受けているだけではない

すかさず緑色の光を放ち、風魔法：ヴァンが2人の身体を切り裂く！

それでもすぐに体制を整え、2人の猛攻は止まる気配がなかった。

少しずつ、エリクサーの効能によりミスズが回復していく。

それでも戦えるコンディションではない事はわかる。

まだ意識が戻らないミスズ。

チラッとミスキはアキルとシュウの姿を確認。

見違えるような動きでトレントキングを翻弄し

確実に押してるように見えた。

それでも風魔法で確実にダメージが重なり

徐々に勢いがなくなっていってる事も把握できた。

（まずはミスズを助けなければ…）

ミスキは更にもう一本、エリクサーを口に含み、ミスズの口の中へ流し込んだ。

神出鬼没なトレントキングの根による打撃。

もはや、根とは感じられないほどに太く頑丈な根。

それはまるで鉄パイプで思いっきり殴られたかのような凶悪なダメージ。

四肢のどこかが折れる音が体内で響く。

アキルとシュウは肩で大きく揺らし、呼吸が激しくなる。

ボロボロになりながらも、ある一点に集中した攻撃を繰り返す！

トレントキングの下部の幹を破壊すればなんらかの勝機が見えるはず。

それを信じ、伐採作業のような攻撃をひたすら続ける！

不思議と先ほど受けた強制睡眠が嘘のように効かない。

その事も幸いし、あと一太刀入れれば確実に折れるというところまで

トレントキングの幹を削る事に成功していたのだった……

やっと意識が戻ったミスズ。

ミスキは安堵の表情を作り思わずミスズを抱きしめる。

「無事でよかった…アタシ…死んじやったかと思って…」

「ミスキさん…」

「まったく…一人で無茶するなよ…」

「でも…」

「後はアタシらに任せな…今魔法なんて使ったらアンタの身体が持たない…」

「大丈夫です…もう一発くらいなら…」

「どれだけ心配させれば気が済むんだ…」

「それはお互い様でしょう!」

ミズキはミスズの髪をクシャクシャつと撫で、すぐに紫色の光を放ちトレントキングに向かって走り出した。

先ほど、回復魔法を使えたミスズの魔力はすでにフィアンマを詠唱破棄できるほどに伸びている。

しかし、フィアンマでは思ったほどダメージが与えられない為

ミスズは再び詠唱を開始し、大きな賭けに出た。

まるで達磨落としのようにズシンと重量感を持った音が響く。

細くなった幹が崩れたトレントキングは

そのまま地面に刺さるように真下に落ちた。

それでも攻撃が止むわけがなく

アキルとシュウにダメージが重なり続ける。

ミズキが合流し、2人にエリクサーを投げる。

「ミズキ…俺には口移ししてくれないのか？」

場を和ませようとシユウは軽口を放つ。

「アキルにしてみらいな…」

「え！俺は嫌ですよ！」

なんとか冗談も言えるほどに余裕が出てきたらしい。

「ミスズが大技を使つみたいだ…アタシらはそれまで繋ぐぞ」

「ああ…」

「それで仕留められなかったら…」

「余計な事考えるなアキル！そんなときはそーなったら考えればいいだろ！」

先ほどと同じように今後は3人で

攻撃を一点に集中させ、幹を崩す作戦で猛攻が始まった。

「我が手の炎よ…

闇夜を照らす猛る炎よ…

大地と大気の恩恵を受け更なる輝きを増し給え…

偉大なる炎よ…剣となり矛となり…

邪を貫く武器となれ…」

尋常ではない赤の光がミスズを包み込む。

（いいだろう…そなたの勇氣…しかと受け取った…

さあ…唱えよ！更なる高みを目指す者よ…

我が名を叫べ！そして…放つが良い）

ミスズの心に何者かが語りかける。

ミスズの長い髪が逆立ち、更に赤い光が眩く放たれる！！！！

目を見開き、心に話しかけてきた者の名前を声に乗せる！

「更なる炎…

それは光り輝く豪炎の槍…

その者の名は……

悪しき輩を貫く炎矛！！

ブレイズ
Blaze！！！！
」

- - - - -
- - - - -

炎属性魔法：Blaze 読み（ブレイズ）

炎属性中級魔法

ファイアンマを詠唱破棄できるほどに魔力が増した者のみ発動可能。

質量を持った炎を生み出し、音速の速さで対象に射出する攻撃魔法。

その炎の形はまるで槍を思わせる為、

地方によっては『ファイアーランス』と呼ばれる事もある。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「皆さん！離れて！！！」

ミスズは声を荒げ、3人に叫ぶ。

その声に反応した3人はすぐにトレントキングと距離を置く。

巨大な炎の槍。

しかし、その巨大さをまるで感じさせないほどの

ものすごいスピードでトレントキングに向かって真っ直ぐ放たれる
！！

ヒット！！！！！！

綺麗に貫かれた箇所から更にトレントキングの身体を炎が包んでい
く！！！！

声という概念がないトレントキングは炎を振り払おうと

必死にもがく…が

そんな行動はまったくの無駄。

まるで餌を必死に貪り食う獣のように

炎は一瞬にしてトレントキングを焼却していく。

10分ほど火葬されたトレントキングはもはや原型を留めておらず

巨大な木炭と化していた。

4人はすぐに一箇所に集まり、一息を入れた。

意外とあっけないように見えるが

それほど炎属性中級魔法：ブレイズの威力

更には属性の利による勝利。

楽勝と言つには程遠く

全員の力を合わせなければ倒せる相手ではなかった…

S Pを使い切り、ミスズはへ口へ口状態になっている。

すでにエリクサーの材料は一通り把握したアキルは

すぐに調べできるように材料の確保を始めている。

ミズキ、シュウ、ミスズの3人は談笑しながら

束の間の勝利の余韻を感じていた……………

「あのトレントキングを倒すだにゃんて…中々やるにゃあ〜」

休憩をしていたシュウ、ミズキ、ミスズの3人の耳に

語尾に『にゃ〜』が付く聞き慣れない言葉が聞こえた。

しかし、どこかで聞いた様な…

一瞬にして緊張する3人。

「武術会以来かにゃあ？始めましての方もいるみたいだけど…」

3人の目の前に現れたのは

大きな耳、腰からは尻尾が生え、明らかに人間ではなく

猫科から進化したかと思われる生物。

しかし、人間のように2足で立ち、体格はやや小さいものの

ぱつと見、人間と変わらない外見を持っていた。

「誰だ!」

ミズキは立ち上がり、すぐに戦闘になってもいいように
刀を構える。

「ミズキさん！この方は敵じゃないですよ」

ミスズは武術会でこの者の姿は確認していた。

（確かアキルさんを推薦してた人だったような…）

トーフゴーレムの襲撃時に

一般人を教会へ先導する手伝いを一緒にしてたとすぐに思い出した
のだ。

「1人でここまでできたのか…？」

シュウは敵か味方がよりも

たった一人で、しかも武装はなく、まるでただの散歩のように

当然のように現れたこの者に違和感を覚えていた。

「味方…ん…そう言われると困るにやあ…」

大袈裟に悩むような身振りをする。

「なんの用だ？」

額から汗をたらしながらミズキは言葉を投げる。

ミズキは戦闘のプロである。

見ただけで大体の敵の戦闘能力は判断でき

それに応じて自分の戦闘パターンを構築できる。

ミズキの目に映っているこの猫耳の娘の戦闘能力は

明らかに自分達よりも遙かに上。

先ほど辛勝したトレントキングよりも遙かに上。

その気になれば一瞬で殺されるかもしれない。

おそらく、ミズキは絶対に勝てないと思われる相手をおそらく、ミズキは絶対に勝てないと思われる相手をおそらく、ミズキは絶対に勝てないと思われる相手を

今、初めてみた。

猫耳の娘の言動がいちいち恐怖を煽る。

ミズキの人生で初めての恐怖が彼女を包んでいたのだった。

「そんなに…震えなくてもいいのにや…」

猫耳の娘はミズキに真っ直ぐ視線を向け

ミズキの心理状態をいとも容易く読む。

その言葉にシュウとミスズはミズキの異変とも呼べる

身体の震えに気付いた。

（ミズキが震えている…そんなにこいつは危険だというのか…）

シウはあのミズキが震えるという奇妙な光景を

理解しようとする事に必死だ。

（寒いのかな…）

ミズズの脳内世界はやはり

我々の予想の斜め上である。

「用件を簡単に言うにや…

クレアがここにきたのはその闇の者を迎えにきただけなの
にや」

「迎えに……？」

「心配する事ないのにや…すぐに君の記憶は消されて生まれ変わるから…」

「なんだ…と？」

「一体どういっ…」

3人の視界からクレアと名乗った猫耳が消えた。

そして、すぐにでも戦闘できるように構えていたミズキは崩れるように前のめりに倒れる。

そのすぐ後ろにクレアはいた。

「殺してはないのにや…気絶させただけ…」

「なっ！」

「なんて事をするんですか！」

一瞬にしてミズキの隙を突き

背後に回ってミズキを気絶させたようだ。

シュウとミスズもその事でやっと

クレアの戦闘能力は自分らの想像よりも遙か上にいる存在だと理解できた。

きつと殺そうと思えば簡単に殺せるんだろうな…

そんな考えが頭にちらつく

先ほどのミズキの身体の震えの意味がやっと理解できたのだった。

「大丈夫…ここでクレアに会った事は記憶から消してあげるの
や」

一瞬、なにか光ったように感じたが

次の光景を見る前に

シュウとミスズもその場に倒れていた。

「しばらく…モンスターさんが襲ってこないように結界を張って
あげるのによ…」

アキルさんがここにいなくて本当によかったにや…」

クレアはミスキをまるで体重を感じさせる事なく簡単に持ち上げる。

そして

そのまま次の瞬間には

まるで何事もなかったかのようにその場から姿を消したのだった……

2 - 1

> i 2 7 7 3 6
— 2 9 2 7 <

> i 2 7 7 3 8
— 2 9 2 7 <

ステータス - - - - -

名前： ファルミナメルロス

性別： 女

種族： エルフ

年齢： 推定 260 歳（人間で言う 26 歳）

属性： 風

得意武器： 短剣、弓、杖

タイプ： 後衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP（体力）：E

SP（潜在能力）：S

ATK（腕力）：C

SPD（素早さ）：D

DEX（器用さ）：C

INT（魔力、賢さ）：A

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

>i27737—2927<
>i27739—2927<

ステータス - - - - -

名前： アルミナスⅡメルロス

性別： 男

種族： エルフ

年齢： 推定150歳（人間で言う15歳）

属性： 雷

得意武器： 短剣、弓、

タイプ： 後衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP（体力）： C

SP（潜在能力）： B

ATK（腕力）： C

SPD（素早さ）： B

DEX（器用さ）： S

INT（魔力、賢さ）： B

- - - - -

場所はポポック大森林。

この樹海と呼ばれる森には人間外の種族が存在している。

モンスターを含む魔族や、そのモンスターと敵対している種族。

外見は人間とそう変わらないが大きく異なるのは

耳が異常に発達し、より遠くの音も察知できるように進化した亜人

人間よりも寿命は10倍ほど長く、成長速度もそれに反比例している。

『エルフ』と呼ばれているこの種族は

人間よりも古くから大地に出現した種族であるとの文献もあり

一説には人間もエルフの一種であるとの考え方もあるようだ。

エルフは非常に警戒心が強く、滅多に人の前には現れず

その姿を見た者はかなり少ない。

魔族の出現によりかなりの数を減らしてきている事から

希少保護種として認知されているようである。

ポポック大森林の最深部。

アキル、ミズキ、ミスズ、シュウがトレントキングと激戦を繰り広げている頃

その戦闘の気配と音を察知した2人のエルフがいた。

「ファルねーちゃん！やっぱこの音は戦闘の音だよ！」

「そーね…ってアル！なにしてんの！」

「ちょっと見にいこうと思ってさ！オイラ！人間って見た事ないんだよ！」

「バカ！やめなさい！この集落の外にはこわいモンスターが…」

「へへっ！オイラ！モンスターなんて怖くないさ！」

「そーいう問題じゃ…」

「じゃあファルねーちゃんも一緒にきてよ！」

「ええ！？私は行かないよ…人間なんて碌な種族じゃないって長老も言ってたし…」

「オイラは『たいけんしゅぎ』だから！それでも見てみたいんだ！」

「どこでそんな難しい言葉覚えたんだか…」

「な～！ファルねーちゃんいいだろお？一緒に見に行ってみようよ…」

「はあ…」

どうやら会話のやり取りから見ると

この2人のエルフは兄弟のようである。

ヤンチャな弟とそれに振り回される姉の図のようだ。

「へへっ！そうこなくっちゃ！大丈夫！ファルねーちゃんはオイラが守ってやるさあ！」

「あのねえ…私はアルに守られるほど弱くないって！」

弟の突発的な行動に付き合わされるハメになったファルミナだが、しっかりと戦闘になる事も想定し、

森林で多く採取される『マナの木』から生成された杖を装備している。

『マナの木』は自然物の中でも珍しく、魔力を蓄える習性があり、それを利用して魔法を使う者は愛用する事も多いのだ。

一方、弟であるアルミナスは、矢筒に大量の弓矢を詰め込んでいる。エルフならば誰でも扱う事ができる弓である。

聴覚が優れているため、視覚に頼らなくても弓を当てる事が可能なのだ。

まさにエルフならではの武器と言える。

最後に弓の弦を張りなおし、準備は万全と言ったところである。

「いい？アル！強いモンスターが出たら無理しちゃだめだからね？」

「わかってるって！」

まるで好奇心の塊のような弟の行動に

ファルミナは日夜、頭を悩ませているようだが

本人も退屈はしないようで楽しんでいるように見える。

「確かあっちの方から気配がしたよ！」

「はいはい…んじゃ！行ってみようか…」

ファルミナとアルミナスは真っ直ぐ

激戦が繰り広げられている方角へ進んでいった……

2人の連携プレーはさすが兄弟と言った感じで

息がピッタリである。

襲い掛かるモンスターの群れを瞬時に撃破していく2人。

ファルミナの程好く力の調節がされた風魔法：ヴァンにより

アルミナスの弓矢が加速され、音速に近い速度で敵を射抜く。

その威力は

おそらくトーフゴーレムの外殻でも楽々射抜けるほどだと見受ける。

それほど硬い表皮を持つモンスターは

この樹海には存在するはずもなく

まるで紙くず同然にモンスターは弓矢の前に倒れていく。

しかし、弓矢の欠点は

矢の本数が決まっており、

全て使い切ってしまったえば攻撃ができなくなるという点である。

後先考えずに矢を射出するアルミナスを気にしながらも

すかさず矢を回収しに行くファルミナはやはりさすがは姉と言ったところである。

森に住んでいるという事もあり

大半のモンスターの特性や行動パターンは把握しているため

その中でも特に強いマンティスという蠍螂のようなモンスターも当然のように撃破できているのだ。

木々を縫うように真っ直ぐ進む2人だったが

突如、アルミナスの軽快な足取りが止まる。

「ファルねーちゃん…この魔力は…」

なにかを感知したアルミナスの声は震えている。

「波長を良く聴いてごらん？これは炎魔法だから…さっきの人間だよ」

さすがにエルフという事もあり、魔法の知識は深い。

更に聴覚でその魔力の胎動をも聞き分け、瞬時に属性も把握できるのだ。

「ちっ…違うよ…それもすごいけど…別な方角に…」

アルミナスのその言葉を聞き終わる前にファルミナも嫌な気配を探知したようだ。

「なっ…なにこれ…魔族…じゃない…」

戦闘の気配とは別に、エルフすらも震えさすほどの強大な魔力に気付いた2人。

「殺意はないけど…なんて冷たい力…」

「あの4人の人間じゃ…すぐに殺されちゃうよ!…」

「私達が行っても…すぐに殺されちゃうって…」

「いやだいやだ！！オイラ！人間見てみたいんだ！」

「これほどの力を持つ者なら…すぐに私達も見つかっちゃうよ！」

「うっ…でも…」

数時間ほど、2人は前にも後ろにも動く事が出来ず

ただ気配を殺す事に必死であつた。

「あ…消えた…」

「空間転移魔法……あんな上級魔法まで使えるだなんて…」

「ファルねーちゃん！もういなくなつたみたいだし！早く行こうよぉ」

「え？あ…そっ…そうだね！ほら！矢！打ったらちゃんと拾いにいきなさいよ！」

「ありがと！」

再び先に進み始めた2人。

ファルミナはまだ先ほどの強大な魔力の持ち主の事が頭から離れず
なにやら嫌な予感を感じていたが

おそらくは何も考えていないアルミナスの表情を見ると
肩の力が抜けたような脱力感に見舞われる。

「ファルねーちゃん！あっちにさっきの人間のうちの1人がいる
よ！」

そんな事はアルミナスが言うより前に気付いていたファルミナだっ
たが

「そうね…1人でなにしてるんだろっね？」

ちゃんとそこは空気を読む。

「なにしてんだろっね！めっちゃ気になるね！」

アルミナスの表情がいつもの好奇心を帯びた笑顔に変わる。

「行ってみる？」

「うん!!」

現在の位置からそう遠くもない位置に人間がいた為

1人で行動している者の姿はすぐ2人の視界に捕らえる事が出来た。

オレンジ色の短い髪に、赤い鉢巻をしていて

頑丈そうな革製の鎧に身を包んでいる。

耳はやはりそれほど大きくない事から人間だと言う事がわかる。

外見はほぼいつも見慣れたエルフと一緒に。

それでもアルミナスは興奮を隠し切れないようだ。

「ファルねーちゃん！見た？人間だよ！」

「うんうん！見た見た」

「どんな言葉話すのかな！うわぁ…なんでこんなに魔力が弱いんだろ！」

「さあ〜ね…きつと魔法のお勉強が苦手だったんじゃないかな？」

「あはは！オイラと一緒にだね！」

「んじゃ！人間も見れたし…そろそろ帰るよ？」

「もうちょっと見たいよお…」

「仕方ないなあ…」

もう少しだけ、弟の我俣に付き合ってあげよう

そんな姉らしい気持ちが沸いたファルミナだったが………

「あのお…そこでなにしてるのかな？」

2人の気配に既に気付いていた人間は

いきなり声をかけてきた。

木の上から観察していた2人だったが

突然の言葉に驚いたアルミナスは足を踏み外し

木の枝からずり落ちた。

「ちなみにこのキノコは塩茹でにすると美味しいですよ」

「なるほど！毒かどうかずっと迷ってたんですが…やっぱり食用だったんですね！」

「似た種類が多いので判別が難しいですね…」

「ですよね…ところでファルミナスさん？」

「はい…なんでしょう？」

「先ほどの弟さん？はどちらに…」

「あ…たぶんその木の陰に…シャイな子なので…」

「難しい年頃ってやつですかね…」

「あはは…そうですね」

お互いに敵意や害がない存在だと一瞬で理解できたファルミナスはすぐに1人で素材採集をしていた人間と打ち解ける事が出来た。

一方アルミナスは

中々人間と会話する事が出来ずに

木に身を隠し、もじもじとしているようだ。

「アル〜！大丈夫だからこっちおいで！」

ファルミナは手を振りながら呼びかけるが

まるで足が木の根になったようにアルミナスは近づいてこようとはしない。

「警戒されちゃってるのかな…参ったな」

「いや！そんな事はないと思いますが…」

「ちょっと俺、閃いたんですが……いいですか？」

「…え？なんですか？」

ひそひそとファルミナと人間は打ち合わせのようなものをしている。

小さすぎる会話な為、いくら聴覚が優れているアルミナスでも

その会話は聞き取る事が出来ない。

気になって気になって仕方ないアルミナスは少しづつ距離を縮める。

「あつれ〜！この草の名前なんだっけな〜？」

「私もそれ知ってるんだけどな〜…名前が出てこないな〜」

大袈裟な演技だが、アルミナスにとっては効果的だったようだ。

すぐに走り出し、大きな声で喋り出す。

「そつ！それはスイスイ草っていうんだよ！」

「お！それだ！それ！」

「アル！偉いぞ〜」

やっと出てきたアルミナスに人間は屈託のない笑みを投げかける。

「俺の名前はアキルだ！よろしくな」

差し伸ばされた手を見ながら

アルミナスは頬を赤く染め

力強く握り返した。

「オっ…オイラはアルミナス…だ！」

朗らかな表情でファルミナはそれを見つめる。

初めての人間との交流で緊張を隠しきれないアルミナスだったが

アキルと名乗った人間が醸し出す

暖かい雰囲気徐々に表情が緩んでくる。

仲良くなるのも時間の問題。

（アル…よかったね…）

いつもどおりの愛らしい表情に戻りつつある弟の表情を見ながら

ファルミナも思わず笑みを浮かべる。

「そうだ！仲間にも紹介したいのですが…」

「あつ…構いませんよ…」

「でもさ！アキルにーちゃん！仲間の誰かは連れて行かれちゃったみたいだよ？」

「なっ！」

「ちょっと前に…とてつもない魔力を持った者が…」

「オイラ達！さっきそれを聴いてたんだ！」

衝撃の事実を聞いたアキルは迷わず仲間が待っている方角へ走り出す。

表情が一変したアキルをしっかりと確認した2人は

すぐに後を追った。

アキルは気絶していた2人をなんとか起こし
事情を聞きだそうとするが、2人は共通して

肝心な部分の記憶が抜けていると言う。

なぜこの場にミズキがいないのかという疑問だけが残った。

ファルミナとアルミナスの話から

連れ去られたのはミズキである事に間違いないと判断できた。

「こつも簡単に拉致できるとは…」

驚きを隠せないシュウ。

「ミズキさん…無事ならいいんですけど…」

暗い表情で心配しているミスズ。

「ミズキさんがいなくなったのは正直でかいよな…」

今後の勇者活動に不安を覚めたアキル。

「大丈夫ですよ！殺意的なものは見られなかったの……」

「とりあえず今日はもうじき日が暮れるから……オイラン家きなよ」

ファルミナとアルミナスの自己紹介も終わっていて

とりあえず今後の行動の予定も立てなくてはならない一行は

アルミナスが言うように今日はエルフの村で一晩過ごす事にした。

村に到着する間何度かモンスターにも襲われたが

もはやこの5人の敵ではなく

さくさくと殲滅していったのだった。

「アキルにーちゃん達もなかなか強いねー！」

アキル達の戦闘での活躍に目を輝かせ、更に表情が明るくなる。

「アルミナスも弓の腕はなかなかだな！」

「アルちゃん！ほら！矢拾ってきたよ！」

「ミスズさん手間かけさせちゃってごめんね」

「ミズキがいなくてもなんとかかなりそうだな」

会話も交えつつ、ひたすら村を目指す。

意外とトレントキングがいた場所からそう遠くもない場所に村はあった。

まずはエルフの村の長に挨拶を済ませ

一晚滞在する許可をもらい、

アキル達は今は誰も住んでいない空き家を貸し与えてもらったのだ。

ファルミナとアルミナスは自宅へ帰ったので

アキル達3人はそこで今後の予定を立てる事にし、

3人で地図を広げながら会議中である。

「一旦、カステラの街に戻ったほうが…」

「いえ！ミズキさんの搜索が先ですよ！」

「2人の言い分はどっちも重要だが…」

アキルとミスズの意見がぶつかり、なかなか予定が決まらない。

「搜索に行くっていつでも…どこに行けばいいのか…」

「だから！それをみんなで探すんじゃないですか！」

「空間転移魔法で移動したらいいからな…闇雲に探しても無駄だろうな…」

「その魔法を使えるほどの魔力を持つ者なんて、

世界中探しても10人もいないって魔法全書に書いてますよ！」

「そうなのか…なら特定するまで聞き込み？」

「エルフの長ならばなにか有力な情報が得られるかもな？」

なんとかミズキ搜索に行くという案がまとまり

一行は当てのない旅を選択したようだ。

エルフの長が言うには

「この樹海を抜けた先にはガランガラン山脈が続いておる…

その山頂には人語を操る古竜が住んでいると言われておる

その竜の知識は我々エルフも教えを請うほどだ…」

強大な魔力を持つ者ならば、古竜に尋ねれば教えてくれるかもしれない。

非常に曖昧だが、アキル達にとってはそれしかしような情報。

3人の次の目的地が決定したのだった。

「ガランガラン山脈の麓には確か人間の町があるぞ…

そこで補給や休息もできるであろっ……」

エルフの村からその人間の町までは徒歩で約1週間だと距離もわかり、明日の明朝から出発すると決めた3人はすぐに空き家へ戻り休息を取ることにしたのだ。

そんな長とアキル達の会話をこっそり聞いていたアルミナスはなにか決心をしたような顔で

ファルミナに言葉を投げかけた。

「オイラ…アキルにーちゃん達と一緒に…」

「だめ！」

「だって！気になるし……」

「それでもだめ！」

「ファルねーちゃんだって気になるだろ？」

「そうだけど…森の外なんて行っちゃダメだって！」

「ガランガラン山脈に行こうとしてるんだよ？ たった3人で…」

「それは…」

「無謀すぎるだろ？ オイラならきつと役に立つし…」

「お爺ちゃんが許すとも思ってるの？」

「でもでも…」

ファルミナは頑なにアルミナスの言動を否定するが

それでもアルミナスの心は折れようとはしない。

「じゃあ…私がお爺ちゃんに聞いてみるからさ？」

それでダメって言われたら諦めなよ？」

「オイラも行く！ それはオイラも聞かなきゃ納得しないよ！」

「わかったわかった…じゃ…一緒にいこうか」

ファルミナとアルミナスはエルフの長、つまり祖父の元へ並んで歩

い
て
い
っ
た。
。

明朝。

アキル達3人の目の前には

旅支度が済んだファルミナとアルミナスがいた。

エルフの長が言うにはファルミナと一緒にならば許可するとの事。

アルミナスはここぞとばかりにファルミナを説得。

簡単に折れてしまったファルミナは渋々納得する事に…

しかし、更なる危険な旅になることが想定されるため

シュウとミスズは

ミズキが見つかるまでの間なら大丈夫だが

見つかったらエルフの村に帰るように言い聞かせた。

納得してるのかしてないのかわからないような表情を見せながら

「じゃ！よろしくな！」

アルミナスは嬉々として一行の先頭に立とうとする。

「とりあえず樹海を抜けるには…番人を倒さなくてはなりません…」

進路を確認しながらファルミナは道順を説明。

番人がいると言われている森の出口へ導く。

道案内がいる事でかなり助かるのだが

やはりあまり迷惑をかけたくはない気持ちもあり

戦闘はアキルとシュウが率先して敵を殲滅するようにしているようだ。

「もうじき…番人が住む地区に入るので皆さん準備だけは…」

「その番人っていうのはどんな奴なんですか？」

「私達よりも背丈は小さいですが…とても凶暴な種族です」

「強いのか…？」

「ええ！強いですよ！種族の名前はアズーキ族といって…」

「アズーキ？…名前に豆っぽい感じですかね？」

「はい！豆ですね…」

「なら大丈夫だ！俺達はそれと似た奴を倒した事がある！」

「さつすがだね！やっぱオイラの見込んだ通りだ！」

「数がとても多く、集団で襲ってくるので注意してくださいね！」

「なるべくみんなで固まってたほうがいいな！」

「こんな時に…良い戦略を出してくれるミズキさんがいれば…」

「ミズズちゃん…それは…」

会話もそこに足を進めていくと

ファルミナの言うように森の番人といわれているモンスターが出現

した。

その数の多さにも圧倒されかけたが……

5人はすぐに戦闘モードに頭を切り替え

迎撃準備に入っただった……

[illegible]

勇者PT

$$\begin{array}{r} > \dot{i} 2 1 6 8 9 \\ \hline 2 9 2 7 < \end{array} \quad \begin{array}{r} > \dot{i} 2 6 8 7 2 \\ \hline 2 9 2 7 < \end{array} \quad \begin{array}{r} > \dot{i} \\ \hline 2 9 2 7 < \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 26915 \\ \hline 2927 < \end{array}$$

アキル

ミスズ

シュウ

属性：水

属性：火

属性：光

$$\begin{array}{r} > \dot{1} 2 7 7 3 8 \\ \hline & 2 9 2 7 < \end{array} \quad \begin{array}{r} > \dot{1} 2 7 7 3 9 \\ \hline & 2 9 2 7 < \end{array}$$

ファルミナ

アルミナス

属性：風

属性：雷

[illegible]

1 - 2

- - - - -

森の番人：アズーキ族

> i 2 8 2 3 4 — 2 9 2 7 <

アズーキウォーリア

属性：土

> i 2 8 2 3 5 — 2 9 2 7 <

アズーキメイジ

属性：土

> i 2 8 2 3 6 — 2 9 2 7 <

アズーキファイター

属性：土

> i 2 8 2 3 7 — 2 9 2 7 <

アズーキソルジャー

属性：土

> i 2 8 2 3 8 — 2 9 2 7 <

アズーキアーチャー

属性：土

- - - - -
- - - - -
- - - - -

見た目以上のスピード。

見た目以上の腕力。

なにもかもが想定外のアズーキ族の軍勢。

アキルとシュウの2人がかりで1匹倒すのがやっとな状態である。

ミスズの炎魔法：ブレイズならば一気に3〜4匹は倒せるが

詠唱に時間がかかる為、そんな暇がない。

詠唱破棄で唱えられる炎魔法：ファイアンマで応戦するのが必死。

ファルミナとアルミナスはいつもどおりに

アルミナスの放った矢を

ファルミナの風魔法：ヴァンで加速させ

回避不可能なスピードで射出する。

さすがにそのスピードでの矢はかわせるはずもなく

1体つつ確実に仕留められていく。

順調に倒しながら進んでいるかのように見えるが

徐々に5人に疲れの色が見え始めていた。

疲れたからといって、攻撃をやめればたちまちアズーキ族が襲い掛かり

最悪の場合、命を落とす事になるのは全員が把握しているため

無数とも言えるアズーキ族をひたすら倒しつつ

森を抜けるしかない。

言わば強制突破状態なのである。

一行に喋る暇などほぼ皆無。

一向に先が見えない深い森の中

ひたすらアズーキ族を殲滅している。

アズーキ族の中にも魔法使いがいる為

必然的に5人はそれぞれ距離を置くことになる。

アズーキメイジが唱える土魔法：アルバは

過去にトーフゴーレムが放った物と威力はまったく同じ。

地面が崩れると同時に地中から岩の刃が突起するものである。

これは避けなければ相当の深手

あるいは一撃で命すら落としかねない非常に凶悪な魔法である。

幸いな事に岩が飛び出る前には必ず地面が碎けるのを

目視できる為、5人は避ける事はそれほど難しくないのだが

その避けるモーションを見計らい、

アズーキウォーリア、アズーキファイター、アズーキソルジャーの
3種

前衛と呼べそうな武装をしたアズーキ族が襲い掛かるのだ。

警戒するのは土魔法：アルバだけではなく

遠距離から

アズーキアーチャーの弓矢が飛んでくる為

常に緊張感は絶やせない。

しかし、アルミナスにとっては敵の矢を再利用できる為

矢の補給には困らない状況なようだ。

無論、こんな状況ではエリクサーの調合などできるはずもなく

5人に平等に分配されたミスズ特製の

『きのご風味エリクサーダングムシ味』は減り続けるばかりで

徐々に回復する手段もなくなり始めている。

蓄積されていくダメージと疲労により

何度もピンチな状況に追い詰められる事もある。

ミスズはこの戦いの中、

先日唱える事に成功した回復魔法：キュラティフをなんとか

意識して放てるように試行錯誤しているのだが

なかなか思うようにいかないようだ。

回復魔法の感覚は一般的な属性魔法と多少異なっていて

繊細な魔力の調整と精神力、集中力が要求されるのである。

しかも、放てたとしても

どれほどの範囲でその効果が得られるのかもまだわからない状態であるため

今のところは攻撃に専念

1匹でも多くアズーキ族を倒す事に必死なようである。

シュウが叫ぶ。

「このままじゃ…やられる！みんな！全力で走るぞ！」

その掛け声と同時に5人は一斉に出口と思われる方角へ走る。

思わぬ行動に出た5人にアズーキ族は困惑し

慌てて後を追いかけてようとするが…

「更なる炎…

それは光り輝く豪炎の槍…

その者の名は……

悪しき輩を貫く炎矛！！

B l a z e ! ! ! ! !
└

絶妙なタイミングでミスズは炎魔法：ブレイズを放ち

追いかけてくる大半のアズーキ族を焼却する。

その一撃が牽制としての役割も果たし

走る事に集中できる時間が出来た。

「今だ！走れ！！！！」

アキルも負けじと声を荒げ、全力で出口を目指す。

なんとか5人の視界が明け、目の前にはちょっとした荒野が広がる。

ポポック大森林を抜けたという証拠である。

「はあ…はあ…」

一行は固まって座り込み、息を整える。

なんとかアズーキ族の領地を突破した事に安堵の表情を見せた。

「ミスズちゃん…平気か？」

「ええ…なんとか…」

「ファルねーちゃん…大丈夫？」

「はあ…はあ…へーき」

「ガランガラン山脈って…あれか！」

シュウは立ち上がり、目の前を見る。

そこにはポポック大森林よりも遥かに巨大な山々が連なっている。

「これから登山か…勘弁してくれ…」

シュウはへなへなと座り込み、ミスズに差し出されたエリクサーを飲み干す。

ここら一帯は荒野な為

エリクサーの材料が見つかるはずもなく

5人は小休止後

いよいよ、ガランガラン山脈へと足を進める事になった。

2 - 1 (前書き)

麓の村 グラガラン

> i
2
8
2
4
3
— 2
9
2
7
<

2 - 1

> i 2 8 2 4 5
— 2 9 2 7 <

> i 2 8 2 4 6
— 2 9 2 7 <

ステータス - - - - -

名前：ゼノンⅡラムザット

性別：男

種族：人間

年齢：31歳

属性：土

得意武器：大剣、斧

タイプ：前衛

パラメータ - - - - -
(S ↓ A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ E)

HP（体力）： S

SP（潜在能力）： E

ATK（腕力）： S

SPD（素早さ）： C

DEX（器用さ）： B

INT（魔力、賢さ）： D

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アキル、ミスズ、シュウ、ファルミナ、アルミナスの5人が

ポポック大森林の奥地でアズーキ族と死闘を繰り広げている頃…

ガランガラン山脈の麓の村

グラガランの村から颯爽と登山を始めた1人の男がいた。

自分の身の丈ほどある巨大な剣を担ぎ

かなりの重さがあると思われる鎧に身を包んでいる。

それだけでもかなりの体力と腕力があると想定される。

凜とした表情で黙々と山道を突き進むその姿は

威厳すらも醸し出し、彼の迫力に小型のモンスターでさえも

見ただけで逃げ出してしまうほどのオーラが出ている。

いくら硬い表皮を持つモンスターでも

こんな巨大な大剣での一撃を食らえば即死は免れるわけもなく

逃げる事も生きる知恵だと主張しているかのように

彼を視界に捕らえただけで逃げていくのだった。

彼（以後、ゼノン）は麓の村、グラガラン公認の勇者であり

グラガランの村でのただ1人の勇者である。

ブックこそは持つてはいないものの

ゼノンがこれまでに倒したモンスターの数と種類は

アキル達の比ではなく

戦闘知識もモンスターの知識も豊富である。

おそらく

ゼノンがカステラの街の武術会に参加していたならば

アキルやミズキ程度の実力者ならば

互角以上の試合を見せただろうと想定される。

それほどゼノンの実力は人間の中でも傑出して高い。

しかし、腕っ節が強い反面

魔法の知識や素質はほぼ皆無であり

アキル以上に魔法を扱う面では未熟である。

使おうと思えば使えるらしいのだが

地面から岩の刃を突出される土魔法：アルバでさえも

ゼノンが使えば岩の刃が出現するまでに至らず

ただ地面にひびが入るだけ……

かなりお粗末な魔法と化しているのだ。

ゼノンは今日もグラガランの村にとって脅威となるモンスターの討伐に

ガラランガラ山脈へ登山しているようだ。

「……………あつちいくな……………」

真上から太陽の光と熱が降り注ぎ

大汗を掻きながらの登山は

かなりきついらしく、思わず暑いと声に出してしまうほどだ。

しかしゼノンはこれも修行の一環として

持参した水を飲みつつひたすら上へ上へと登っている。

まだ31歳と若いが

すでに5歳になる息子がおり一児の父である。

ゼノンの妻は丁度、子供が生まれたと同時に他界

元々身体が弱かったらしく難産だったらしい。

ゼノンの豪快な性格も子供にそのまま引き継がれ

息子は5歳にして村ではガキ大将と呼ばれているほどである。

守るべき存在を村に残している為

ゼノンは決して無茶な戦闘はしない。

危険だと判断したら迷わず逃げる。

自分の双肩には子供の未来もかかっているという重荷を感じながらも

気丈にもゼノンは日夜、勇者業に励んでいるのだった……

2 - 2 (前書き)

ガランガラン山脈

> i 2 8 2 4 9
— 2 9 2 7
<

目的の場所はまだまだ先らしく

ゼノンの足は止まる事がない。

時たま、知能が低いモンスターが襲い掛かるが

巨大な大剣での一撃で粉碎。

まるで重さを感じさせないスピードで振り下ろされる為

避けられないモンスターは一撃の名の下に憤死する。

もはや戦闘とも呼べないゼノンの一方的な攻撃で

苦戦などという言葉がまるで空気のような存在と化している。

今回、ゼノンが討伐するに値すると判断したのは

山頂間近の湖に出現したと言われているモンスター。

なかなかの魔力を持ち、知能もそこそこ高いらしいので

モンスターの軍勢を連れて村に侵略してくる可能性があるらしいのだ。

魔法タイプのモンスターはゼノンにとっては相性が非常に悪く勝てぬとわかったら早々と退避する予定なのだった。

そうこうしているうちにゼノンは目的地へ到達

ひたすら歩いてきた為、喉も渴き足も悲鳴を上げているようだ。

湖を見つけ、そこで一息を入れようと腰を屈む……が

ゼノンの視界に何者かが映った！

「何者だ！」

すぐにゼノンは大剣を構え、戦闘準備にかかる。

「人間か…私になにか用か？」

[illegible]
$$\begin{array}{r} > \textcircled{1} 28250 \\ \hline & 2927 < \end{array}$$

BOSSEMONSTER

アップサラス

属性：水

[illegible]

「ほお……人語を話すのか……」

ひしひしと目前の敵の魔力がゼノンにも伝わる。

暑い事とは別に冷や汗のようなものが額から垂れる。

「用が無ければ早々に立ち去るが良い……」

「用はある！お前に聞く事がある」

「なんと……申してみよ……」

「お前の力は麓の村にとっては脅威だ…

この場から動かぬのならば…討伐する」

「なるほどな…それは懸命な判断だ…

丁度これから周囲のモンスターを連れて

人間どもを一掃しに行くところであつた…」

「それは惜しかったな…お前は俺がこの場でブツ倒す！」

「良い気迫だが…それは自信過剰というものだ…」

「御託は充分だろ？いくぜ！！！」

特攻あるのみ！力で強引にねじ伏せるのがゼノンの戦闘スタイルである。

明らかに魔法タイプであると思われるこのモンスター

魔法を打つ暇を与えるわけにはいかないと瞬時に判断したゼノンは

まるで槍のように大剣を構え、突きを繰り出したのだ！！！！

ゼノンの大剣がアプサラスの身体を貫く！

意外にもあっけなく決着がついたかのように思われたのだが…

まるで水を斬ったかのような妙な手ごたえ。

飛散する水分がアプサラスの身体の構造を予見させる。

おそらく…

物理的な攻撃は効かない。

すぐに身体の再生が始まり

何事もなかったかのようにアプサラスは身体が完全に元に戻る。

ゼノンはアプサラスの反撃に備えて距離を置く。

「今の一撃で勝てぬとわかっただろうか？人間に私を倒す事は不可能…」

不適な笑みを浮かべながらアップサラスの手から水弾が発射される！

水鉄砲のようにも思えるがこれが厄介。

身体能力が優れたゼノンにとって避ける事はさほど難しくなかったのだが

避けた先にあつた巨岩に水弾が当たる。

まるで豆腐を思わせるかのように

巨岩は水弾によって粉々に砕かれた。

「確かに…俺では勝てぬかもしれん…だがな？」

ゼノンは再び大剣を構え、アップサラスを真っ直ぐ見る。

「お前を野放しに出来るほど…御人好しではない！

街のために…ここでお前を倒す！」

無駄だとわかつてはいるものの

ゼノンに出来る事はひたすらアップサラスの身体を切り刻む事

何度も何度も斬っては再生

その繰り返しである。

街の魔法使いの援護があればなんとか倒せるかもしれないのだが

いつも単独で勇者業に励んでいたゼノンには

いくら時間稼ぎをしたところで援護などくるはずもないのだった。

「往生際の悪い人間だな…貴様と遊ぶのももう飽きた…一撃で殺してくれる…」

アップサラスの身体を水を表す青いオーラが包む。

（魔法か…しかもこいつは…初級魔法じゃねえ…）

尋常ではない魔力がアップサラスから放たれている。

「詠唱してやろう…その間…我に挑んだ事を後悔し

懺悔しながら平伏しているが良い…」

余裕を持ったアップサラスの魔法詠唱を不動のまま聞くしかできないゼノン。

魔法の知識はないが…

この強大な魔力、そして殺すと述べた事から攻撃魔法だと言つ事は悟れた。

（チッ…どうすれば…）

詠唱が開始され、もはやゼノンは棒立ち状態である…

（すまん…息子よ…俺はここで死ぬかもしれん…）

「天地に渡りて流れし水よ…

永久に続くその流れを持ちて…

全てを飲み込む大渦となれ…」

詠唱とともに更に青いオーラが激しく包む。

（もはやこれまでか…）

既に自分の死地を悟ったゼノンは

目を瞑り、敵の一撃を待つ体勢を作っている。

「さあ…死ぬが良い…」

フレンジア
Floodー!

- - - - -
- - - - -

Flood 読み フラッド

水属性中級魔法

マイムを詠唱破棄できるほどに魔力が増した者のに発動可能。

直接的な攻撃魔法ではなく

巨大な水柱を作り出し、相手を溺死させる。

水柱の強さは放った者の魔力に依存する。

- - - - -
- - - - -

ゼノンの足元から水柱が発生！

瞬時にゼノンの身体を水が包む！

予想外の魔法にゼノンは戸惑ったが

この魔法の効果をすぐに理解したゼノンは息を止める。

「何分持つか…見物だな…」

私は溺死する寸前の苦痛に満ちた表情を見るのが好きなのだ…

楽しませてもらうぞ…」

水柱の先に立っているアプサラスは

きつと悪魔のような笑みで見ているだろう…

（無念…）

5分ほど息を止めていたゼノンであつたが

ついに口から水泡が漏れ始める。

酸素の欠乏により意識が徐々に薄れ始めていたのだった……

ポポック大森林を抜け

荒野を突き進み、やっと麓の村『グラガラン』に到着したアキル達。

戦闘を重ね、更には荒野をひたすら進むという極限状態であったため村に到着した瞬間力が抜ける。

極度の過労でミスズが発熱し

かなり危険な状態になったものの

治療院で適切な処置を受ける事が出来どうにか安定した。

今は宿屋でファルミナがミスズに付き添っているため

アキル、シュウ、アルミナスは情報収集に勤しんでいる。

村人の情報は古竜の噂よりも

「一週間ほど前にガランガラン山脈に魔物の討伐に出掛けた勇者が

未だに帰ってこないのは非常に心配だ…」

「未だ父親が帰ってこない勇者の息子が不憫で仕方が無い…」

どうやらガランガラン山脈に勇者が魔物退治に出掛けたまま帰ってこないという…

なにやら放っては置けない状況であるらしい。

「同じ勇者としてこれは確かめに行く必要がある」

「俺もそう思います…」

「オイラもそう思う！勇者さん無事だといいいけど…」

3人の意見は完全に一致。

更に

「最近、ミスズの魔法に頼りすぎて事もある…」

「ここは精進の為に俺らだけでいくのがいいんじゃないか？」

「同感ですね…俺も早く魔法を戦闘で使えるようにならないと…」

「ファルねーちゃんがいなくても…オイラは戦えるぞ！」

ミスズに負担をかけすぎているとシュウは判断し

看病をしているファルミナに事を説明し

後日、アキル、シュウ、アルミナスの3人で登山に出掛ける事となった。

村でエリクサーなどの消耗品を補給し

いよいよ、3人は明朝から登山を開始した。

出発する前にファルミナから

「山の山頂付近で水属性の強い力を感じたので…

皆さん気をつけて…」

と…敵の属性は一応把握する事が出来た。

村の勇者が討伐に出掛けたというモンスターはおそらくその

水属性の敵だろうとすぐに判断できた。

各々不安を感じながら

予め渡されたガランガラン山脈の地図を見ながら

3人はひたすら山頂を目指していった………

1 - 4 (前書き)

ガランガラン山脈

> i 2 8 7 4 3
— 2 9 2 7
<

さすがにガランガラン山脈に生息しているモンスターは

ポポック大森林のモンスターよりも格段に強い。

ミスズとファルミナがないのは正直きついと呼べる戦闘を繰り広げる。

遠距離、中距離、更には詠唱破棄の初級魔法を普通に使用してくる。

アキルでさえ、敵の動きを読む事に必死で

他の2人のフォローに回る事が出来ない。

シュウは何度もピンチに追い込まれ、かなり苦しい戦闘である。

アルミナスもファルミナの援護がない事で

思うように敵に弓矢をヒットさせる事が出来ない。

一旦引き返すかとアルミナスが提案したが

男としての面子、プライドを捨てたくないアキルとシュウは

「こんな敵くらい簡単に倒せるようにならないと

意味が無いんだ！」

「ミズキならば…こいつらでも簡単に倒すだろうしな…」

真っ向からアルミナスの意見を否定。

このまま山頂を目指すの一点張りである。

しかし

思ったよりもエリクサーの消費が激しく

とても目的の場所につけそうも無い事態に陥っていたのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

更新されたモンスター

> i 2 8 7 3 5 — 2 9 2 7 <

サカナモドキ

属性：水

> i 2 8 7 3 6
—
2 9 2 7 <

テントームッシー

属性：光

> i 2 8 7 3 7
—
2 9 2 7 <

トロロテン

属性：氷

> i 2 8 7 3 8
—
2 9 2 7 <

ギャングラビ

属性：風

> i 2 8 7 3 9
—
2 9 2 7 <

テツナマコ

属性：闇

勇者が向かったと思われる場所を確認している。

アルミナスは弓矢の残数を確認しながら

木の枝を見つけては削り

即興の矢を作っている。

「ここに泉があるな…おそらくはこのあたりじゃないか？」

「水属性の敵なら…その周辺を拠点にしていそうですね…」

「とりあえず…目的はここだな？」

「エリクサーの残数が少ないので出来るだけ最短ルートで…」

「そうだな…体力にも限界つてもんがあるしな…」

「にーちゃん達！オイラも話に混ぜろよー！」

再び3人は山頂付近の泉を目指し行動を開始したのだった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6087u/>

Trivial Story

2011年8月5日19時55分発行